

---

# 魔法少女まどか マギカ マジか？

深冬

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女まどか マギカ マジか?

### 【Zコード】

Z7372S

### 【作者名】

深冬

### 【あらすじ】

とある少女の願いに巻き込まれた少年は、永遠とも言える時間の繰り返しに人を信じる事を止めた。

そんな少年の苦悩とほんの小さな幸福を綴った物語。

……になる予定。どうなるかは知らん。

一応、完結しました。

本作に杏子成分を期待してはいけません。

## 第1話 お前は……何なんだ？（前書き）

まず初めに、感想やお気に入り登録は作者の励みになりますことを宣言します。

特にお気に入り登録は臆病な作者にとって最も嬉しい事だったりします。あつ、もちろん評価も嬉しいです。

また、独自解釈があります。

それと初っ端から十話以降のネタバレがあります。  
まだアニメを観終わっていない方はアニメを楽しむために読まない方が良いです。

原作の内容を知らなければ、本作を理解出来ません。

質問等あれば感想までどうぞ。

## 第1話 お前は……何なんだ？

その日、俺を取り巻く世界は終焉を迎えた。

比喩とかそんなチンケなモノではなく、俺の住む地方都市である見滝原町に突如としてスーパー・セル　　俺も良く分かんないんだけど、この避難所に来る前に確認したニュースでは非常に激しい嵐だとか言っていた。

周りには俺と同じくこの体育館に避難してきた人達が身体を寄せ合つて、この大災害が去るのを震えながら待っていた。

だけどそれは希望的観測に過ぎないと、俺は子供ながらに思つていた。

なにせ、この避難所に来るまでに俺は激しい雨や突風、それに伴う被害級の落雷なんかをこの身で体験している。

それにこの体育館から外を見てみれば、道路は水浸しになつて、さらに突風や落雷で倒壊している建物なんか見える。

ああ、ここで俺の人生は幕を閉じるのか……。

いつまでこの体育館が持つかもわからない状況で、俺は悲観していた。

ただただ俺は普通に生きてきただけなのに、なんでこんな人が大勢死ぬような災害に巻き込まれているんだろう。

神が存在するとしたら、きっとソイツは気まぐれに人を救い、気分で人を殺す。

憎くてしょうがなかつた。

一体俺は何をしたんだ？　どうして俺はここで死ななくちゃいけないんだ？

神とやらを罵倒しようにも良い言葉が見つからず、そんな疑問ば

かりが頭を駆け巡った。

俺は震える身体を必死に堪えるよつて首から提げた十字のネックレスを握り締めた。

\*\*\*\*\*

気付いたら一ヶ月前に戻っていた。

いや……先ほどまでのあの悲惨な光景は悪い夢だったんだ。 そうだ、きっとそうに違いない。

ベッドから起き上がり携帯を開き時計を確認した状態で、俺は心のどこかで否定してくる自分を否定する。

それが俺に出来る唯一のことだ、どうしようもない悪夢から逃れる手段だった。

だつた……。 そう、過去形でしか無かつた。

あの最悪の限りを尽くす見滝原町の惨状は繰り返された。

自分が悪夢だと決めつけて納得したのにもかかわらず、全く同じ日に、全く同じ場所でスーパー銭湯は発生した。

まさか自分は未来予知でもしてしまったんじゃないかと思つて、この状況になることを周りの誰かに話すことしなかつた自分を責める。

夢と同じ避難所である体育館の片隅で俺は膝を抱えながら自己嫌悪に努めた。

なんで俺は自分の夢のことを誰にも言わなかつた?  
頭がイカれたんじやないかと心配されると思つた。

だとしても言うことに意味があつたんじゃないかな?

自分一人が友達の輪から弾かれて孤独になると思った。

もう一人の自分がどうしようもなく嫌いになつた。  
俺が自分の行いを正当化しようとしているのに、もう一人の自分がそれら全てを否定していく。

同じ事を何度も何度も何度も。

後ろから俺の耳元でもう一人の自分が囁いてゆく。

うわああああああああああああああああ

轟々と雨の音が体育館に響き渡る中、俺の叫び声が木靈した。

\*\*\*\*\*

パパパ、パパパ、パパパと朝を告げる田舎まし時計の音が部屋に響く。

それをぬぐぬぐとした布団から嫌々ながらも手を伸ばすことで静かにさせる。

ハツ！？

寝惚け眼を擦ることさえもせずに眠気を吹き飛ばし、急いで携帯を開き日付を確認する。

ハハハッ……。自然と乾いた笑い声が口から零れた。  
表示された日付はあの災害からちょうど一ヶ月前。  
もう何がなんだかわからなかつた。

この状況を打破する方法もわからなければ、どうしてこんな事態

になつたのかも分からぬ。

俺は自分が三度目の時を過ぎてしていること以外を両親や友達に正直に話した。一ヶ月後に来るスーパー・セルによつてこの見滝原町が滅茶苦茶になることを。

そして、俺は孤独になつた。

友達には訳わからぬ事を言つてゐるヤツだと見放され、両親には精神病棟のある病院へと連れていかれた。

奇しくも二度目の時にもう一人の自分に言われた通りになつた。孤独になつたその日から自分の部屋に引き籠もつた。

誰もかれもが信じられなくて、自分さえも信じられない。もうどうしたら良いかわからなかつた。

そしてもはや予定調和のようにスーパー・セルが見滝原町を襲つた。

はははつ、さまあみる。俺の言つた通りになつたじゃないか。みんな俺の言つことを聞いて見滝原町から避難していたらこんなことにならなかつたんだ。

アハハハハハッ……。

\*\*\*\*\*

四度目。

ここまでくると何にも感じなつてきた。

三度目と同じように孤独になんかなりたくなかったからスーパー・セルのことは黙つていることにする。

もう嫌だ。

目覚めてから一週間。俺はそんな風に思つよつになつてきた。  
分かつてゐんだよ。どうせこの先もずっと繰り返すんだろ?  
俺はこの一ヶ月に永遠に囚われることになるんだ。

嫌だ嫌だ嫌だ。

俺の体感で三ヶ月と一週間。多少の差異は見受けられても同じ内容の繰り返し。

心が壊れそうだった。

自分がこの永遠に進まない時間に取り残されているよつて思えてならない。

だったら、いつ死んでみよつかと思つた。

そしたらこの連鎖からも解き放たれるかもしねりない。

その日、俺は喉元にナイフを突き立てた。

\*\*\*\*\*

結果から言えばこの繰り返す時間は終わることは無かつた。  
確かに自殺したはずなのに気付けばあの日の始まりの朝。  
気が狂いそうになり、ベッドから飛び出て台所にあつた包丁で自分  
の首を搔つ切る。その行為を目覚める度に繰り返した。

何度も死んだかはもう分からない。

初めのウチは回数を数えていたが、十を超えたあたりから数える  
事を止めていた。

目覚めたらその足でふらふらと台所まで行き包丁で自分を殺す。  
そんな単純作業を何度も繰り返した。

だが、そんな俺の今日とこいつ日に異変が起きる。

『やあ

もう何度田にならぬかわからぬ口の朝。田覚めた俺の田の前に形容したい生き物がいた。

ネコとウサギが組み合わさったような四足歩行の生き物。身体は白く、毛とも触手とも見えるつにょんとしたモノを耳から伸ばしている。背中には丸い穴のような赤いライン見える。

「お前は……何なんだ？」

これまでの今日とこいつには無かつたことだ。

ソイツは掛け布団の上に屈て、起き上がった俺のことをくづくづくつとした田で俺を見てくる。

『それはこひらのセリフかな。なんなんだい、君は？ 僕の経験上、君のような存在は始めて見るのだけど』

「は……？」

この出合いで俺の運命を変えることになる。  
空回りだった歯車はよつやく噛み合わさり始めた。

## 第2話 だつたら少し考える時間をくれ

突然の事態だつたが、なんとか平常を取り戻して未知の生き物と言葉を交わす。

『ふむ、確かに君の話は興味深いね。それが君の頭の中にある夢物語ではなく、本当に僕らの認識の外で時間が繰り返されているとしたら、それはもはや驚嘆に値するよ』

キュウベえと名乗つたそのネコのよつなウサギのよつな生き物は、俺の頭の中に直接語りかけてくる。これが所謂テレパシーといつモノなのだろう。

「違うつ！ 僕の妄想の産物とかそんなんじやなくて本当に時間が繰り返してるんだよ！」

『まあまあ、少し落ち着いてくれないかな。それにそんなに怒鳴らなくても頭の中で念じてくれれば僕に君の言葉は伝わるよ』

焦りすぎでいたらしい。でもそれは仕方がないことだと割り切る。死んでも続く永遠の連鎖に俺は飽き飽きとしていた。  
だからこうして、これまでとの差異が目の前に現れたら落ち着いてはいられなかつた。

一度落ち着くために深呼吸をする。

『これで良いのか？』

『ああ、バツチリ聞こえてるよ』

それにしてもこの生き物と良い、テレパシーと良い、まさに非現実的と言つて差し支えない。

だから俺はキュウベえに希望を見出す。

時間が繰り返すことも非現実的で、目の前の生き物も非現実的な存在。

もしかしたら、この生き物が俺を永遠の連鎖から解き放つてくれるんじやないかと期待していた。

『それで君はどうしたいんだい？』

そんなのは決まってる。

『俺をこの永遠と繰り返す時間から解き放ってくれ』

『どうしてかな？ 僕の知る限り君たち人間は不老不死を渴望するじゃないか。言わば今の君の状態は人間誰もが羨む不老不死となんら変わらない。それはそれで良いことだと僕は思うよ』

『……ちつとも良くないよ。確かに人間最後には不老不死を望んでいるかもしれない。だけども、予定調和のように繰り返されるだけの世界で生きてるだけってのは俺には堪えられない』

『うーん、見解の相違ってヤツだね。僕には理解できないや』

無表情のくせに頭の中に伝わってくる声だけは笑つてゐるように聞こえる。

それが堪らなくイライラするが、今は我慢するしかなさそうだ。

『それで俺の時間を進める事は出来るのか？ もしくは俺の存在を消しても良い。どちらにしても俺をこの時間から時は放つ方法は無

いのか?』

俺という存在が消えたって良い。

それでこの連鎖から解き放たると言つなら安い対価だ。どうせ俺が消えたところで、意識も無くなるわけだから苦しむことは無いだろう。生きて時間が進んだ方が良いことは確かだが、それでも俺はもう繰り返すぐらいうら消えた方がマシだつた。

『君の話が本当か嘘かは分からぬけど、可能か不可能かで聞かれれば可能と答えるしかないね』

「本当かッ！？」

『気づけばテレパシーなんて存在も忘れ、キュウべえに掴みかかつていた。』

『やれやれ。君は少々せつからなところがあるみたいだね。さつきも言つたけど、君はもう少し落ち着くべきだよ』

『ああ、悪い』

突然掴みかかったのにもかかわらず無表情のキュウべえを離す。

『それでどうしたら俺はこの繰り返しから解き放たれるだ?』

『簡単な事だよ。僕に願えば良い。そしたら僕がどんな願いでも叶えてあげられるんだ』

『だったら、早く俺を解き放ってくれよッ！』

『だから君は少々せっかち過ぎだつて。僕に願うことができるのは僕に選ばれた女の子だけ。その女の子は願いの対価に魔法少女として「魔女」と戦う使命を課されることになるけどね』

『どうしてここでそんな事を言い出すんだ？』

キュウベえの言つていることが一瞬理解できなかつた。だが、思考を廻らせていくと一つの回答に辿り着く。

魔法少女とか魔女とかはよく分かんないけど、キュウベえに願うことができるのはキュウベえに選ばれた少女だけ。

どんな願いも叶うことになるのなら、その選ばれた女の子に俺のことを解き放つように願つてもらえれば、俺はこの永遠に繰り返される時間から解放されることになる。

『ははは……、それじゃあ願つてくれた女の子は俺のために魔女とやつと戦わなくちゃならなくなるつてわけか』

『そつとつになるとなるね。もともと僕は魔女と戦つてくれる魔法少女を生み出すために存在しているからね。その過程において君のよくなき異質な存在の介入があるつとも僕の知るところではない』

淡々と言葉を並べるよつと喋るキュウベえ。

その瞳は相変わらずくつくつとして向を考えているのかよく分からぬ。

無表情であるのにもかかわらず、その淡々とした語り口調に恐怖を感じさせる。

『念のために聞くが、俺がキュウベえに願つことは出来ないんだよな？』

『君は生物学上男に分類されているだろ？ 魔法少女になれない君の願いを叶えたところで僕らに何ら益はないじゃないか』

良くも悪くもキュウベえは合理主義者らしい。

物事を全て理性的に割り切って考えるところは、利益さえ提示し続ければそれだけ信用できることになる。

「そりが……。だったら少し考える時間をくれ」

そう言ってベッドにぐろんと横になる。  
腕で眼を覆い、脱力した状態で考える。

『まあ、僕としてはどれだけ時間がかかるかとも良いんだけど、君には時間が無いんじゃないの？』

そうなのだ。コミットは一ヶ月後。

今日からちょうど一ヶ月後にはまた今日と同じ日に戻つてくれる』  
になる。そして戻ったからと黙つて、またキュウベえに出来るとも限らない。

だから早く決めなればならない。

この先もずっとこの一ヶ月を繰り返すのか、自分のために女の子を戦いの道に進めせるのかを。

どうすればいいんだ。

例え俺のために願つても叶はつとしても、叶はつて願つても叶はつとかまったく考えられない。

いきなり俺のために願つてくれとか、魔法少女になつてとかいつも信じられる訳がない。

ああ、本当じどうすれば良いんだろうな。

### 第3話 やっぱり無い物ねだりはダメだよね

少々キユウベえという未知の生き物と話しこんでしまったが、学校が始まる時間が差し迫ってきたのでベッドから飛び起きて急いで制服である学ランを羽織る。

超特急で朝食を畠袋に収め、「行つてきます」と母親に告げ家を出る。

懐かしいとさえ思える行動だった。

この一ヶ月が繰り返される前に当り前にやつていた朝の一風景。正確には繰り返しが始まつてからも少しの間だけ同じように「行つてきます」とつて言つていたつ。

「最近は目覚めたらすぐに首を搔つ切つていたから久しぶりに言つたな。

そんな懐かしさに身を委ねながらも俺は隣を歩くネコとウサギの会わさつたような生き物とテレビパーで会話をしながら学校への道を進む。

『なあ

『なんだい?』

『見滝原町に魔法少女つているのか?』

朝食を食べている最中に気になつた事を聞いてみる。

『いるよ。現在この町にいる魔法少女は合計で一人かな』

あつさつと返ってきた答えに俺は内心驚いた。

キュウべえのことは信用しているが、いつも簡単に答えてくれるなんて思つてもみなかつた。

もともと俺は部外者な訳だし、それにキュウべえは自分のことを魔法少女を生み出す存在と言つた。だから魔法少女のことは基本的に喋つてくれないと思つていた。

だから良い意味で期待を裏切つてくれて助かつた。

進めていた歩みはやがて大通りへとさしかかる。信号は真つ赤に染まり、一時停止を促してくれる。

『そう言えば、お前つて他人には見えないんだな』

視線を向けた先にいるキュウべえは、俺と同じように信号止めにあいながらも尻尾をフリフリと振つていた。なにか良い事でもあつたのか？

それはともかく、先ほどから何人かの人とすれ違つたのにもかかわらず、その全員がキュウべえなんていない風に通り過ぎていつた。普通ならこんなネコとウサギの合わさつたような珍妙な生き物がいたら声をあげて驚かないとしても、凝視されるか最低限二度見ぐらいはされるはずだ。

それが無かつたとするとキュウべえの存在が認識されてないことになる。

『君の言つた通り僕の姿は普通の人間には認識される事は無い』

『普通の人間？』

気になることはすぐに訊く。

それがタイムリミットのある俺ができる最良の選択だ。

『君みたいに大量に魔力を持つ特殊な人間以外の「ごく一般的にこの星に住まう人々のことだよ。ちなみに特殊な人間には魔法少女も該当するよ』

そのキュウべえの言葉を聞いて俺は額に手を当て溜め息をつく。

『どうしたんだい？ 気分でも悪くなつた？』

『いや、認めたくない現実つて他人から聞かされると結構堪えるなつてさ……』

『ちょうど信号が青に変わり休めていた足を再び稼動させる。心なしか先ほどまでよりも足取りが重く感じた。

『俺に大量の魔力があるつて言つのは初耳なんだが、どういうことだ？』

このましましょげていても始まらないので現状を正しく把握するために訊く。

『さあ？ それは僕にもよく分かんないんだけど、僕の見た限り君は魔法少女と比べても遜色のないほどの魔力を保持していることは確かだね』

もしかしたら俺は人間を止めてしまつているのかもしれない。

『だつたら俺は手を翳しながら『ファイア』とでも叫べば手から炎が出んのか？』

『ハハハツ、そんなわけないじゃないか。確かに君は大量の魔力を

その身に宿しているけど、魔法少女で無い君はその魔力を身体の外へと放することなんてできないよ。もしかしてファンタジーの世界と勘違いしたかい?』

黙れ生きるファンタジーが。

存在そのものが俺にとってのファンタジーであるキュウベえにそんな事を言われイライラする。

『僕としては君の性別が女だったら嬉しかったんだけど、やっぱり無い物ねだりはダメだよね』

『俺は男だ』

ちゃんと自分の性別について宣言しながらも、そんな会話のやり取りをしつつ、やがて俺の通う中学に到着する。

校門を田の前に俺の足が止まる。

思い出されるのは俺を訳わからぬヤツだと決めつけ孤独にした友人たち。

だけれどもその友人たちはそのことを憶えていないだろう。

『早く入らないと遅刻しちゃうんじゃないかな?』

『ああ、そうだな』

俺は迷いを振り切つて歩を進めた。

\*\*\*\*\*

見滝原中学校。そこが俺の通う学校だ。

ここら一帯では一番歴史のある学校で、数年前に数年前に全面的な改築がなされて最新の設備になつたらしい。

俺が入学した時には改築が終わっていたのでイマイチ実感は無いが、校舎が新しくて少しだけ得をした気分だ。

俺の学年である一年生が牛耳つてている階に足早に進み、教室に入つて自分の席に座る。  
ついてこなくても良いのに、キュウべえは俺の椅子の下に入りこんできた。

授業が始まり退屈な時間が到来する。  
すでに一、二度は聞いた内容だ。元来勉強好きでない事を加味しても、新鮮味が無くてつまらない。  
仕方が無いのでキュウべえと会話することでの退屈な気分を紛らわせようとする。

『さつきはこの町に一人の魔法少女がいるって言つてたけど、どちらかと念ひつけて出来るのか?』

『うーん、どうだろう。僕としては彼女たちに無理強いさせられないから、彼女たちに確認しないと分からぬかな』

『だったらアポを取つてくれたら嬉しい』

『それならお安い御用だよ。彼女たちがOKつて言つてくれるかわからないけど一応聞いてみるね』

そう言ってからキュウべえは俺の椅子の下から這い出て教室からも出でいった。

あつ……。退屈を紛らわせるための話し相手がいなくなってしまった。

後悔するもそれ以上に魔法少女に会つてみたいという欲求が勝つ。もしかしたら非現実である魔法少女が、同じく俺に襲いかかっている時間の繰り返しという非現実を何とかしてくれるかもしれないという期待に胸が膨らむ。

そんな簡単に済む問題というわけでもないが、それでも俺にとってはやっと見つけることができた希望なんだ。

それを想つと、これくらいの退屈には負けていられないな。

## 第4話 僕は魔法少女になつてよつてお願いするんだ

昼休みに予定調和の「ごとく」一つは慣れた教室への転校生についての噂が俺の元へとやつてくる。

なんでもその転校生とやらは、たいそうな美少女で学業も優秀といつ絵に描いたような完璧な人間らしい。

俺のおぼろげになつた繰り返し初期の記憶を辿れば転校生のことは噂になつた事は間違いないのだが、こんなに美少女だと騒がれてたつけ？

曖昧な記憶を頭の片隅で辿りながらも、その一方で自分の居場所とばかりに俺の椅子の下に戻ってきたキュウベえとの話に花を咲かせる。

『おめでとう。君の要望通り一人だけだけど、君と会つても良いつて言ってくれた魔法少女がいたよ』

『その人に俺のことば?』

『まだ君については会つたがつてると言つこと以外、何も言つてないよ。君としても自分のことをペラペラと喋られたくはないだろうしね』

まーな。信用できるか分からぬヤツに俺のことを話されたら堪つたものではない。

例え相手が魔法少女という非常識な存在だったとしても、きっと俺の方が特異な非常識な存在だろうから慎重にならざるを得ない。時間を繰り返していくつてソイツにいきなり話しても信じられる保証はないしな。

その点をキュウベえは心得ているらしく、言い忘れていた俺とし

ては助かつた。

『放課後に校門で待つてるそうだよ。でも、あんまり来るのが遅いと帰っちゃうかもだつて』

『それなら遅れないよつにしないとな』

昼休みが残り僅かになつたを教室に備え付けられている丸時計で確認する。

さて、放課後までまた退屈な授業だ。

暇潰し対策の四足動物も帰つてきたことだし、放課後まで魔法少女について聞いてみるか。

## 魔法少女

キュウべえに教えてもらつたところによると、魔法少女はキュウべえと契約した元はどこにでもいそうな少女だつた存在らしい。

その契約とは、キュウべえがどんな願いでも一つだけ実現させる事を引きかえに、魔法少女となり魔法を駆使して魔女と戦う使命を課されることになる。

ここまでには朝聞いた内容とさほど変わりないが、確認のためにもう一度聞いた。

そのことを踏まえて考えてみると、俺は“どんな願いでも”といつのがこの契約の危うさだと思う。

まあ、魔法少女になることが出来ない俺が考えることではないと思うが、どんな願いでも叶えられるという対価が魔女と戦うだけというのを考えられない。

吊り合わないのだ。魔女がどれほど強さなのか分からぬが、それでも命を賭けて戦うだけではどんな願いでも叶えられるという権利と等価値ではないはずだ。

その程度のだったら、俺がキュウベえと契約したい。

魔女と戦うぐらい、なんだよ。この永遠とも知れない時間から解き放たれる事を考えれば安いもんだ。

そのことを素直にキュウベえに話すと、『朝も言ったけど、君は魔法少女になれないよ』とつれないお言葉をいただいた。

しかしそれ、そんなキュウベえの反応は予想通りだったのでも特に何も思うことも無く、魔法少女についての新たな情報を話す様にキュウベえに促す。

キュウベえによると、契約によつて少女はソウルジエムといつ宝石を生み出すらしい。

そのソウルジエムは魔法少女の魔力の源で、それを手にして魔女と戦う使命を課された者を魔法少女といつよつだ。

『さつきからちょくちょく話に出てくる「魔女」とは、一般的に人間たち想像されてる「魔女」のことで良いのか?』

魔法少女が戦う相手である魔女についていい加減気になつたので訊く。

これまでの話から想像するに、どんな願いでも叶えられる奇跡を対価にしなければ吊り合わないほどの凶悪な存在ということになる。でなければおかしい。

『うーん。僕は一般常識に詳しいわけじゃないけど、おおよそ合つてるかな』

『おおよそとは?』

『要するに「魔法少女」が希望を振りまく存在なら、「魔女」は反対に絶望を撒き散らす存在なんだ。一般的に世間でよくある理由が

ハツキリしない自殺や殺人事件は魔女の呪いが原因なことが多いね。ただ魔女は異形の存在なので普通の人間には認識することすらできないんだ。その点において君たち人間が認識している「魔女」とは違うところかな』

なるほどな。『魔女』と『魔法少女』は対の存在で、魔法少女でなければ知覚すらできない。しかも魔女は人間にとつて悪い事をするから魔法少女が倒さなければならぬ。

こういう構図になるわけか。

『つまり魔女は負の存在であり、放置していくはよくないからキュウベえが魔法少女を生み出すことで駆逐していくと言つわけか』

『細かいところは違つていいけど、そういうことになるね。そのために僕は魔法少女になつてよつてお願ひするんだ』

ふふん、と得意げに鼻を鳴らすキュウベえ。俺とキュウベえの位置関係上顔を窺い知ることは出来ないがそんな感じがした。

\*\*\*\*\*

退屈だつた授業も終わり放課後。

俺は朝登校した時と同じく足早に教室を後にする。もちろん友人との別れの挨拶を済ませてからだ。孤立はしたくないし。

下駄箱に收められている外靴と学校生活で履いていた上履きを入れ替える。これから魔法少女に会うと言つことで少々考え方をして靴を上手く履けなくて焦つた。

四苦八苦しながらも履いた靴で授業が終わった解放感を胸に抱き

ながら昇降口から出て、待ち合わせ場所である校門に向かう。

校門は下校していく生徒たちの話声で賑やかだったが、待ち合わせ相手の魔法少女らしき女的人はない。

キュウベえは校門によじ登り自己主張を始めたので、俺もそれに倣い校門に背を預けて腕を組む。

『なあ、今から俺が会う魔法少女ってどんな人なんだ？』

『そりゃ君にはマミのことはまだ話してなかつたね。田マミって言ってね、君と同じくらいの学校に通つてる』

『ふーん』

一応魔法少女と言つだけあって、同じ学校に通つてることはず想していた選択肢の中の一つにあつた。

これでもし、学校の外からオバサンがやつて来たら詐欺で訴えて良いレベルだと思つ。

俺はそっと息を吐き、巴さととやらが来るのを待つことにした。

## 第5話 先に謝つておへやめ、いめをなさいね

待つこと十分。まるで舞踏会での壁の花のようだに校門に背を預けていた俺の元に、校門の上に我が物顔で居座っているキュウベえを目にしながら小さく手を振りながら歩いてくる。

金色の綺麗な髪を両サイドで垂れ流す様に髪留めで括り、毛先はくるくるとパークをかけた風に見える。物腰が柔らかそうな印象を受け、落ち着いた雰囲気も漂わせていた。

失礼の無いように校門に預けていた背を浮かせて彼女を迎える。

「あなたが私に会いたいって言つてくれた子で間違いないわよね?」

「ええ、そうですよ。ちょっとあなた方が氣になつたので、会えるようにキュウベえに頼んでみたんですよ」

対人関係の基本は笑顔。そして嘘偽りの無い眞実であると俺は思つていて。必要以上の眞実を話すかどうかは別として。

『やあ、マリ。僕としては彼と良好な関係を築いていきたいから、できる限り彼のしたい事に協力してあげて欲しいな』

「安心してキュウベえ。私としても彼のことをいきなり邪見に扱おうなんて思つてもいいから。それじゃあ、立ち話もなんだし行きましょうか、ええつと……」

「向井です。向井キリト。一応一年生です。どうぞ好きなように手でください」

どうやらキュウベえは巴さんで俺の名前を教えていなかつたよう

だ。というか、どの程度まで俺のことを教えているかが気になるところだが、それを今訊こうとテレパシーを使っても巴さんにも聽こえてしまつので失礼にあたるだろ？から止めた。

「そう、じゃあ私はあなたのことを向井君って呼ぶことにするわね。あ、ごめんなさい。自己紹介がまだだつたわね。私の名前は巴マリ。向井君より一年先輩だけど、そんなに気にしなくても良いから」

ようしきね、と巴さんが右手を差し出してきたのでこちらも右手を差し出して手を握り合つ。そこで校門を通りすぎる周りの生徒たちが俺たちの方に視線を向けていることに気がつき、少し恥ずかしかつた。

巴さんが恥ずかしがつてている様子は見られず、一人だけ赤面してしまつ結果になつてしまつた。やはり巴さんのような美少女は他人からの視線に慣れているようだ。

「行きましょうか向井君」

「ええ、早く行きましょうか巴さん」

柔らかい感触だつた巴さんの手を離しきつた俺の手との繋がりを断つ。

明日の朝、美少女と手を握り合つてたなんて噂が経ちかねないことに不安感の残しつつ、俺たちは学校の外に出ることにした。

俺たちを先導するように田の前を歩くキュウベえを普通の人人が見ることが出来たら非常にシユールな光景に見えただろ？

\*\*\*\*\*

田さんには俺の身の上話をしていると、いつの間にかキュウベえがいなくなっていた。田さんは特に反応しないことからあいつは神出鬼没なヤツなのかもしれないと思いつつ勝手に思い込む。

「へえー、それじゃあ向井君は何度も何度も同じ時間を繰り返していくことなのね」

本当にキュウベえは俺のことを田さんには全然話していないかったらしい。普通なら俺のことを知った上で会うことを決めるんじゃないかと思うが、そこは田さんのキュウベえへの信頼が厚いのか、もともと田さんが優しかったかの一択だろう。

でなければ、例えキュウベえが仲介を受けたからと言つて、魔法少女に会いたいと言つ理由を伝えただけでは応じてくれないはずだ。その証拠にもう一人の魔法少女は会つてはくれないみたいだし。

「それにしてソウルジエムつてそういう使い方をするんですね。キュウベえからは魔法少女の魔力の源としか訊いてなかつたから驚きましたよ」

田さんの持つソウルジエム視線を向けた。

ソウルジエムは卵のような丸みを帯びた形状をしており、田さんはソウルジエムの上部にひもを通すことで首から提げて持ち運びしあいようにしているようだ。色は彼女のイメージにピッタリな黄色である。

「ああ、これね。こうやって魔女の魔力の残り香を探しているの。反応があれば光るから毎日こうして街中を歩いているのよ」

もともと巴さんは今日も魔女の搜索をしようとしていたらしく、そこに俺が会いたいなんて言つたもんだからその搜索に同行すると、いつ形で会つてもらつていいのだ。

そのことを聞いた時には少し悪い氣もしたのだが、巴さんは「絶対に魔女が見つかるつてわけじゃないから良いのよ」って笑顔で言つてくれたのでそこからは特に何も思わなくなつた。

「特に交通事故や傷害事件……自殺なんかが起きた場所に魔女が潜んでいる場合が多いわ。だから私はそういう場所を優先的にチェックするの。……って、向井君が訊きたいことは」は「ううう事じゃなかつたわね」

「あつ、いえ、そんなことないですよ。俺にとつては永遠に繰り返す時間も、巴さんみたいな魔法少女や魔女と言つた存在も同じ非常識的なモノに変わりないですから。少しでも自分がこの連鎖から抜け出る可能性があるなら知識として得たいところです」

「先に謝つておくけど、『めんなさいね。私からしたら向井君が言つている時間の繰り返しているつていうのが信じられないの。私自身の時間も無いし、向井君に教えてあげられる』ことは少ないわ」

「そんなことないですよ。巴さんが魔法少女や魔女のこと教えていただいていることだけでも俺としては助かっています。これまで何度も何度も、気が狂いながら繰り返してきた時間の中で今回の様にキュウベえや巴さんに会つたことは無かつたので、巴さんの話は大変タメになりますよ」

思い出されるのはこれまで繰り返してきた時間。

その中では魔法という言葉はファンタジーの産物だつた。なのに今俺の隣には魔女と戦う魔法少女がいる。それに対価は必要だけど

なんでも願いが叶えられたと言つたネコとウサギが合図をしたよつ  
な生き物も現れた。

例え今回も繰り返しから抜け出せなくとも、次回からは魔法とい  
う奇跡を当てにしながら一步ずつ前に進めることだろつ。

それはいつ終わるかも分からぬ永遠の演劇に等しい。

しかも何度も繰り返されるその舞台は途中で下りるとなほ叶わず、  
出演者たちは無様に踊り狂うしか選択肢はない。

だから俺は一歩ずつしっかりと舞台上から降りる階段を進むしか  
ないのだ。

## 第6話 私にだって苦悩や絶望はあるの

巴さんと話してみて分かつた事がある。

それはキュウベえの言つた通り、俺がこの永遠の連鎖から解き放たれるには誰かがキュウベえに願つてもらわなければならないということだ。

これは魔法少女のことや魔女のことと聞いてみて出た俺の中の結論で、どうも他の方法では実現性が乏しいというか、そもそも思いつくことさえできなかつた。

死んでもみても生きてみても両方ともダメ。

そんなどうしようもない現実は理解していく、だつたら非常識的  
存在に頼つてみようということでキュウベえや巴さんに俺の置かれ  
ている状況を喋つてようやく一縷の希望を見つけた。

それは自己犠牲を対価に奇跡を得る契約だった。

だがその契約は生物学的に男の俺では結ぶことすらできないとい  
う。だから俺が残された道はいたいけな少女に俺を救つてくれと頼  
むしかなかつた。それもその少女を戦いという茨の道に進ませるこ  
とで……。

キュウベえはそれを肯定した。『自分の願いを優先することの何  
がいけないんだい?』 そう言つて、俺に新たな魔法少女を生み出す  
スカウトマンになつてくれと言葉を付け加えた。

それはある意味正しいことだつた。

人間誰しも一番に優先するのは自分のはずだ。警察官だつて消防  
士だつて、人々の笑顔を見て自分が満足するために職務を全うして  
いることだろう。結局は人の為とか言いいつつも最終的には自分の為  
になるのだ。

だからキュウベえにだつて、君たち人類の為とか言つて魔法少女

を生み出して魔女と戦わせることで、最終的には自分の利益を獲得しているのだろうよ。それが何なのか知らないし、想像で出来ない。だけれどもそのキュウベえにとっての利益が何なのかを俺が知る必要も無い。だって、俺の願いはこの繰り返す時間から解き放たれることなんだ。それ以外の他人の事情など知った事ではない。

……なのに何故、俺は俺の為に少女に願わせる事にこんなにも抵抗を抱いているのだろう。

自分の為に一人の少女の人生を壊してしまったことに、それほどまでに嫌悪感があるのだろうか？ それとも少女に助けられることから自尊心傷つけられるのを恐れているのか？

その答えは俺の中で渦巻いているはずなのに、どうもその答えを見つけられずにモヤモヤとした霧の中を彷徨ついている感じがする。

「大丈夫？」

隣を歩いている巴さんが俺の顔を心配そうにのぞき込んできた。俺たちは今、巴さんのソウルジエムが魔女の気配に反応したので、その魔女を捜している。場所は学校帰りの賑わうショッピングモールだった。

俺は少し俯きがちだった顔を少し上げて巴さんと視線を合わせる。

「ええ、大丈夫ですよ。少し考え方をしていまして」

「そう？ それなら良いんだけど……でも、魔女に遭遇した時はちゃんと気を引き締めてよね。本当に魔女は危険な存在なんだから」

「はははっ、俺のことなんて気にしなくても良いですよ。どうせ死んでもまた繰り返されるんですし、それに魔女が俺を殺すことによつてこの連鎖から解き放たれるのなら安いモノです」

自然と乾いた笑い声が喉から出てきた。

きつとこの時の俺の顔は酷かったんだろう。自分のことではないのに田さん悲痛な面持ちで俺に諭してくれる。

「そんなに悲観してしまつのはダメよ」

「どうしてですか？ 当事者ではない田さんには俺の苦悩も絶望も分かるはずないじゃないですか」

「確かにそうね。私には向井君が経験してきたことは分からぬ。でもね、私にだって苦悩や絶望はあるもの」

それはそうだろう。人は必ずと言って良いほど、大きさはどうあれその身に苦悩や絶望を抱えている。苦しみや絶望があつて、その上に初めて幸福や希望がある。

もしも苦悩や絶望を持つていらない人がいたとしよう。それらが無ければ、対になつている幸福や希望なんかは普通のことだと認識されてしまつ。

俺の場合は普通の日常こそが幸福であり、希望だった。

そうやって認識できるのは、この地獄とも言える繰り返す時間があって初めて幸せとは何だということを知ることができた。まあ、今の俺としてはこの繰り返される時間から解き放たれるのなら、日常でも非日常でも、死という終着点でも構わないのだけれども。だから俺は無理矢理笑つて返す。

「そうですね。だから人にはそれ叶えたい願いがあるんですね」

俺には巴さんの苦しみなんて分からない。

でも、彼女の苦しみを積極的に訊きたいわけでもない。その苦しみは彼女のモノであり、俺のモノではないからだ。

俺が見る限り、巴さんは俺と同様その苦しみを必死に押さえつけているように感じる。少しの歪みでも簡単に瓦解してしまいそうな心の呪縛。

魔法少女とは眞が眞、俺や巴さんみたいに必死に自分を取りつくろっている人間ばかりなんだろうか？

でもそれもそうか、と思う。キュウベえにどんな願いでも叶う奇跡を願つたのだから、心のどこかが歪んでいてもおかしくはないのかもしれないな。

最後に俺が言葉を発してから少しの間、まるでショッピングモールの喧騒から切り取られたかのように俺たちの間には沈黙が訪れた。巴さんは何かを言おうと口を開きかけて、何も言葉が出てこなくて口を噤む。俺の方はというと巴さんに特に訊く事も無くなつたし、単純に口を閉じていた。

陽はすでに傾きかけ、ショッピングモールには少しジツオレンジ色の光が差し込み始めていた。

「あ！」

「どうしたんです？」

「近くに魔女がいるみたい……でも、この魔力反応から言つて使い魔かしい？」

巴さんの持つソウルジエムが淡い光を放つ。

ちなみに使い魔というのは、元は魔女の身体から分離した存在で、

人間を捕食することで分離前の魔女と同じ魔女へと成長する厄介な存在らしい。

つまり、魔女の子供と言つべき存在なのである。あくまで俺の推論だが、こうして魔女は増えていくから、その対抗戦力としてキュウベえが魔法少女を生み出しているのではないかと思つ。

「いい？ これだけは言つておくれけど、使い魔と言つても何も力を持たない向井君にとつては危険な存在よ。だからくれぐれも飛び出したり危険なことはしないようにお願いね」

「わかつてますよ

次に繋げるためにもこんな序盤でくたばつてはいられない。せめて魔女とやらを見るまでは死んでたまるか。

少しでも経験を。少しでも情報を。

俺の中のモヤモヤを晴らすために少しでも知識を身につけるんだ。それぐらいの気概で進まなくては俺の願いが叶うことは無いだろう。

「行きましょーか」

先ほどまでの表情と打つて変わってキリリとした巴さんが、ソウルジームが指示する方向へと駆けだす。

その後ろ姿を追つよう俺も歩を進めた。

## 第7話 決意のほどが足りて無かつたようです

「うーんよ

駆けだして十分ぐらいだろうか、巴さんが足を止めたのはショッピングモールの中で改装中の一般人立ち入り禁止のフロアだった。そこには人の気配なんてモノはまるで無く、先ほどまでいた賑やかな一角とは打って変わつて閑散としていた。

ここまで近づけば俺でも分かる。

妙な圧迫感と言つて良いだろうか。目の前に広がるフロアに一步でも踏み入れれば、それまでの現実から俺が足を踏み入れなければならぬ非現実に全てが変わることが分かつてしまつ。

これが魔女の結界か。

俺自身、死んでもどうせ繰り返されるだろうと高を括つていたが、目の前があまりの異質さに尻込みしてしまつ。どうやら自分で自分を殺すより他者に殺される方が、より強い恐怖を生み出するらしい。

「大丈夫かしら？」

額から脂汗を噴き出し過ぎたのかもしない。巴さんがさきほど俺のことを心配した時とはまた違つたトーンで心配する言葉をかけてきた。

「大丈夫です。少々、決意のほどが足りて無かつたようです

あはは、と笑うしか無かつた。

そうか、これの威圧感が魔女なのか。こんなのと戦つている巴さんは凄いな。これならキュウベえが契約の対価に奇跡を差し出すの

も理解できそうだ。

額の汗を手で拭う。

「行きましょうか巴さん。俺なら大丈夫なので心配しないでください」

「わかったわ。そのかわり、危なくなったら私の後ろに隠れて頂戴ね」

どうでも良いプライドなのが、男として女人の後ろに隠れるのは「じめん被りたい」ところだ。しかし、魔女に対する対抗手段においても知識においても巴さんの方が勝つ<sup>まさ</sup>っているので、巴さんは素直に首肯する。

「ええ、分かつてしますよ」

今はまだ死ぬべきところでは無い。

それが分かっているから、巴さんの言葉には耳を傾けなくては。

「……行きましょう」

巴さんはフロアへと足を踏み入れたので、それに俺も続く。

「これは……」

なんとも形容し難い空間だった。まるでその昔ヨーロッパで描かれた絵画の中に迷い込んでしまったと言えば良いのだろうか、イメージとしてはピカソの絵が一番しつくりくるかもしれない。

しかしそれだけでは、この空間を表現することは叶わない。

もつと、いや……ああ、そうか。絵本だ。子供向けの絵本のよう

な空間なんだ。

様々な色がしつりやかめりちゃかに辺りに散りばめられて、この空間の異質さを醸し出している。

「魔女の結界つてヤツは思つてた以上にスゴイ空間ですね」

「つふふ、向井君はどんな風だと思つてたの？」

俺が呆然としていたからだらうか、巴さんは小さく笑つてからそんな事を訊いてくる。

「もつとジメジメして暗い場所かと思つてましたよ。でも実際は、こんな絵本の中に迷い込んだような馬鹿馬鹿しい空間だとは思いもしなかつたですよ」

そんな空間だからこそ、逆に恐怖感を感じさせられる訳だが。

その後も巴さんのソウルジョムの反応を頼りに結界の中を突き進んでいく。鎌がジャラジャラと音を立てたり、かと思えば瓦礫の山が目の前に現れたりだと、本当によく分からない空間だ。

「……来たわね」

巴さんがそつと膝くよりに立つ。

「何が？」とか訊くほど俺は野暮ではない。むかむかこの結界内に潜んでいた使い魔が現れたのだ。

毛糸玉のようなまるい物体が本体なのだろうか、そこに鼻と口、そして触角と鬚を生やし、さらに尻尾のように伸びたような機関の先は蝶のようになっている。

そいつが五匹ほど目の前に迫つてきている。

もうファンタジーとしか言いようがない。

これまで生きてきて、これまでにファンタジーの世界をこの目で見たことが無い。俺が置かれている繰り返す時間ほどしかないといつとSFのようだなと俺は認識している。

「さつさと終わらせて先に進みましょうかっ！」

そう言って、田さんはソウルジムを両手で胸のところに持つていき田を開じる。

すると次の瞬間にはさきほどまで着ていた見滝原中学の制服から、土曜や日曜の朝に放送されているようなアニメに登場してもおかしくない如何にも魔法少女ですと主張する「スチュームに変わった。

田さんの金色の髪に合わせるように襟や胸のリボンは黄色く、ふんわりとした上着をコルセットで抑え、緑色のスカートで全体の雰囲気を整えている。

これを“変身”と言つただなど、この緊迫した状況なのに思つてしまつ。

そして田さんはじこからともなく取り出したマスケット銃を使い魔に向けて発砲する。撃鉄の音が妙に生々しい。もしかして本物なのだろうか？

魔法少女と言つのだから、呪文を唱えて杖の先から炎や雷といったモノを放つのかと思っていたら、バリバリ物理攻撃なのかい。これはもうツッコミがあるを得ないな。

基本的にマスケット銃は单発式であるので、一度撃つたら弾を込

めなくてはならないのだが、巴さんは撃つたそばからそのマスケット銃を投げ捨て、次の瞬間には新たなマスケット銃をその手に持っていた。

投げ捨てられたマスケット銃が地面に落ちて鈍い音を出さないのは投げ捨てたそばからマスケット銃が虚空に消えているからだ。

「終わったわよ。先を急ぎましょ！」

俺が巴さんの攻撃手段について考えていると、全ての使い魔を討ち倒した巴さんが俺を現実へと引き戻す。

「驚きましたよ。巴さんって魔法なんて使わずに戦つかけなんですね」

俺は未だ巴さんが手に持っているマスケット銃を一度見てから言った。

「うふふ、違うわよ。私が使っているのは召喚魔法よ。それでこのマスケット銃を呼び出して戦っているの」

「ああ、それで投げ捨てたマスケット銃が消えちゃうわけですか？」

「そういうことになるわね。さ、先に進みましょ！」

マスケット銃を胸で押さえつけるように持つて笑う巴さん。

先ほどの戦闘を見てやつぱり本当に命を賭けて戦ってるんだと思ったら、その笑顔が無理してこるよつて俺には見えた。

## 第8話 ああ、俺が欲しくてたまらない奇跡だよ

あの後も何度も使い魔の襲撃を受けた。しかし、巴さんが魔法で召喚したマスケット銃の射線上に存在しただけでその数を減らしていった。

俺は特に何もすることは無く、使い魔が現れる度に巴さんの後方五メートルぐらいに下がって、戦闘の邪魔にならないように気を使うくらいしか無かった。巴さんにとっては魔女や使い魔を倒すことは使命があるので、今回は俺がそれにお邪魔する形になるので少しでも邪魔になるような行動は避けるべきだと判断した。

「気をつけて、この先に沢山の気配があるわ」

巴さんは両開きの大きな扉の前で俺を制した。もちろん俺は言われた通りに気を引き締める。

それにしてもここまでに辿り着くまでに『上事中』や『立ち入り禁止』などと言った看板や立て札などを見かけた。

この空間が現れる前の名残と言つても良いのだろうか？ それがどうも現実と結界の内部との境界が曖昧な感じにしているような気さえした。

「開けるわよ」

巴さんが重そつた両開きの扉を押す。ここは俺の出番だと思ったので俺も手伝う。

ギギイ、と音を立てて扉がゆっくりと開く。見た目通り扉は結構な重さがあり、これだけの動作で俺は息が荒くなる。でも巴さんはまったく息を乱していないことから魔法少女は肉体的に補正でもあるのかもしれない。

「これは後でキュウベえにでも訊いてみることにしよう。

「あれは……、ツ！？ 向井君、私は先に行くわねっ！」

「はい？」

息を整えるために膝に手をついていて巴さんの言葉を良く聞きとるが出来なかつた。しかし、巴さんは俺の曖昧な返事なんて知らないとばかりに駆けだす。

「あっ、ちょっと」

手を伸ばして制止をせようとすると、巴さんはお構いなしに稼働させた足を止めることは無かつた。

ようやく息を整えて、大きく溜め息を吐く。

「まつたく、あんなに急いでどうしたのかね」

すでに遠くまで行つてしまつた巴さんの背中を捲す……と、すぐに見つけた。

それにしても巴さんと一緒にいる一人組は誰だ？

制服から見て俺達と同じく見滝原中学の生徒で間違いないだろうが、ピンク色の短い髪を赤いリボンでツインテールにした気弱そうな女の子と青い髪をショートカットしている勝気そうな性格の女の子。腰が抜けたのか一人ともべたんと床に腰を降ろしている。

遠目からだから少しばかり自信が無い。別に俺はそこまで視力が良いわけでもないし。

俺も巴さんの後を追い、彼女たちの元へと駆け寄る。

つて、よく見たらピンク色の髪の子がボロボロになつたキュウベ

えを抱きかかえている。

「大丈夫かキュウベえ？」

別にキュウベえ自体の命には興味は無いが、コイツが死んだら今回の繰り返しで見出した方法を探求するのに不便になる。

『うん……なんと、かね。マミー、助け、られたよ』

途切れ途切れになりながらも律義に返事をしてくるキュウベえ。別に辛いなら返事をする必要なんてないのに。

「向井君。私が使い魔たちを何とかするからその子たちをお願い」

「はい、分かりました」

巴さんに頼まれたので、果然と事の成り行きを見ていた女の子二人組を連れだつて後方に下がることにする。

安全圏まで下がつて俺は腰を降ろした。そして改めて先ほどまでこの女の子たちに襲いかかろうとしていた使い魔の集団……いや、軍団を見る。

「にしても、すごい数だな」

別に数える気なんてさららないが、ぞうと見た感じで総数は100と言つたところだろうか。あの鬚の生えた毛糸玉みたいなヤツのあまりにも馬鹿馬鹿しい数に笑いさえ込み上げてくる。

「……何笑つてるのよ」

「あん？」

俺は右斜め上の方に向に顔をあげる。そりそり俺が避難させたキュウベえを抱いたピンクの女の子と青い女の子。ちなみに俺に喋りかけてきたのは青い女の子だ。

「だから、なんだこりんな状況で笑つてられるのかつて私は訊いているのよつー。」

「うふうふ、さやかちやん……」

急に怒鳴つてきた青髪をピンク髪が心配そうな顔で見る。ピンク髪……なんか語感が悪いな。

「俺は向井キリト。見ての通りお前たちと同じ学校の一年生だ。でもお前たちの名前は？」

とりあえず、状況確認の為に名前を訊くことにする。どうやらこの子たちはキュウベえのことを見えていたみたいだし、それにこんな状況に巻き込まれるんだ。魔法少女になれる為の資質と言つむのを兼ね備えているのだろう。

俺の願いの為にも知り合つになつておくれたことは無い。

尚もがみがみと吼えてくる青髪を制するよりパンク髪が俺の望むとおりに自己紹介をしてくれた。

「わ、わたしの名前は鹿田まどか。で、いつかが美樹さやかちやん。一人とも向井君と同じ一年生だよ」

「ふーん、まあよひしへ。ところで美樹ちゃんか」

「なによ?」

「不満そうな表情のところ悪いがアレを見てみり」

俺は前方へと指を指し示す。そこには次々と両手にマスケット銃を召喚し、使い魔に向けて発砲する巴さんの姿が見える。ここに来るまでの巴さんの活躍を知っているから特段心配するとは無い。

「つまり適材適所つてわけだよ。俺はこうじてお前たちを避難させて、巴さんはアイツらと戦つ。……って、巴さんから自己紹介された?」

美樹ちゃんは果然と巴さんの戦いに魅入られていて、俺の問いに答えたのは鹿田まどかの方だった。

「まだ、だけど……」

「あの人は巴マニア。俺たちの一年先輩で三年生だな。で、何か質問ある?」

視界の先の巴さんはあまりの数にめんどうさくなつたのか、一気にかなりの数のマスケット銃を召喚する。使い魔と同様数え切れないほどのそれらは規則正しく空中に展開される。どうやら重力の影響は受けていないようだ。

「あの丸っこいヤツらは何なのよ!? それにこの訳わからぬ空間だってそうだし、転校生のことだって訊きたいし、あの人のこと

もあたしはもつと話さたいわよ

「うーん、思つたよりたくさん質問が来たな。あの丸っこいやつらは使い魔だな。それでこの空間は魔女の結界の中、転校生つてのはよく分からんが巴さんは魔法少女だ。まあ、俺も良く知つてゐるつてわけじゃないけどな」

とりあえず俺が知り得てゐる大まかの情報を喋つておく。どうせ後で巴さんもこの子たちに同じようなことを説明するだろ?。

巴さんの方はとくに、マスケット銃を展開し終えたようで、手に持つたマスケット銃の引き金を引く。すると、展開された全てのマスケット銃の撃鉄が次々と鳴り響き弾を射出していく。

全ての撃鉄がほぼ同時に打ちつけられたものだから、物凄い轟音になり結構距離を取つていたはずの俺たちの鼓膜にダメージを与える。

放たれた弾丸は使い魔の軍団に吸い込まれるように飛来し、ことごとくを粉碎していく。

「うお、すげえ」

まさか巴さんがこんな事までできるなんて思つてもみなかつた。がみがみ言つていて美樹さやかもキュウベえを抱いた鹿目まどかも呆然を通りこして啞然としている。

「まあ、とにかくこれで君たちは奇跡を願うことのできる権利を得たんだよ」

俺の言葉にどうやらからともなく言葉が紡がれる。

「奇跡……？」

「ああ、俺が欲しくてたまらない奇跡だよ」

羨ましい。俺は願うことができなくて、こんなか弱そうな少女たちにしか願うことができないなんて。

さて、俺の願いを代わりに願うことのできる少女たちを発見したわけだが、俺はどうしたら良いんだろうな。

この子たちの未来を犠牲にして、俺は自分の未来を手に入れられるんだろうか……？

## 第9話 僕と契約して、魔法少女になつてほしいんだ

巴さんが使い魔共の掃討を終えると、まるでゲームの場面転換のように空間が歪み、魔女の結界から現実へと帰還した。帰還したと言つてもこの場所は改装中のショッピングモールのフロアで、人の気配があるでないから現実感と言つもののはそれほどないけれど。

「も、戻つた……」

美樹さやかがよつやく帰還した現実に安堵の表情を浮かべる。

「お疲れ様です」

俺はカツカツとその脚に履いたブーツで床を鳴らしながら、俺たちの元まで歩いてきた巴さんに向かって労いの言葉をかける。

それにしても圧巻の一撃だった。巴さんの戦い方がマスケット銃の同時展開による「リ押しだったところもそうだし、それよりもこんな戦いを目の前で見たことの興奮が俺の胸の鼓動を早くした。そのことを感じ、俺が男だったことを再確認させられた。

「ありがとう、向井君」

巴さんが俺にお礼を言い、そしてその後にな何かを言いかけた瞬間、タンツと何かが床を鳴らす音が響く。次の瞬間には俺たちの中に再び緊張が張り詰めた。

「！」に魔女いないわ。仕留めたいならすぐこいつの使い魔の残留魔力を追いかけなさい。今回はあなたに譲つてあげる

「ち早くその闖入者に対応したのは巴さんだつた。やはり魔法少女として場慣れしているからなのか、俺たちの視線の先にいる巴さんと同じように如何にも魔法少女と言つ格好をした女の子に話しかける。

どうやら鹿田まどかと美樹さやかは、闖入者であるあの黒髪の長い魔法少女のことを知つてゐるようだ。緊張の色が一人の表情から見てとれる。

「この不測の事態に自分が冷静な事に驚きつつも、黒髪の女の子のことを改めて見てみる。」

……そして黒髪の魔法少女と田が合つた。黒髪の女の子は俺のことを怪訝そうな目で見てきており、そのお返しとばかりに俺も彼女のことを良く見ておく。

黒髪の魔法少女は、ふーと息を吐いて俺から巴さんに視線の先の対象を変える。にらめつこには俺の勝利で終わつたらしい。

「魔女に何て興味は無いわ。私が用があるのは 」

「飲み込みが悪いのね。見逃してあげるつて言つてるの。お互に余計なトラブルとは無縁でいたいとは思わない?」

黒髪の魔法少女の言葉を遮るように巴さんが言葉を挟む。巴さんは素人の俺でも分かるぐらうに敵意がビシビシと感じられる。先ほどまでの柔軟な巴さんはどこに行つてしまつたんだと叫びたくなつた。

女は恐い。強くそう思つた瞬間である。

暫しの無言の攻防の後、やがて黒髪の魔法少女は諦めたのか、鹿田まどかをキッと一睨みしてゆつくりとこの場を去つていつた。鹿田まどかと美樹さやかは緊張の糸が切れてその場にへたり込む。

気のせいかもしれないが、鹿目まどかを睨んだ後、俺のことを一瞬見たような気がするけど、それはきっと気のせいだわ。俺はあくまで無力な人間なのだから。

巴さんは黒髪の魔法少女が去ったのを確認してから俺たちの方に振り返る。

「キュウベえを早く」  
「元げつ

「あつ、はーー。」

鹿目まどかが目の前まで来て女の子座りで腰を降ろした巴さんにボロボロになつていてるキュウベえをそつと手渡しする。なんとまあ、切り替えの早い事だ。もしかしたらこの切り替えの早さは女性特有のものかもしれないが。

巴さんは渡されたキュウベえを膝の上に載せて、キュウベえを包み込むように両手を翳す。すると、ポウ……と光がキュウベえの身体を包み込み、みるみるボロボロだったキュウベえの身体が回復していく。

これが所謂治癒魔法と言つものだらう。その傷口が治つてゆく光景は、見方を変えればとてもグロテスクなものに違いない。

「……よし、これで大丈夫」

巴さんは安堵のため息を吐く。

治癒魔法で傷が完治したキュウベえはふるふると首を振つてから巴さんにお礼を言つ。

『ふー。ありがとうマリ。お蔭で助かったよ』

本当に魔法つてすごいんだな。さつきまでまともに喋ることの出来なかつたキュウベえが、こんな呼吸をするように喋り出すなんて考えもしなかつた。せいぜい身体が完治するだけで、体力まで回復するとは魔法おそるべしだな。

魔法のすこさを田の当たりにするたびに、これでまた俺の願いが無垢な少女たちの犠牲を対価にしなくて叶つのではないかと期待ばかりが膨らむ。

「お礼ならこの子たちに言つて。私じゃ間に合わなかつたかもしないもの。それと冷静に対処してくれた向井君にもね」

「俺に感謝なんていらないぞキュウベえ。ちゃんと対価なら貰つてるしな」

田さんの言葉に付け加えるように俺は発言する。俺の願いを叶えられるかもしない魔法について知る。そのために俺はこんな危険な世界に飛び込んだわけで、むしろ俺をこっちに引き込んでくれてありがとひと逆にお礼を言つても良いくらいだ。

『わうかい？』

「ああ」

キュウベえは俺に田配せをしてから、

『ありがと、鹿田まどか！ 美樹さやか！』

先ほどの治癒魔法で元気が有り余つたのか、無駄にエネルギッシュにお礼を述べるキュウベえ。それが悪いとかではないが、さつきまでの緊張感からかけ離れ過ぎていて俺はついていけない。

「「なんで名前知ってるのー?」」

『「なんでって、さつ きまじかが自己紹介していたじゃないか』

『当り前のようにキュウ ベえは言ひ。鹿田まどかが一人まとめて自己紹介をしたのはキュウ ベえがボロボロになつていた時。あの時にも意識はあつたんだな……。』

二人は何か釈然としない様子。

「ま、まあ……わつき何があつたか私は知らないけど、キュウ ベえは私の友達なの。助けてくれてありがとうね」

空気を読んで喋り出すのはさすが田中さんだ。会つてまだ数時間しか経っていないハズなのに、彼女の優しさと言ひものが伝わってくる。別にそれで信用するかは別の話だけど。

「わたしたちも方こそ助かりました! ええつと……田中さん?」

「『マリ』で良じわよ……って自己紹介はまだだつたわよね?』

鹿田まどかがワタワタし始めたので助け船を出していく。

「あ、俺が一応田中さんの紹介はしておきましたよ

「あらそつなの? でも改めてちゃんと名乗らせてもらひつ」といふ  
るわね」

『やう言つて立ち上がる。そしてスウつといつ効果音があるかの』  
とく変身を解き、見滝原中学の制服に戻る。

改めて変身を見ると不思議だ。特に一度服が消えるわけでもなく、空間が歪むように次の瞬間には別の服装になっている。これも召喚魔法の一種だらうか？

「私の名前は田中アリ。あなたたちと同じ見瀧原中の生徒よ。ようじくね」

「二つ。満面の笑みで自己紹介を終える田さん。

「変身した！？ いや、変身が解けた！？」

驚く美樹さやか。

「いえ、じりじりやつー。」

鹿田まどかは驚きつつも返事をしていく。

「で、そこで座つてるのが向井キリト君……ってあなたたちの中で自己紹介したのかしら？」

「ええまあ」

特に話の流れ的に立ち上がるまでも無いと判断していたので、結構おざなり気味に巴さんから紹介されてしまった。と言つても、自分で自己紹介は済ませてあるけど。

鹿田まどかと美樹さやかの視線がこちらに向けられる。

「向井君もわたしたちを助けてくれてありがとね」

「ふん、一応お礼だけは言つておいてあげる。ありがと」

美樹さやかには軽く嫌われてしまつたらしい。ふむ、素質ある少女から嫌われるのはマイナスかもしれないが、次があると思えばそこまで堪えるモノでも無い。

軽く会釈でお礼の言葉に応える

「そしてこの子がキュウベえ」

『よろしく』

最後に紹介されたキュウベえが小さい手を挙げて自己主張する。

「ねえ、キュウベえ。ひょっとしてこの子たちも……」

前屈みになつてキュウベえに話しかける田中さん。鹿田まどかと美樹さやかはいきなりの話題の変更についていけなかつたらしく頭の上にハテナマークを浮かべている。

『うん、そうだよ』

「どうか、巴さん……。キュウベえに確認を取らなくてもコレぐらいは理解で知るでしょ。どう見てもこの二人はキュウベえのことを知覚できているみたいだし、さつきは使い魔だつて見えていた。」

『まどか。さやか』

キュウベえは一人に向かつて向き直る。

『僕は君たち一人にどうしてもお願いしたいことがあるんだけど良いかな?』

「お願い……？」

「あたしも？」

あまりにも唐突な話題変更についていけない二人。俺はこの後、キュウべえが何を言うか分かっている。なにせ今日、本人から聞いたばかりのことだから忘れるはずもない。

『僕と契約して、魔法少女になつてほしいんだ』

笑いかけるようにキュウべえは一人に“お願い”をした。それは俺が求めてやまない奇跡への片道切符で、同時に過酷な未来への片道切符でもある。きっとその契約は、一面から見れば悪魔との契約と等しいものかもしれない。

でも、それでも俺は彼女たちが羨ましくて仕方なかつた。

## 第10話 これとなつたら私の方が強いもの

『僕と契約して、魔法少女になつてほしいんだ』

結構……いや、かなり重大なお願いであるはずなのに、「ハイキングにでも行かない?」とでも言つていつのつゝな軽い印象で言つキュウべえ。

それが悪いとは言わないが、その権利さえ無い俺からしてみればイライラする事この上ない。もしも俺の理性が何らかの理由で今この時欠如してしまつたとするなら、俺は権利を得た鹿田まどかと美樹さやかに襲いかかつてしまつと確信できるほどだ。

「魔法少女?」

「え……ええ?」

やはり一人は話について来れて無かつた。まあ、それもそつか。いきなりこんな事に巻き込まれて、詳しい話も聞いて無いウチに「魔法少女にならないか?」つてお願いされたら誰であろうとも困惑するに決まつてゐる。

「おい、キュウべえ。いきなりそんなことをつても誰も了承してくれないと思つぞ」

「のままだと埒が明かないと考へ、立ち上がりつつキュウべえに言つてやる。制服のズボンをぽんぽんと吊きホーリを落とす。

「詳しい話もしないまま、事を急いではダメじゃないのか」

『これはまどかとやかには悪い事をしてしまったみたいだね。ごめんね』

会つた時からキュウベえの言動は軽い。もしかしたらそれが契約を持ちかける側としての「イツなりの交渉術の一つなのかも知れない。

「それなら詳しい話は私の家でしまじょうか」

『せうだね。それが良いかも知れない』

「あつ、だつたら俺は帰りますよ。一応俺は男ですからね。綺麗な女の人の家にお邪魔するのには抵抗があります」

「うふふ、一人暮らしだし遠慮しなくても良いわよ。それにいざとなつたら私の方が強いもの」

巴さんの言葉には笑うしかなかつた。

特に間違えを起こす予定は無かつたが、マスケット銃でハチの巣にされる未来が明確に想像でき、逆にここで断つてもハチの巣にされるんじゃないかとさえ思つてしまつた。

「……それじゃあ、お邪魔させて頂くことにします」

ひよつた俺を誰が責められるだろうか。俺は時間を繰り返してい る以外、ただの中学生でしか無い。

本当なら今日知り得た情報を整理して、明日からの行動予定を考えたいところだが、巴さんの家にお邪魔する事によつて新たな情報が手に入るかもしれない。うん、そうだ。そうに違ひない。

「そり、良かつたわ」

手を斜めに含わせて喜ぶ巴さん。俺ついに今まで巴さんと好かれ るような行動を取つたつけ？

でもまあ、どうやら巴さんはお節介焼きな性格と見受けられるから巴ここまで意識過剰にならなくても良いのかもしれないな。

『それじゃあ、マリの家に向かって出発だー。』

当事者であるハズの鹿田まどかと美樹さやかを置いてきぼりして話を進めて、詳しい話は巴さんの家に移動してからとことくなつた。

置いてきぼりを食らつて現在進行形で困惑を続ける一人の背中を押す様に、キュウべえを先頭とした一行は一路巴さんの住んでいる家へ向かつのであった。

「あの、向井君……」

巴さんの家に向かつて、俺の後ろを歩いている鹿田まどかが声をかけてきた。ちなみに俺たちの集団は、巴さんとキュウべえを先頭に、その次が俺で最後尾を鹿田まどかと美樹さやかの順番だ。

特にこの順番に意味は無いが、自然といつこう形になつた。

「なんだ、鹿田まどか？」

「まどかで良こよ

「やつか、鹿田」

「向井君が意地悪してへるよ、セヤカちゃん」

何故か美樹さやかに泣きつく鹿田。別に異性の名前を呼ぶのが恥ずかしいだけで、意地悪なんてしてゐつもりは無いのだが、別にそれを説明するまでも無い。

「ちょっと、まどかに何してくれてんのよ」

「何つて、普通に名前を呼んだだけだぞ、美樹さやか」

「だからあなたのその他人行儀な名前の呼び方が気にくわないのよ。だからあたしのことはさやかって呼びなさい。そしてまどかのこともまじかって。良いわね?」

良いわね……ではない。だが、恥ずかしいから名前を呼べないなんてコイツらに言えるハズも無く、

「まあ、考えておく」

自分でも情けないと思つ。精神を安定させるために自分の胸元にあるネックレスを掴むつとする。

あれ……?

確かにそこにあるはずのネックレスが無かつた。制服の下に入れているので掴み損ねたのかもしれないと思ったが、目で見て確認してみても首にかけているハズのネックレスは見当たらなかつた。

「どうしたの?」

怪訝そうな顔で自分の制服の中を見る俺に対し、鹿目が心配そうに声をかけてくる。やはり心の中でもまどかとは呼べない朝からの一連の動作を確認するにつれて、ただ単に自分がネックレスをつけるのを忘れていただけだということを思い出す。

慌てて話題を逸らすことにする。

「あ、いや、なんでもない。それよりもなんか用があつたんじやないのか？」

「ずっと氣になつてたんだけど、向井君も魔法少女だつたりするの？」

話題を逸らした事を後悔した。

「あつ、それ、あたしも氣になつてたんだよね。でも向井は男だから魔法少女つて言つよりは魔法少年じゃない？」

しかも美樹までこの話題に乗ってきた。

落ちつけ俺。知らないことは罪ではあるが、それと同時に免罪符でもあるんだ。それにコレぐらいのことでは腹を立ててもしょうがないだろう。

「俺はそんな高尚な存在じゃないよ。どちらかといつて、お前たちと同じ少し特殊な一般人という括りに当てはまるんじゃないのか」

自分で言つていることに確証は持てないが、それでも俺には力はない。ただただ永遠に繰り返される時間を漂つている存在。それを少し特殊と言つても良いのかは不明だが、それっぽちの人間なんだ。

「そろそろ私の家に着くわよ」

俺たちの会話を聞いていたのか、田さんがあの絶妙のタイミングで声をかけてくれた。

これ以上この話をしていたら、俺は俺自身を抑制できる自信が無い。それを巴さんは見抜いてくれたみたいだ。

それにしても魔法少女か……。

なれるもんならなりたいよ。例え過酷な未来が待ち受けていたとしても、それでも未来がやって来るんだろう？

## 第1-1話 僕の願いは叶えてくれないへんな

「 『 』 が私の住んでこるマンションよ 」

街は夕焼け色に染まり、もう何分も経つたらその色が夕闇色に変わるだろう。そんな中、俺たちは巴さんの案内で彼女の住む家とやらにやつて来た。

そのままエレベーターに乗り込み、巴さんが住んでいる階層に一気に上がる。それにしてもこりうこう狭い密室空間で周りが異性だとだと非常に肩身が狭い。巴さんは一戸一戸しているだけだし、鹿目と美樹は一人でひそひそと小声で密談。唯一俺の助けになリそつなのはキュウベえだけだった。

とかなんとか考えていたらすぐにエレベーターのドアは開き、巴さんの部屋まで一直線だった。自分が憐れでならない。

「 さつさも言つたけど、私一人暮らしだから遠慮しなくても良いわよ 」

そう言つながら巴さんはがちやりと玄関の扉を開く。

「 「 お邪魔します 」 」

鹿目と美樹は律義に頭まで下げてから部屋に入つていく。俺はと書つと、「 …… お邪魔します 」 と無愛想に小声で言つだけにした。

「 うわあ 」

「 素敵なお部屋…… 」

部屋に入つて開口一番、鹿田と美樹が田さんの部屋を見て感嘆の声をあげる。

俺も彼女たちのその意見には賛成だった。巴さんの部屋はデザイナーの人がこの部屋を手掛けたと言われても納得のいくほどに素敵な部屋だった。

「ありがとね。でも、ろくにおもてなしの準備も無いんだけどね?」

うふふ、と笑う巴さん。でもそれはしようがない事なんじやないだろうか。そもそも俺を含めて彼女たちがこの部屋に来ることが決まったのつてつい數十分前ことだし。

のと違うようだ。

「うん、めちゃうまッスよ！」

あれれ？ もてなす準備が無いと巴さんは言っていたのになんでテーブルの上にケーキと紅茶が用意されているのだろうか？

と、せんと俺の間に言語の意味を理解する上で価値観の相違がみられるようだ。もしかしたら田さんは良いことこのお嬢様なのかもしない。

「ありがとうございます。向井君はどちらからいらっしゃる？」

「え？ ああ、とっても美味しいですよ」

「それなら良かつたわ。それじゃあ本題に入りましょうか。向井君は彼女たちにどこまで話したの？」

「聞かれた事をそのまま答えただけですよ。だからちゃんと説明した方が良いと思います」

「わかつたわ。それじゃあ一人ともこれを見てくれる?」

俺を一瞥してから何処からともなくソウルジエムを取り出す巴さん。先ほどまでは手には何も持っていないかったハズなのにな。だが俺はその程度のことでは驚かない。

「うわあ、キレイ……」

「これはソウルジエム。キュウベえに選ばれた以上、あなたたちにも他人「」どじやないものね。このソウルジエムはキュウベえと契約することで生み出される宝石で、魔力の源であり、魔法少女である「」との証でもあるの」

田さんの説明に美樹が疑問を口にする。

「契約って?」

『僕は君たちの願い事を何でも一つ叶えてあげる』

「えー? ホント?」

「願い事って……」

『何だつてかまわない。どんな奇跡だつて起こしてあげられるよ』

「……俺の願いは叶えてくれないくせにな」

自然と口から言葉が漏れだしてしまった。キュウべえが俺の願いを叶えてくれないなんて分かつてゐるくせに……。

「え？ なんで向井君の願いは叶えてもらえないの？」

『それは彼が生物学上男として分類されているからさ。僕が願いを叶えてあげられるのは、人間の、それも君たちぐらいの年齢の少女たちだけだからね』

「そうなんだ……」

『何故かしょんぼりとする鹿目。それと美樹も「きっと、良い事あるさつ！」って俺の背中を叩くなよ。別に俺は哀れに思われたくはないんだぞ。』

「俺の」とは良いから早く話を進めてくれ

「のままじや、話がいつまで経つても進まないような気がしたので続きを促す。

『僕はどんな願いを叶えてあげるけど、その代わりに僕から君たちにお願いしたい事があるんだ。等価交換ってヤツだね』

「あたしたちが魔法少女になるつてヤツ？」

『そうだよ。僕がどんな願いでも叶えてあげる代わりに、君たちは魔法少女になつて「魔女」と戦つ使命を負うことになるけどね』

「その戦わなくちゃいけない魔女つてなに？」

魔法少女とは違うの

？」

「さつきお前たちが見た使い魔の親玉だよ。と言つても俺もまだ見たこと無いけどな」

早いところ魔女とやらを実際に見てみたかった。情報は少しでも多く知つておくことに意味があるんだから。

「あのわけ分かんないヤツの親玉か……」

『願いから生まれるのが魔法少女とすれば、魔女は呪いから生まれた存在なんだ。魔女が希望を振り撒くように、魔女は絶望を撒き散らす。しかもその姿は普通の人間には見えないからタチが悪い。不安や猜疑心、過剰な怒りや憎しみ。そういう災いの種を世界にもたらしているんだ』

普通の人間には姿が見えないと言えばキュウべえもだろ。そして「魔法少女になつてよ」と奇跡と言つ対価を差し出しながら悪魔の契約と何ら変わりない言葉をかけてくる。

もつとも、俺の場合は悪魔の契約と言つよつは神の救いのよつに感じりが。

その後もキュウべえと巴さんは何も知らない一人に説明していく。「チラの世界を知つて一日田の俺が口出しできるハズも無く、黙つているしかない。

「理由のはつきりしない自殺や殺人事件はかなりの確率で魔女の呪いが原因なのよ。形の無い悪意となつて人間を内側から蝕んでいく

の」

「そんなヤバいやツらがいるのにビリして誰も気付かないの?」

『魔女は常に結界の奥に隠れ潜んで、決して人前には姿を現さないからね。さつき君たちが迷い込んだ迷路のよつな場所がそうだよ』

「結構危ないところだったのよ。あれに呑み込まれた人間は普通は生きて帰れないから。私が助けにいけなければ、あの場所から生きて帰れなかつたと思うわ」

巴さんの言葉を聞いて絶句する一人。まあ、そんなもんぢうな死と言うのは人間にとつてもつとも嫌なことである。人として生まれたのなら、やがてたどり着く願いは不老不死だらうし。

だが俺の場合は何度も死んでいるからその辺りの感覚がマヒしてしまつてゐるらしい。それにビリせ繰り返すことになるという安心感のようなモノまである。

クソツ、そんな風に考えてはいけないの……。

「そ、そんな怖いものヒマ!! あたは戦つてゐるんですか……」

「ええ、命懸けよ。だからあなたたちもキコウベえと契約するかは慎重に選んだほうがいい。キコウベえに選ばれたあなたたちにはどんな願い事でも叶えられるチャンスがある。でもそれは……死と隣り合わせなの」

「…………」

「うーん、美味しい話ではあるけど悩むなあ……」

俺ならばその程度のリスクでは悩むことは無い。たつたそれだけで未来がやつてくるなら。

「「……」

「ねえ、そこで提案なんだけど、一人ともじばりの間、私の魔女退治に付き合つてみない？」

「「……ええ？」

「魔女と戦いがどういうものかその田で確かめてみると良いわ。その上で危険を冒してまで叶えたい願いがあるのかどうか、じっくり考えてみるべきだと思うの。もちろん向井君もね？」

「「えー？」

俺には関係ない話だと思つて用意されたケーキをフォークで口に運ぼうとしていたら、唐突に俺に振られた。

特に「メリット」は無い。魔法少女である田さんの近くに居れば安全だらうしな。

「まあ、別に良いんですけど……」

「それじゃあ決まりね！」

その時の田さんの嬉しそうな顔がとても印象的だった。

## 第1-2話 お前たちが魔法少女になつて戦え

と言つわけで巴さんの「」好意（？）で今後も魔女退治についていくことになった。

俺としては限りある時間の中で、どうやって自分にとつて納得がいく方法を探すかと考えていたので願つたり叶つたりの提案だった。

「」で一回話が落ち着き、一息吐くために誰からともなく紅茶を口に含む。力チャリと陶磁器であるティーカップが音を響かせる。

「あつ、そうだ。あの転校生もマリさんと同じ魔法少女なんですか？」

心が落ち着くような静寂であったのに、その静けさに堪えられなくなつたのか美樹が口を開いた。

転校生と言つ单語に心当たりがあつたので瞬間的に思考を廻らせる、巴さんが使い魔と戦闘している時に美樹から質問されたつけと思ひだす。そしてよくよく考えてみると、あの黒髪の魔法少女が転校生とやらなのだらう。

「ええそつね、きっと彼女も魔法少女で間違いないと思つわ。それもかなり強い力を持つていいみたい」

美樹の質問に巴さんは首を縦に振つた。

その話が事実であるならば、あの黒髪の魔法少女は俺の予想通り魔法少女で、学校でキュウベえが言つていた二人の魔法少女のウチの残りの一人なんだらうな。

「でもそれならさ、魔女をやつつける正義の味方なんだよね？ そ

れがなんで急にまどかを襲つたりしたわけ?」

「えー、鹿田はあの黒髪の魔法少女に襲われていたのか。確かに『チラ』をこらんでた彼女の目には敵意が感じられた。

『彼女が狙つていたのは僕だよ。新しい魔法少女が生まれることを阻止しようとしてたんだろうね』

「それははどうこいつことだ?」

始めて聞く情報にだんまりを決め込んでいた俺の口が開いた。  
黒髪の魔法少女があらたな魔法少女が生み出されるのを阻止する理由が全く見えてこない。むしろ同じく魔法少女である巴さんは、鹿目や美樹を魔法少女にしようとしているように見える。いや、彼女たちが魔法少女になることを許容していると言つたところか。だがどちらにしても新たに魔法少女が生まれてくることに対しても認めていふといふことになる。

『つまり彼女は自分のテリトリー内で新たに生まれた魔法少女が魔法を倒すことを良しとしていいんだ』

まつたく……。キュウべえの言葉はどこか遠回りでまどかっこしい。これじゃあ、コイツの言葉をまともに聞き入れるのは危ないかもしれないな。

俺がキュウべえの言葉について考えていると美樹が疑問を口にする。

「なんで? 同じ敵と戦つてゐのなら、仲間は多い方が良いんじやないの?」

「それが、そうでもないのよね。むしろ競争になる」との方が多いの。つまり魔法少女は必ずしも味方同士ってわけじゃないの」

現在進行形で俺が脳内で考えてこむ」とが田の前で話されている……。簡単には話してもうえないんじやないかと思つていたのに予想外だつた。

「そんなん……じつして?」

「魔女を倒せば、それなりの見返りがあるの。だから時と場合によつては手柄の取り合いになつて、衝突することの方が多いのよ」

「つまりアイツは……キュウベえがまどかに声かけるつて、最初から田畠をつけてて、それでじぶんの都合の悪い敵を増やさない為に朝からあんなに絡んできたつてことか……」

「たぶん、そういうことじょいね……」

シーン、と空氣が重くなる。俺としてはどうといつていいとでもないのだが、田さんのお話を聞いて鹿田と美樹が軽く沈みこんでしまつているのが原因だ。田さんは彼女たちを見て「やつちやつたー」と言いたげな表情をしてくる。

仕方が無いので俺が空氣を軽くするか。

「そんなに気にする必要は無いんじゃないかな?」

「え? でも……」

「だつてお前たちは田さんの魔女退治に付き合つんだろ? 田さん  
が近くにいるなら安全は保障されたようなもんじやんか

視界の端では巴さんが「そんなに頼りにされても……」と、苦笑いしている。

「それとも何か？」田中さんと一緒にいれない日常生活の方が恐いのか？ それほどまでにあの黒髪の子は危ないヤツなのか？」

あの黒髪の魔法少女はほむらと言つらしこう。本当に今さらの情報だな。それにして鹿田の言葉が後半に行くにつれて力が無くなつていつた。これは自分で言いながら自信が無くなつていつたのだろう。

「ならいいじゃないか。そのほむらつて子を鹿目が危ないと思つていのなら何ら心配する必要はない。もしも危ない目に遭いそうになつたらキュウべえを通じて巴さんに助けを求めるべし。どうだろ、美樹？」

「確かにそうだけど、向井はあたしたちのことを助けてくれないのかよ？」

美樹の言葉には溜め息を吐くしかない。

「俺には魔法少女をどうにかするなんて出来やしないよ。そもそも俺に戦う力なんて無いしな」

時間を繰り返すことは出来るけどな、と心中で付け足す。厳密には強制的に繰り返されるのだが。この連鎖はあるで呪いのようで

……呪い？

確か、魔女は人間に呪いをかけるんだよな？

だとしたら俺をこの永遠の牢獄に幽閉したのは魔女なのかもしない。

ようやく見つけ出した可能性だが、今はそれを考へている場合ではない。

「だから俺を頼るな。俺は俺自身のことだけで精一杯なんだ。だがもしも俺を頼りたいというなら俺の願いを叶えてくれ。それを言い訳に使ってお前たちが魔法少女になつて戦え」

言いきつてから、ティーカップに残っていた紅茶を一気に飲み干す。

言つてしまつた……。

彼女たちには俺を言い訳に使えと言つたのに、実際は俺の方が向こうから頼んできたということで彼女たちを言い訳に自分の罪悪感を書き消そうとしている。

「伊始そうをまでした

重くなつてしまつた空気を軽くするハズだったのに、余計に重くしてしまって巴さんには悪い事をしてしまつたかもしれない。

それでは、と言い残して俺は巴さんの家から帰ることにした。

## 第1-3話 うん、わたし頑張つてみる！

結構長く巴さんの家にお邪魔させて頂いたよつだ。ガチャリと開けた巴さんの家の玄関の扉の向こうではすっかり夜の帳は降りて、辺りを夕闇色に染めていた。足早にエレベーターまで直行し、一階であるエントランスホールまで降りて、その足でそのまま巴さんの住むマンションを出た。

由矢に向かつて少し歩いてから振り返る。俺の視線の先には先ほどまで居たマンションがあつた。

「何やつてんだかな、俺は……」

自分でも理解はしているつもりだ。今の冷静ぶつている自分が、本当は頭の中がぐちゃぐちゃとパニックに陥っていることぐらい……。

だからその場その場で言つていることが矛盾していたと思ひし、自分でもよく分からないうちに唐突に口から言葉を発している。それが今回裏目に出了かもしれない。

自分が自分を制御出来ていない。

その事実が酷く俺を苦しめていた。しかも冷静ぶつている俺の脳はそれを強く認識してしまつていて、それが更にタチが悪い。認識しているハズなのに自分を制御できないのがどうにももどかしくて仕方が無かつた。

溜め息を一つ。十月も後半に入り、吐いた息が白く染まつていた。

「はあ……、帰るか」

止まっていた歩みを再び進める。街灯が俺の進むべき道を照らしてくれている。

「ああ、俺の未来への道も照らしてくれないかなあ……」

道しるべをえあればあとは進むだけだから楽で良いな……。

\*\*\*\*\*

翌日。

今日は忘れずに十字のネックレスを首から提げて登校した。朝起きて今日は忘れないぞとすぐさま首に提げた。このネックレスは十字架と呼ぶにはあまりにもぞんざいな造りをしていて、これまで俺はこの形を十字だと言い張つて来た。

言い張つて来たと言つても、俺がこの十字のネックレスを首から提げていることを知つている友人は少なく、それほどの人数に言つてきたわけじゃないが。

「おはよう」

教室のドアを開けたらまだ早い時間だったのに知り合いの顔が見えたので挨拶をしてから自分の席へと座る。昨日もそうであったのだが、長期休暇後の初めての登校のような感覚に襲われていた。

それにしても昨日は言い過ぎた。

出会いつてまだ数時間しか経つていなかつた鹿田と美樹に俺の願いと言つか、目的の触り一部を言つてしまつた。

俺の願いを叶えてくれ。

この言葉だけ聞けばなんて傲慢なのだろう。とてもではないが人に頼む態度とは言えない。完全に自分の欲望を他人に強要させようとしているように見える。

自然と出でてしまったその言葉はある意味俺の率直な願望なのだ。早くこの地獄とも呪いとも言える繰り返しの連鎖から解き放たれたい。だから俺は言ってしまったのだろう。

少し憂鬱気味に1時限目の授業の準備をしていくとどこからともなくテレパシーが俺の頭の中に響いてきた。どこからともなくと言うか、おそらく同じ階層の教室だと想ひながら

『つーかセー、アンタ……ノコノ「学校までついて来りやつて良かつたの。』

『どうして?』

『言つたでしょ。昨日のアレからキュウべえの姿を見てなかつたな。夕命狙われているんじゃないの?』

そう言えば、昨日はアレからキュウべえの姿を見てなかつたな。どうせアイツは神出鬼没のようだし心配することは無いのだが、まだまだ聞きたいことがあるから、出来れば俺の近くにいてもらいたいものだ。

『むしろ学校の方が安全だと頼つたな。マリモニ』

『マリモニは三年生だから、クラスちょっと遠いよ』

『「じぶん配なげ。話はちやんと聞こえてるわ』

『わ、マリさん…？ ト、ト、向井にも聞こえてるってわけ…？』

確かに聞こえているな。だから何するってわけでもないが、他人の会話を盗み聞きしていたような罪悪感があつたけど。

『この程度の距離なら、ト、ト、レパーの圏内だよ

『えと……あの、マリさんおはよ、ハジセ、こ、あ、向井君もおはよ

『おはよ、』

一瞬だけ挨拶を済ませて、ト、ト、あ、あ、

『ちやんと見守つて、から安心して。それに、あの子だつて人前で襲つて来るような真似はしないはずよ』

『なり良いんだけど……。げつ、蹲をすれば影』

言葉から察するにあのまむりで子が登校して来たらしく。俺からみればそこまで靈骨に敵意を向けるような態度を示さなくとも良いと思つ。

『やつだよ。きっと大丈夫だよ、ちやん。ね、向井君…』

『俺に振られてもなんとも言えないんだが……』

『わたし、昨日アレから色々考えたの。向井君に言つてくれたみた

『いい、わたしはほむりひらんがそこまで悪い子には見えない。だからきっと大丈夫だよ』

……俺にそれを宣言されても困るんだが。

『やうね。いやとなつたら私や向井君がいるわけだし、鹿田さんが信じる通りにしたらいいと思うわ』

さりげなく俺を入れないでくださいよ田さん。

『うう……。まどかがそこまで言つなり、あたしが騒ぎ立ててもしようがないか』

そもそも美樹が騒ぎ立てる必要など最初から無い。

『まあ、頑張れ』

俺から掛けられる言葉はこれくらいしか無かつた。

『うん、わたし頑張つてみるー。』

そーかい。俺はその頑張つた結果の末、どうなつたって知らないけどな。どの道、今回も全てはリセッタされるのだから。

## 第1-3話 うん、わたし頑張つてみる！（後書き）

えーっと、今話で一番大事なところは主人公も言つてゐるよつと、主人公は冷静ぶつてますけど頭の中ではパニッシュに陥つてます。だから言動や思考で思つていることなどが矛盾したりしています。よーするに、キャラブレジやないんだよ！

今までキャラブレ酷いなつて思つてたがいるかもしねないのでもう一度。

キャラブレジやないんだよ！ ちゃんと最初からキャラ設定でそう決まつていたんだよ！

ふう……。

## 第14話 恵まれ過ぎてバカになっちゃってるんだよ

今日は散々な日だ。

鹿目たちとテレパシーが切れた後、タイミングを見計らっていたんではないかと勘織つてしまふほど完璧なタイミングで、同じクラスの友人が俺の席までやつて来て「テメエ、マミ先輩といつお近づきになつたんだ！」と詰め寄られた。

ある程度は予想していたのだが、やはり巴さんはこの学校の一部の男子生徒からは大変知名度が高いらしい。俺としては一年も通っているのにその話が初耳だつたことにある種の悲しみが襲つてきた。そこまで俺は友人関係が狭かつたけなあ……？

しかしまあ、落ち込んでいても仕方が無いので、「偶然知り合つただけだよ」と返してみるも、「じゃあ、なんで待ち合わせしてたんだチクショー」と反撃を食らつ。本当のことを言つても良いのだが、それだとまた孤独になりそつたので愛想笑いで場を繋ぐしか無かつた。

『実は巴さんって魔法少女なんだ。それ関係で知り合つてな』そんな事を言つた瞬間に俺の学校生活は脆くも崩れ去ることになるだろう。すでに一度同じようなことを言つて孤独になつた経験がありわゆる経験者は語るつてヤツだ。その時も目の前のコイツは俺のことを突き放しているから信用は出来ない。

その後もウザいぐらいに俺を問い合わせてくる友人から助けてくれたのはHRの開始を告げるチャイムではなく、その後に入つて来た担任だつた。チャイムが鳴つてもしつこく追及してきた友人だつたが、強面で有名な担任から注意されれば引きさがるしか無い。

しかし、担任は強面と言つても、俺が引き籠もつている時には何度もなく俺の家まで来てくれていたので本当は良い教師なのである。まあ、それだけで信用に値するかどうかは別として。

「お前つて少し前と雰囲気変わったよな」

昼休みに入り早々に田さんとのことを問い合わせに来た友人が、そんなことをポロッと口から零した。

そりや、何ヶ月…何年もの時間が経てば変わるさ。それに俺は変わらないと先に進めないと。

「そうか？ あんまり実感は無いんだけど」

「」は惚けておく。あまりにも急激な変化は人を孤独にするからだ。

その後、一、三分の間少し問答があつたが、それは俺のことを呼ぶ声が聞こえてきて終わりを迎えることになった。

「おーい、向井ーー！」

「ちよっと、さやかちゃん……」

手をブンブンと振つて自己主張の激しい美樹と、それをなんとか宥めようとしている鹿田が教室の出入口のところにいた。鹿田の努力は認めるが、そもそもこの教室に来る前に何とかして欲しかった。

「オイイイイー！ マミ先輩だけじゃなく、いつあんな可愛い女子一人となんか知り合いになつたあああああーー！」

「いぬせい。田の前で叫ばないで欲しい。

お前が叫んだせいで鹿田が怯えてるんだけど。まあ、美樹の方は「可愛いなんてそんなあ」ってクネッてるけど。

全くもつてメンドクサイ状況である。

急激な変化は人を孤独にする……そんなことを思った直後にコレだよ。女子と知り合いになる。それは思春期の男子にとつては急激な変化と言えよう。

「とりあえず呼ばれたみたいだから行ってくんな

席を立ち一人の元へ行く。背後から怨念のよつた叫びが聞こえてくるが、スルー一択である。

「なんか用か?」

先ほどまでは引き戸の陰になつて射て確認出来なかつたが、キュウべえもいた。おそらく一人はキュウべえに俺のクラスのことを聞いて来たんだろうな。

「あの、よかつたらわたしたちと一緒にお皿(はん)食べよつよ

「ほらほら、うら若(わらわ)女のあたしらと一緒に昼飯食べられるんだ。もちろん良いよな?」

「別に良いけど。はあ……、ちょっと待つてる

一度自分の席まで戻り、朝買つておいたコンビニのパンを持って彼女たちの元へと再度行く。またしても背後から呪詛が聞こえてくるが無視に限る。

「で、どいで食べるんだ?」

「屋上だよ。風がとっても気持ち良いんだ」

「ああ、了解。つか、」『今度から俺を呼び出すときは『テレパシー』してくれ。またバカが騒ぎだすからな』

俺がテレパシーのことで喋りかけると鹿田と美樹は「ハッ」とした顔になった。こりゃ完全に忘れてたな。

『あ、えっと、その、ごめんね』

『うわあ、失念してた。あたしらがここに来るまでも無かったのか』

ガビーンと悔しがる美樹。なんかそれ古いぞ。

そんな感じテレパシーで会話をしつつも屋上を手指して歩きだす。生徒でごった返している廊下を潜り抜け、屋上へと続く階段を上る。ガチャヤリと開いた校舎と屋上とを隔てる重い扉の向こうには、十月の蒼天が俺たちを迎えてくれた。扉を開いた瞬間に校舎に吹き込む風がまた気持ちいい。

手頃なベンチに座り、昼飯を食べ始める。俺はコンビニの袋からパンを取り出しパクつく。鹿田と美樹は弁当のようだ。

美樹が一人で騒いで、それに鹿田は苦笑しながらも反応する。そして俺は無言で食べる。時々俺にお話を振られるのだが、一言一言で会話が詰まる。やはり同年代の女子と喋るのにはまだ時期尚早のよつだ。

各自食べ終わり、食後の駄弁りタイムに移行する。

「ねー、まだか。願い事、なんか考えた?」

「ううん。たやかちやんは?」

「あたしも全然だわー。なんだかなあ……、いつくらでも思いつくと思ったのになあ。欲しい物もやりたい事もこつぱいあるけど、命懸けってところでやつぱ引きかかっちゃうよね。そつまでするほどのもんじやねーよなーって」

「うん」

「向井には命懸けでも叶えたい願いつてある?」

「あるぞ」

繰り返しか解き放たれたいっていう唯一の願いが。それさえ叶えられるのなら、他のどんな物を対価に支払っても良い。命なんて安いもんだ。

「ホント? どんな願いなの?」

「昨日も書つたが俺の願いを叶えてくれるのなら、俺の願いのこと教えてやっても良い」

今はまだお前たちに書つわけにはいかないんだ。

「ちえ、参考にしようと思つてたんだけどなー」

俺の願いは参考になんてならんよ、と内心苦笑する。それにしても昨日、俺は田さんの家で空氣を重くしてしまったハズなのに、彼女たちは普通に接してくれている。それがなんだか怖かつた。

『意外だなあ……。大抵の子は一つ返事なんだけど』

「ああ、俺だつたら一いつ返事だよ。

「まあきつと、あたしたちがバカなんだよ

「そ、そつかな……？」

「そう、幸せバカ」

美樹はここで言葉を切り、立ち上がってフェンスの向こう側に視線を向ける。ガシリと握ったフェンスがギィギと音を立てる。

「別に珍しくなんて無いハズだよ、命と引き換えにしても叶えたい望みつて……。そういうの抱えている人は世の中に大勢いるんじやないのかな。現に向井にもあるみたいだし」

「そうだな」

「だから、それが見つからないあたしたちってその程度の不幸しか知らないってことじやん。恵まれ過ぎてバカになっちゃってるんだよ。なんで、あたしたちなのかな……」

それはお前たちが少女だからだよ。生物学上、男と分類されていないからこそ、奇跡を願い権利が与えられているんだ。それが堪らなく羨ましいよ。

「不公平だと思わない？ こういうチャンス、本当に欲しいって思っている人は他にいるハズなのにね」

「さやかちゃん……」

美樹の独白はもつともだつた。だつたら俺にそのチャンスをくれとは言えずに、さすがの俺もだんまりを決め込むしか無かつた。

## 第15話 あなたも魔法少女になるつもり？

「……」一帯に沈んだ空気が感染してしまったかのよう、「……」一同は黙りこむ。見るからに元気印の美樹も、鹿田も、そして俺も……。別に俺は沈黙が悪い事だとは思っていない。ただ単に自分がここにいて良いのかと不安になるだけだ。ここ最近、俺の行く先々で沈黙が生まれているような気がするのがより一層俺を追いこみ、口を固く閉じさせる。

不意に空を見上げてみれば、一面の水色の空が迎えてくれるが、ただそれだけだった。

そんな中、そいつは現れた。タンタンタンと上履きが屋上のタイルを踏みならす音が聞こえてきて、一同の視線は自然とそちらに向かられる。

「ちょっといいかしり」

「アンタ……」

「ほむらちやん……！」

その長くて艶やかな黒髪を吹き抜ける風になびかせ、見滝原中の制服で身を包み俺たちの目の前に登場したのはあの黒髪の魔法少女だつた。

彼女は俺たちの顔をそれぞれ一瞥し、最終的には鹿田へと視線を戻す。

『どうすんだよ、おい。これはかなり不味い状況じゃないの？』

美樹がだらりと冷や汗を流す。そりやそうだよな。俺としてはあまり実感がないが、美樹たちは一度このほむらつて子に襲われているから危機感を抱くのは当たり前だ。

俺かれしてみれば、今この状況でコイツが俺たちを襲つてくるなんて思えない。

『どうするもこうするも普通に話しかけられただけの様な気がするから大丈夫じゃないのか』

思つた事をそのまま言つてみる。特に他意は無かつたのだが、どうも美樹は俺の言葉が気に入らないらしく顔をしかめる。

『向井つてさ、緊張感つてものが欠けてるよね』

そんなのは自覚しているよ。そもそも仮に今俺が殺されたって、また繰り返すんだ。そしたら、ほらまた初めの日に元通りだよ。こんな状態では失敗なんて恐れるはずもない。だから緊張感なんて俺には無縁なものだ。

さて、どうやって美樹を宥めようかと思つていると、

『大丈夫よ』

と、どこからともなく巴さんの声が聞こえてきた。周囲を見渡してみると、その姿は隣の棟の屋上にいることが確認出来た。

どうやってこの状況に気付けたのかとか、どうやってこの短時間であそこにやつて来たのかと疑問が浮かんできたが、今はそんなことどうでも良いか。

『ほり見ろ、巴さんもいるみたいだし大丈夫だろ』

『マリさんがいるなり……大丈夫か』

『や、そうだよね。ほむらちゃんは危ない人なんかじゃないよねッ！』

そんなこんなで話がまとまり、美樹が強気に出る。

「なんの用だよ、昨日の続きをかよ？」

「おい、先ほどまでの少し弱氣お前ほどに行つたよ。やはつ巴さんの存在が大きいのか？」

「いいえ、そのつもりはないわ。そいつが鹿目まどかと接触する前にケリをつけたかったけれど、今更それも手遅れだし……」

強気な美樹に対してほむらつて子は冷静にあしらつ。そしてキリツとキュウべえを睨んだ。どうやら彼女はキュウべえに対して敵意を抱いているらしい。

俺からしても、キュウべえは胡散臭いところがある。まあそれでも俺にとつては利用価値があるのでそこには目を瞑っている。

「で、どうするの？ あなたも魔法少女になるつもり？」

彼女は鹿目に視線を戻して言い放つ。昨日もそうだったが、彼女は鹿目に対しても何かあるのかもしねりない。

「わたしは……」

言い淀む鹿目。未だ決めきれていないと言つた風に眼を泳がせる。そんな鹿目を底つように美樹がほむらつて子に噛みつく。

「アンタことやかく言われる筋合いはないわよー。」

しかし、ほむりひて子は美樹に田もくれずに鹿田をその瞳で見続ける。完全に美樹のこととは相手にしないいつものよひだ。

「あなた昨日の話覚えてる?」

「え……つと」

「わづ、なら良いわ。そここの甘言で耳を貸して後悔する」とがなにようにね。忠告が無駄にならなつに祈つてるわ」

周りにいる俺たちのことなんて初めからいなかつたかのよつに鹿田だけにそう言い残して、ほむりひて子はくるりと俺たちに背を向け歩きだす。

「あ……、待つて、ほむりひちゃんつー。」

鹿田の呼びかけにほむりひて子はこちりて振つ返る。

そのことを確認したのち、鹿田は言葉を紡ぐ。

「あの……、ほむりひちゃんはその……どんな願い事をして魔法少女になつたの?」

愚直な質問だった。あまりにも真つ直ぐすぎる質問だ。

だが、鹿田は分かつていい。鹿田が訊いた事は、魔法少女になつて魔女と戦つてまで叶えたかつた願い事で、その人を形成する上で根幹に関わるモノだ。

俺だつて昨日巴さんと話していた時、少し気になつたけどあまり

にも失礼過ぎて質問なんて出来なかつた。

「……………」

ほむらうつて子は言葉に言い表せないといつた感じに顔を歪ませ、さつきのぐるりといつ優雅なターンとは違ひ、タッと焦つたよつに背を向け俺たちの目の前から立ち去るために止めていた足を動かし始めた。

「わたし怒らせちゃつたのかな…………？」

「なんだよ、教えてくれたつていいじゃんかよ」

はあ…………、仕方ない。

鹿田は困惑氣味だし、美樹は軽い逆恨み。そして田さんほ端からあの子に對して敵意むんむんと。キュウべえに至つては傍観している。

こじは俺が動くしかないな。

「ちょっと行つてくる」

そう言い残して俺は駆け足でほむらうつて子の後を追う。鹿田と美樹は俺のことを止めようとした声をかけてきたが、背後からの言葉はスルー一択だつてお前たちが俺のことを呼びに来た時に決まつたんだよ。ある種の自業自得つてヤツだ。

「なあ、待てよ」

「なにかしら?」

ほむりつて子はちようじ屋上から降りる階段の中ほどで足を止めて振り返る。俺は階段の上からそれを見下ろすといつ構図だ。

「その、なんだ。鹿田には悪氣があつたわけじゃないんだ。アイツは昨日初めて魔法少女と出会つて、まだその意味を知らないんだよ」とぐらぐら。それで、もう行つていののかしら?」

「ああ、分かってくれているならいい。俺は向井キリト。お前は?」

自分から自己紹介していく、恥ずかしくなつた。だが、彼女には逆光で俺の顔の赤みなんて識別できないだろ?。彼女は振り向かせていた頭を正面に戻しつつ、

「……暁美ほむり」

視界の先で悠々と階段を降りていく彼女を見下ろす。

暁美ほむり。

よし、憶えた。どこかその名前は聞いたことのあるような気がした。まあ、どうせ過去の知り合いで似たような名前が居たんだろうなと自己完結することにした。

## 第16話 いいか、魔法少女つてのは義務なんだよ

暁美ほむらが上履きで階段を踏み鳴らしながら降りていく様子を見守つてから、俺は鹿田たちのところに戻ることにした。

視界の端で別の棟の屋上にいる巴さん様子を窺つと、すでにその姿は無かつた。きっと暁美ほむらが俺たちの目の前からになくなつて、安心してこの場を離れたんだろうと当たりをつけた。

「どうして向井はある子のこと追いかけたのよ。あんなヤツのひとなんか放つておけばよかつたのに」

「まあまあ、さやかちゃん落ち着いて」

本当にマイナスは何も分かつていない。それき鹿田が質問したことがどれだけ魔法少女にとって訊かれたくないものかと言つ」とを。

「いいか、俺は暁美ほむらじやないが一つだけ忠告しておこてやる」

「ちょっとこきなつむりしちゃつたのよ。そんな真剣な表情向井らしくない」

言葉から察するにどうやら美樹はたつた一日で俺のことが理解できるひしい。ハハッ、思に上がりも甚だしいな。それだけで俺の何度、いや何十度の繰り返ししてきた全てを理解出来るわけないじやないか。

俺の中の何かが爆発しそうになるが、ここはグッと堪える。

「特に俺が忠告したいのは鹿田、お前だ」

先ほどの暁美ほむらに倣つて美樹をとりあえず無視して鹿田に視線を向ける。

「わ、わたし……？」

「さうだよ。お前だよ、鹿田。

「お前たちは魔法少女がどうこう存在か本当に理解しているのか？」

「当つ前じやん。魔法少女つてのは、魔女を倒す正義の味方なんでしょう。そうだよね、まどか？」

「え？ あ、うん。たぶんそうだとと思つけど……」

ダメだコイツら。魔法少女を正義の味方とか認識していたのか。まあ、確かにやつていることは魔女退治といつアーメで見る魔法少女モノの勸善懲惡の物語のようだよな。だけど、現実を見てみれば魔法少女は全然これっぽちもそんな生易しいモノじやない。

「いいが、魔法少女つてのは義務なんだよ。いつか死ぬまで永遠に魔女と戦わせられる憐れな道化でしかないんだ。そうだろ、キュウベえ？」

『そんな風に言つて欲しくはないなあ。僕らとしては魔女と戦かつてもらう対価として、どんな願いでも叶えてあげると言う奇跡を提供しているんだ。僕は物事を一面からしか解釈しないのはどうかと思つよ』

「と畜のひとだ。キュウベえが言つてるんだから間違いない

キュウベえは信頼は出来ないが、信用は出来る。自分が利益を損ねることは言わないだろうが、コイツは眞実しか言わない。それは昨日既に証明されている。

「それじゃあ、契約したら本当に死ぬまで戦わなくちゃならないの……？」

美樹が恐る恐ると言つた感じでキュウベえに訊く。鹿田も心配そな顔でキュウベえを見る。俺の脅しが効いたようで何よりだ。まあそもそも、説明された良い部分だけを自分の知識として吸収するのはよくない。知識とは悪い部分まできちんと把握して、それを理解した上で良い部分を自分で活用出来るように吸収しなければ意味はないのだ。

『簡単に言えばそういうことになるね。でもよく考えてみなよ。全ての生物は時が経てば死ぬんだ。それが早いか遅いかの違いだけじゃないか。それに魔法少女になれば上手くすれば君たち人類の寿命よりもずっと長生きできるかもしねいよ』

「そ、そんな……」

相変わらず、キュウベえはなんて事ないよう言つに言つ。実際、俺からしてみてもなんて事はない。それぐらいの対価なら……と思えてしまう。

しかし、鹿田や美樹は違う。彼女たちは死が恐ろしい物だからだ。死んだら全てが終わり。きっとそう思つてしまつてるんだらつ。その終わりこそ俺が求めて己まないものだとは知らずに……。

「これが奇跡を望む対価なんだよ。魔法少女になつて命懸けで魔女

と戦うまでして叶えたい願い……それはその人にとつて重いものなんだろうな

んだろうな

俺だつたらこの繰り返しから解き放たれたい。そう願う。

だけど巴さんの願いは？ 暁美ほむらの願いは？

それは本人とキュウベえにしか分からぬ。そもそも訊いてはいけないのだ。

魔法少女にとつて願つた奇跡とは、その人そのモノと言つても良いくらい重要なモノで、もしかしたら忘れてしまいたい事のなのかもしねない。

それを他人が気軽に訊いて良いハズはない。

「どうしよう、さやかちゃん……。わたし、ほむらちゃんに訊いちやいけないこと訊いちゃつたッ！？」

「どう、どうしようつて……謝るしかないんじやない？」

一人はようやく事の重大さが理解出来たらしく、どうやって暁美ほむらに謝るかあーだこーだとどうやって謝るかと話し合ひ始めた。そんな彼女たちを見守る俺にキュウベえがテレパシーで話しかけてきた。内容からして俺だけにしか聞こえないようにしているのだらう。

『いいのかい？』

『何がだ？』

『二人にマイナスイメージを植え付けるようなことをしてだよ。それじゃあ、彼女たちに君の願いを叶えてもうえなくなつちやうんじやないのかな？』

キュウベえに言われてみて初めて自分が犯したバカな行為に気づく。確かになんでおれは一人に魔法少女になることに抵抗を抱かせるようなことを言つてしまつたんだろう。

他の方法を模索中とはいえ、一番確実なキュウベえに願えない俺の代わりに奇跡を願つてもらつという選択肢を自ら潰しているみたいだ。

『何でだろうな、気づいたらそうしてたんだ。もしかしたら奇跡を願う権利を持つていてる一人が、あまりにも危なつかしくて見てられないからかもしれないな』

『僕には君の思考が理解できないな。自分の願いとは逆方向の考えを実行するなんて正気の沙汰とは思えないよ』

『自分でもそう思つてるよ』

自分が自分を分からない。

いつたい何時からなんだろうな。俺が俺のことを理解出来なくなつたのは?

俺の願いはただ一つ。

そう、たつた一つなんだからそれに突き進んでいけばいいのに。

どうして俺は……。

## 第17話 こんなに考えてみたんだけど……

あの後、わたわたする鹿田と美樹の作戦会議は昼休みの終わりを告げるチャイムが合図となつて結局良い案も浮かばずに強制的に終了する運びになつた。まあ、俺は関係ないから別に彼女らがどうなると知つた事ではないが。

それにして怒らせてしまつた人がいる教室に帰らなければならないから、心境としては最悪だろうな。

とぼとぼと歩く一人を置いてきぼりにしてさつさと自分の教室に戻る。これで遅刻なんてしたくはないからな。

そして始まるのは聞いたことのある内容の授業。とてつもなく退屈で仕方がなかつた。

\*\*\*\*\*

「さて、それじゃあ魔法少女性体験コース第一弾。はりきつていつてみましょうか」

巴さんは「準備はいい?」と二ツコリとした笑顔で俺たちに訊ねてきた。俺たちと言つのはもちろんのこと俺と鹿田と美樹である。すでに今は放課後で、現在地は学校近くのファーストフード店である。

ちょっと待て。どうしてこうなつた?

確かに昨日、俺は巴さんから勧められて魔法少女の手伝いをする事になつた。しかし何故、それを昨日の今日で実行に移しているんだ。

俺は準備なんてなんもしてないぞ。

「準備になつてるか分からぬけど、持つてきました！ 何も無いよりはマシかと思つてさつと体育館から押借させてもらつてきたわ！」

そう言つて美樹は、先ほどから何が入つてゐるんだと俺が秘かに思つていた木刀や竹刀が入つていそうな縦に伸びた長い袋から金属バットを取り出した。ファーストフード店の店内でそんな物騒なモノを出すんぢやない。強盗だとでも思われたら厄介きわまりない。それにしても女子中学生が金属バットを、じやじやーんと手に持つてゐるのは違和感しかない。いや、美樹みたいにボーグ・シユ気味の子ならばアリなのか？

「うん、まあ……そういう覚悟でいてくれるのは助かるわ」

俺と同様に巴さんも、金属バットを持つて來たといつことよりも、この場でその金属バットを普通に取り出す美樹の神経に若干引く。といつか、あの金属バットは学校からパク いや、借りてきたのかよ。もしも魔女に破壊されたらどうするつもりだろつか。

「まぢかは何か準備してきました？」

「えー？ え、ええと、わたしは……」

「シシと笑いながら金属バットを袋に戻しながら美樹が訊くと、鹿田はどこか自信無さげに目を泳がせながらカバンの中に「じやーん」と手を突っ込んで何かを取り出そうとしている。

まあそれもそうか、美樹の金属バットの次に何か出せつて言われたら俺でも自信がない。もしも自信を持つて出せるとしたらナイフ

だと包丁だと殺傷能力のある刀剣類を持つてたらだな。

「あつ、そうだ。まどかにはトリを務めてもいいつーことにして、さきに向井が何持ってきたか見せてもらつことにしてみつか」

「わ、わやかちやん！」

「いーからいーから。まどかにはやつぱりトリを務めてもらわないとな。期待してるよー。ここで向井よみへー！」

いや、俺は何も持ってきてないって。つか、そもそも今日こんな事あること自体初耳だったし。

俺は「何も持ってきてませーん」と両手を小さく広げて主張する。

「向井はダメダメだなあ。これからあたしたちは魔女退治に行くんだよ？ 武器ぐらい持つてこなーと」

「んなこと言つたつて、結局戦つのは田さんだけだろ。俺は後ろの方で傍観してゐるさ」

そもそも俺たちが魔女退治についていくだけで邪魔なんだから、そんな俺たちが危険なことしたら田さんにとっての負担になるだろう。まあ、自分の身を守るために武器を使うのだとすればまた違つてくれるが。

「たしかにそうだけど……まあいいや。じゃあ最後にまどかいつてみよー」

俺の言葉なんて端から考へる気ないか。どうでもいいけど。

鹿田は「う、うん」と緊張した面持ちで先ほどからカバンに突つ

込んでいた手を引き出す。取り出したのは一冊の大学ノート。  
そしてそのノートをぱぱーんと勢いよく開いて俺たちに見せた。

「「」たなの考えてみたんだけど……」

「「」うね……」

「「」れは……」

……なんて言つたらいいのかな。鹿田が開いて見せてきたページには鹿田自身の絵が描いてあつたと言えばいいのかな。それもどう見ても魔法少女の格好をした鹿田が。武器は「」ですかー。やつですかー。

「と、とつあえず衣装だけでも考えてお「」うかと思つて」

鹿田は静まり返つた俺たちの様子を窺うつよつと見ついた。まあ、美樹が直前に俺に対して武器ぐらじ持つて来いと言つていたし、少し気まずいか。

そんな焦つた風な鹿田を見て巴やさんと美樹は躊躇ひ出す。

「え……？　ええ？　えー？」

「きなり一人が笑い出して」「惑う鹿田。  
よつやく一通り笑い終わつた巴やさんが、

「うん、意氣込みとしては十分ね」

「「」つやまこつた。アンタには負けるわ。あはは。さー！　準備も

整ったし、行くかー！ ぶへへ

「やうね！ 行きましょ！ へへへす

「ひ、ひどいよおー／＼せとまでー。」

憐れ鹿目。だが今の状況は自分で作り出したんだから我慢するしかないぞ。

「む、向井君つーー？」

だから俺に助けを求める子リストのよつたな視線を向けてくるな。まったく、今日は散々な日だよ。

## 第1-8話 ソレのソルジャーは俺にも分からん

ひとしきり俺以外（巴さんと美樹）が鹿田の持ってきたノートで笑い終わった後、俺たちは巴さんの先導で、昨日の使い魔たちと戦闘をしたショッピングモールの改装中のフロアに足を運んでいた。巴さんが自らのソウルジェムを俺たちに見やすいように手に持つ。

「見てこのソウルジェム。光ってるの分かる？」

巴さんの言つ通り、ソウルジェムは淡く光っている。その光源は昨日見た時と同じ黄色だ。

「はい」

巴さんの問いかけに対し、鹿田が代表して返事をする。そしてそれを確認してから巴さんは鹿田と美樹にソウルジェムを見せた理由を話し始める。

「ソルの光が昨日の魔女が残していった魔力の痕跡。つまり魔女の魔力に反応している。基本的に魔女探しはこの反応を頼りにするのよ。ソルとしてソウルジェムが捉える魔女の気配を辿つて行くわけ」

すでに俺は昨日同じような説明を聞いたから特になにを思つわけでもなく知つてている情報の確認がてらに聞いていたが、美樹が素直に自分の思つた事を口にする。

「わー……意外と地味ですね……」

「コイツは現実に何を求めているんだろうな。現実は現実で、ファ

ンタジーの世界とは違うんだぞ。何もかもが派手で煌びやかなモノではないんだよ。いくら魔法少女とか魔女とかアニメの世界の単語が出てきたってここは現実なのだ。

俺の置かれている状況だつて、他人からみれば認識することのできない地味なモノでしかないしな。

巴さんは苦笑いを浮かべながら「いきましょうか」と魔女を求めて俺たちを先導し始めた。

\*\*\*\*\*

街には傾いてきた太陽のオレンジ色の陽射しが降り注いでいる。俺達が魔女を探し始めておよそ一時間。見滝原町を当ても無く歩き続ける俺達をあざ笑うかのように一向に巴さんの手に持つソウルジエムに反応はない。

「光、全然変わらないッスね」

何も変わらないこの状況に、さつきまで上がつていたテンションを無理矢理落とされてしまった美樹が愚痴を零す。簡単に魔女が見つかればそれに越したことはないが、こうも早く見つかるわけがないだろうに。

「取り逃がしてから一晩経っちゃってるからね。足跡も薄くなっているわ」

巴さんは、「じょうがなわよ」とブーブー言つている美樹を宥めている。そんな二人を見守るように俺と鹿目は少し後方で並んで歩いていた。因みにキュウベえは前方のグループにいる。

それにしても鹿田と並んで歩くのは少し恥まずい。とにかく、異性と並んで歩くの身體気まずいわけであるが。

掛けた言葉がないと言つた、それで無言になつてしまつ。もしも美樹みたいにあちらから喋りかけてくれるのなら無言になつてしまつことが無くて助かる。だが、鹿田はそんなタイプではないので現在進行形で困つている。

「あ、あの……向井君」

と、そんな風に気まずい空氣に内心嘆いていとなんと鹿田の方から喋りかけてきた。

「なんだ？」

「……ありがとうございます。わたし向井君のおかげでほむらちゃんに謝ることできました」

「ああ、そうか。そりゃよかつたよ」

僕のことを思い出す。鹿田は曉美ほむらに聞いてはいけない質問をした。それは魔法少女にとつては聞かれたくないだらう事だつた。だから俺は彼女に怒つた……こや、忠告したんだ。

それで鹿田が自分のやつたことに対する謝ることが出来たのなら僕偉だ。

「でも、ほむらちゃんは一言だけ「そつ……」つてだけしか言つてくれなかつたの。わたし嫌われちゃつたのかな？」

「どうだろな、そのとつは俺にも分からん。だが、もしも鹿田が何もかも嫌になつたら俺に言つてくれ。そうしたらお前の進む

べき道を教えてやるよ」

「いや、もしも鹿田が何かに迷つたら俺が進むべき道を教えてあげる。俺を救済すると言つ道を……」

「くつ？ どうこいつって…」

「いや、なんでもない。もしもの話だよ」

「俺の言葉に鹿田は疑問を持つたようだがここはまだ教えてはあげない。」

「田さん、反応ありましたか？」

だから俺は田さんに話しかける」と強制的に話題を変更させる。

「まだ反応はないわね」

「そうですか。でしたら昨日言つていたように自殺現場を回つた方が効率良いんじゃないですか？」

「そうね。その方が良いのかもしれないわね」

俺の助言にすくべさま肯定する田さん。すると美樹が、

「ねえ、マリさん。自殺現場つてビリーフですか？」

「魔女の呪いは人を自殺へと追いやってしまうこともあるの。だから自殺現場を回つてみるのも魔女探しには必要なことだわ」

「そんな……」

「他にも魔女の呪いの影響で交通事故や傷害事件が起きるような大きな道路やケンカの起きそうな歓楽街じや優先的にチェックしないといけないわ。それと 病院ね」

「病院ですか……」

「ええ。病院に魔女が取り着くと、ただでさえ弱っている人達から生命エネルギーを吸い上げられてかなりマズイことになるかもしないから注意が必要ね」

「病院……」

やたら病院と言う単語を気にする美樹。病院に知り合いでも入院しているのだろうか？

俺も知り合いが入院しているがそれほど気にもならない。その知り合いを心配するぐらいなら今の自分を心配したい。

そんなやり取りをしているとタイミングの良い事にソウルジムが黄色く光り出した。

巴さんはすぐさまそれに反応する。

「かなり強い魔力の波動だわ。近いかも」

「「え！？」」

同学年の女の子二人組は突然の展開についてなさそうだ。仕方ないので俺が導いてやることにする。

「どうですか？」

「いいやがなー。」

ソウルジョムが反応する方向へ巴さんは駆けだす。

「ほら、お前たちもついてこい。」

俺は鹿目たちに声をかけて、彼女たちが駆けだすのを確認すると俺も巴さんの後に続いた。

## 第1-9話 僕が死への恐怖を感じると思いますか？

巴さんに導かれるまま俺たち中学生一年生トリオはその背中を追つて行く。

迷惑そうな視線を向けてくる通行人たちに心の中で謝りつつ大通りを駆け、途中の小道に入りやがて俺たちの目の前には人の気配のまったくない廃ビルが現れた。

「ここですか？」

代表して俺が巴さんに確認を取る。

巴さんは自らのソウルジエムを確認してから、

「ええ、ここで間違はないわ。きっとこの廃ビルの中に魔女がいるはずだから、みんなは気を引き締めてけりょうだいね」

「わかつてますよ」

……最低限俺だけは、ですけど。

イマイチ、俺は鹿田と美樹が考へていうことがわからない。きっとそれは性別の違いからくるものだろうから、きっと未来永劫俺には理解出来ないんだろうな。

「……あつー？」

俺たち全員で魔女が潜んでいる廃ビルの全体像を確認していると、美樹が何かを発見したような声をあげる。

「マリさん、屋上に誰か……！」

美樹に言わされてみて、視線をビルの屋上へと向ける。

確かにお世辞にも人が居そうにもない廃ビルの屋上に、〇しだりうか、地上から見る限りスースを着た女性が屋上にあるはずの柵を乗り越えて今にも飛び降りてきそうな状態でその場所に居た。

案の定と言つても良いのだろうか、あまり予想が当たつてもらいたくはなかつたが女性がフラフラとした足取りで屋上の淵まで歩いて行き、全身から力を抜くように前のめりに倒れ、そのまま地上へと重力に身を任せながら真っ逆さまに下降し始める。

「ツー！」

声にならない叫び声をあげる鹿田。

もうダメかと思つた瞬間、巴さんが魔法少女へと変身し、黄色く光る魔力のリボンで女性を受け止めた。流石としか言いよつがない人命救助である。

「アハハハ！」

「大丈夫、気を失つてはいるだけみたいだから」

巴さんが鹿田と美樹を安心させるように優しい声色で現状を伝えた。それを聞いて二人は、ホッと胸を撫で下ろす。

そんな二人を暖かそうな目で見た後、巴さんは俺にも視線を向けてきてニツコリと微笑んだ。きっと俺も知らず知らずのうちに心配そうな影が顔に出でていたんだ、とその時初めて気づいた。

巴さんが意識の無い女性の髪をかき上げて、首もとを確認する。

「魔女の口づけ……やつぱりね」

俺は巴さんの言葉を受け、そちらに視線を向ける。なにやら丸い癌のようなモノが確認出来た。

「口づけ？」

「詳しい話は後… 魔女はビルの中よ、追い詰めましょー。」

「「はーっ…」」

俺としては『魔女の口づけ』について詳しく聞きたいところだが、女子一人がビルの中に突入する気満々だったので、空気を壊さないようにするために諦めることにする。

ま、魔女を倒してからでも遅くはないわ。

\*\*\*\*\*

廃ビルに突入する。建物の中は廃ビルらしく至る所に瓦礫が点在し、壁に穴があいていたりととてもではないが何故取り壊されてないのか不思議に思つてしまふレベルだ。

廃ビルの中をズンズン進む。もちろんのこと先頭は巴さん。そんなもつて次に鹿目と美樹。そして最後尾に俺と言う布陣である。

巴さんが一番前なのは言わずもがな唯一戦闘能力を有しているからだ。俺が最後尾なのは男だからという理由である。

巴さんが美樹の持つ学校から押借りてきたといつ金属バットに触れる。すると、金属バットが黄色く輝き出すと棍棒へとクラスチエンジを果たした。

「うわあー！」

いきなりの出来事だったから美樹が驚く。それを見た巴さんが「ごめんなさいね」と謝りつつも口を開く。

「これでよし。気休め程度だけど身を守れるはずよ」

「おおっ！」

俺が見た感じだと、巴さんは金属バットに魔力を込めたといったところなんじゃないかな。そうすることによりただの金属バットで殴るより物理攻撃の力が上がるとかなんとかそんなところだらう。何も武器を持つてこなかつた自分に軽く苛立ちながらも平常心を心掛ける。

「使い魔の群れを突破出来れば魔女のところに在りつけるわ。それじゃあ行くわよ！」

その掛け声とともに俺たちは魔女の結界の中に侵入する。

結界の中は昨日の髪の生えた丸いヤツが進化したような、蝶の羽を生やした目が四つあるヘドロみたいな使い魔がうじやうじやいた。ちなみにではあるがコイツも髪を生やしている。

巴さんはそいつらをマスケット銃で次々と撃ち倒していく。時たま俺たちの方にまできた使い魔は、美樹が元金属バットである棍棒で殴つて撃退していた。

もつとも男の俺が何もしないのは気が引けたため、途中からそちら辺に転がつていたゾンビゲームに登場しそうな手頃なパイプを手にして美樹と同じ作業を始めたわけだが。つまり何もせずにただただついて来ているのは鹿目だけと言うわけだ。特に他意はない。

「恐くないかしら？」

田さんを使い魔に発砲しながら訊いてきた。  
俺以外の一人は「大丈夫です」とか「全然ツ！」とかまったく恐  
がっていないようだ。やはり田さんの存在が大きいのだろうな。  
俺はと言つと、

「俺が死への恐怖を感じると思いますか？」

俺が唯一恐怖するのは永遠に時間が繰り返し続けること。ある  
意味、死と言う概念は俺にとつては救済される一つの方法だ。  
もしも死ぬだけで時間の繰り返しから解き放たれるのなら俺は進  
んでこの命を差し出そう。

「愚問だつたわね。『めんなさい』」

「いえ、気にしないでください」

笑つて返す。それぐらい今の俺にとってはそれすらもどうでも良  
い事だ。些細な憤りを感じるぐらいなら時間の繰り返しから抜け出  
す手段を考える方が良い。

「いいね」

結界の中を進み続け、一枚のドアの前で田さんが足を止める。  
どうやらこの先に魔女がいるらしい。魔女ってどんな姿をしてい  
るんだろうな。使い魔がアレな感じだから魔女も似たような姿をし  
ているんだろうか？

## 第20話 大丈夫、負けるもんですか

巴さんが勢いよくバタンと扉を開ける。

魔女が居ると思わしき部屋の中には数え切れないぐらいの無数の蝶が、所狭しと宙を漂っていた。

俺たちへの確認を込めて巴さんが言葉を発する。

「……出たわ。あれが『魔女』よ」

蝶が飛び交うこの部屋の中央で、異様なほどに存在感を醸し出す存在があつた。

シルエットで見た感じだとその体躯はキリンのよつた四足動物で、背中には蝶の羽。そして頭から泥を被つたような奇怪な頭部。さらにはそんな頭部にバラの花がいくつも咲いており、その異質さを際立っていた。

「うわ、グロい……」

「あんなのと戦うんですか……？」

女子二人はその見た目から魔女に対しての拒否反応を起こしているようだ。それは仕方の無い反応かもしね。男の俺の目でさえ、あの魔女は気持ち悪く映っている。女の目線で見たあの化け物はどんなふうに映っているかなんて察するに余りある。

今日この時、魔女を見るまで俺は、魔女はいくら超常的な存在とは言え、その姿は人型を保っているんだとばかり勝手に思っていた。だが現実はどうだ。今俺の目の前にいる魔女は、昨日見た使い魔や、ついさっき先に進むためになぎ倒していった使い魔たちを進化させたような、とても人型には見えない姿だ。

気持ち悪い。それが素直な感想だった。

「大丈夫、負けるもんですか」

俺たちの心配に応えるように平気な顔をして、その手にマスケット銃を召喚する巴さん。

別に俺は心配なんてしていなかつたが、巴さんに声をかける。

「危なくなつたら逃げてくださいね」

「ふふ、わかつてゐるわ。向井君は一人のことお願いね」

「ええ、それこそわかつていますよ」

俺が鹿田と美樹を守るのは当然だ。

今現状、俺の願いを叶えてくれそうな存在はこの一人だけだ。彼女たちがもしも死んでしまつたら次の機会を待つしかなくなつてしまつ。

「さがつてて」

巴さんが魔女の待つ戦いの舞台へとふわりと踊りでる。その時に先制に一発と発砲するも巨大な椅子のようなモノで防がれる。

ここで巴さんは一礼。まるで社交ダンスで相手のことを誘つているようだ。

しかしそんなものはお構いなしにと魔女は巨大な椅子を巴さん曰掛け投擲。巴さんはその巨大な椅子を新たに召喚したマスケット銃で撃ち落とす。

戦争だ……。

戦闘が今始まつたばかりなのにそつ思つてしまひませひ、それは常軌を逸していた。例え日本の軍隊がここに現れたとしてもあれに介入する事は叶わないだろ。」

巴さんは次々と地面にマスケット銃が突き刺さるよつて叫喚し、それを引き抜いて魔女目掛けて発砲しては投げ捨てる。それを繰り返し繰り返し実行していた。圧倒的な物量である。

しかし、魔女はその体躯から想像できないほどに身軽ですばやく、なかなか巴さんが放つた銃弾が当たることはなかつた。

「あつ……

隣で巴さんと魔女の戦闘を観戦……いや、彼女の中では見守つているといつた方が正しいか。鹿田が悲痛な叫び声をあげる。

その原因は巴さんが魔女の使い魔に拘束されたからだ。使い魔は魔女との戦闘に集中していた巴さんの背後から忍び寄りその身体を蔓へと変容させ、巴さんの身体に絡み付き下半身の動きを制限する。巴さんは堪らず顔を歪めるがそんなこと知つた事ではないといつよつこ、蔓はそのまま巴さんの身体を空中へと持ち上げた。しかしそんな状況でも巴さんは魔女へと発砲を止めない。だがその弾丸は魔女に当たることはない、巴さんは壁へと打ちつけられてしまう。

「ああ、ああ……

「アハハあああああああんつーーー。」

鹿田が叫ぶ。美樹も信じられないといつた風な目をしている。

俺からじてみれば、どこでそんな心配する必要があるのだろうかと疑問に思つてしまつ。戦闘が始まる前に俺が巴さんと危なくなつたら逃げてくださいって言つたじやないか。それに巴さんは了解の言

葉を述べた。だからあの状況はまだ危ない状況じゃないハズなんだよ。

巴さんは蔓によつて真つ逆さまの格好で吊るされているが、ひらに顔を向けるといつもの優雅な巴さんの表情をする。それでこそ巴さんだ。

「大丈夫……、未来の後輩にあんまり格好悪いとこ見せられないものね！」

巴さんが放つて魔女に当たることはなかつた銃弾から、飛び降り自殺しようとした女性を助けた時と同じ魔力で出来た黄色く光るリボンが続々と飛び出してきて魔女を拘束する。

その隙に巴さんは自らの胸元のリボンを外すとそのリボンで蔓を切断して自由の身になる。

「惜しかつたわね」

どういう原理かは理解出来ないが、巴さんは重力に身を任せながら蔓を切断したリボンをその身の三倍もあらう巨大な大砲へと変化だか召喚をして魔女へと狙いを定める。

「ティロ、フィナーレッ……！」

ドオオオオオオンッ！ という大気を劈く爆音。その大砲から放たれた砲撃は動きを拘束された魔女に直撃し、その身を粉々に吹き飛ばした。

今まで俺が見てきた巴さんの物量重視の戦闘スタイルとは一線をかいだ、高威力の一撃だった。

巴さんは消えゆく魔女に視線を向けつつ、優雅に床へと着地する。

それに少し遅れてカラソと何かが落ちる音が鳴り響いた。

「勝ったの？」

「す、じ……」

魔女が消滅すると結界が崩れ、景色が元の廃ビルへと揺らめくように戻つていった。

「これがグリーフシード。魔女の卵よ」

「田さんさあほどの音を立てて落ちたモノを拾つて俺たちに見せてきた。

「た、卵お！？」

美樹が驚く。俺も魔女が卵から生まれる存在だと知つて驚いた。もつとも美樹のよう表面に出すこととは無かつたが。

「運が良ければ、時々魔女が何個か持ち歩いていることがあるの」

『大丈夫。その状態では安全だよ。むしろお役に立つ貴重なモノだ』

今まで居たかどつかすらあやふやだったキュウベえが心配そうな顔をしていいた鹿目と美樹の為に補足の説明をする。

「魔法少女は戦つたりすると魔力を消耗するの。私のソウルジム、昨夜よりちょっと濁つていいでしょ」

言われてみれば昨日見た時よりも輝きが薄れているように感じる。

昨日今日の戦闘で濁つたところだらうが。

「アハハ……」

「でも、グリーフシードを使えば……」

田ちゃんはグリーフシードを血のソウルジムに近付ける。まる  
とソウルジムから黒い霧のよつなモノが出てきてグリーフシード  
に吸収される。

「あ、綺麗になった」

「ね。コレで消耗した魔力も元通り。前に話した魔女退治の見返り  
つているのがコレなのよ」

「」今まで言い終えると田ちゃんはそのグリーフシードを放り投げる。  
その先には誰かが居たよつてうまい具合にキャッチした。

「「はつ……」

「あと一度くらこは使えるはずよ。貴女にあげるわ。暁美ほむらさん?」

その長い黒髪を揺らしてカツカツと床を鳴らしながら現れたのは  
暁美ほむらだつた。

「あいつ……」

「それとも人と分け合つのは不服かしら?」

「あなたの獲物よ。あなただけモノにすれば良い」

何かが気に入らなかつたのか、暁美ほむらはグリーフシードを巴さんに投げ返した。

「やひ、それが貴女の答えね

俺にはさっぱり分からなかつたが巴さんには何かが伝わつたようだ。

そのまま暁美ほむらはむりくもつと俺たちに背中を向け去つて行った。

「ぐう～、やっぱり感じ悪いヤツー」

「仲良くなれればいいのに……」

「お互いにやつ思えれば……ね」

意味深な巴さんの言葉。いつたい何が何なのだろうか。

魔法少女の中には俺たち一般人にはわからない専門用語でもあるところのだろうか。

「向井君、お疲れ様

「へつ？」

最近、考え方をしている時に声をかけられることが多くなつた気がする。おかげでいつも変な返事をしてしまつていて。

「えっと、どうこういってます？」

「ほり、一人のことお願ひしたじゃない」

ああ、やうごうとか。

「アハ。向井のヤツ何もしてなかつたですよ

美樹が俺の怠惰を巴さんに報告する。

「ふふつ、あなたたちは気付かなかつただけで向井君はずつと周囲に氣を張つていいたのよ。そういう言い方をしてはダメよ」

「やうなのか、向井？」

若干、怪しげな視線で俺を見てくる美樹。だが、巴さんが言つたことで少しだが信じているように思える。

確かに俺は巴さんの戦闘中、周囲の使い魔たちが襲つて来ないかと氣を張つていたが、それは巴さんが頼んできたという理由ではなく、俺個人的理由からだ。

だから少し心苦しい。

「まあ……、うん」

「ありがとう、向井君」

鹿目の感謝の言葉がチクリとこの身を刺した。

## 第20話 大丈夫、負けるもんですか（後書き）

誤字脱字報告についての注意点について書いておきます。

個人的に誤字脱字は致命的なミス以外直すのがメンドイと思つています。ただまあ、報告して頂けたのなら必ず修正しますけどね。

そんなわけで誤字脱字報告についてのマナーを書きたいと思います。ちなみにですが、最近頂いた誤字脱字報告のマナーが悪かったからこれを書いているとかそんなんじゃありません。「あつ、そういうば」と修正中に以前に頂いた悪い例を思い出したから書こうと思つただけです。

まず、最低限、修正箇所が分かるように書いてください。

『○○じゃないんですか?』とだけ報告されても普通はどの場所のことと言つているのかわかりません。

ですので、できれば話数とどんな場面かを書いていただけると探す手間が省けて助かります。

まあ、マナーって言つてもこんだけなんですけどね（笑）

ただ、コレはかなり重要なんで今後は話数だけでも書いていただけると探すのが楽になるので書いてください。最新話で誤字脱字があれば『最新話』って書いていただけるだけでも良いので。

ちなみに他作者様の作品でも上記の通りの方法で誤字脱字報告をした方が良いですよ。

以上、マナー講座（笑）でした。

## 第21話 ああ、もう俺は迷わない

あの後、俺たちは魔女の呪いのせいに投身自殺をしてしまった。そうになつた〇しさんを宥めることになつた。と言つのも、田を覚ました彼女は半ば発狂状態で、自分が何故投身自殺なんとしてしまつたのかと、訳が分からなくなつてしまつていた。

そんな彼女を巴さんは優しく抱きしめ、「大丈夫、大丈夫」と言葉をかけていた。

見る限り、巴さんは慣れたように宥めていたので、以前にもこういう経験があつたのかもしれない。

きっと始めての時は今の俺たちみたいに、どうしたらいいのか分かんなくてワタワタしてしまつていたんだろうな。

\*\*\*\*\*

なんとか〇しさんを元気づけて帰宅させると時刻はもう夜に差し掛かろうとしていた。あと一十分もすれば田は完全に沈むだろ。すでに俺は皆と別れ、とある田地を田指して、一人夕田が照らす街中を歩いていた。

「で、なんでお前がついて来てんだよ?」

『別に良いじゃないか。僕が君について行つて何か不都合な事でもあるのかな、と逆に問い合わせたいよ』

「……まあ、特にないんだけどさ。ただ、これから俺が行くところにお前がついて来たつて、何ら有益なことは起こらな」と思つぞ』

『それは僕が自分で判断することだよ。君が無益だと思つても、僕からしてみたら有益な事なんて星の数ほどあるはずや』

「そんなもんかねえ……」

相変わらず、キュウベえの言つていることは回りくどくて理解し難い。どこか言い包められているようで気分は良くないが、その口（実際にはテレビシーだが）から紡がれている言葉はいつだって嘘偽りの無いモノのハズだ。

キュウベえの目的が分からぬ以上、特に俺から何かをする訳にもいがず、済し崩し的についてぐることを許可する形になってしまった。

俺がキュウベえを伴つて歩くこと三十分。目的地であつた白い建物が視界で確認できるまで近づいてきた。

『誰か知人でも入院しているのかい？』

「ん、まーな。なんか今日、久しぶりに会いたくなっちゃつてさ」

いつたい、いつぶりに会うことになるのだろうか？

永遠とも思える繰り返しの中で、俺の体内時計は壊れきつているので、イマイチいつぶりなのか把握できない。

病院内に入り、まだ面会時間が残っているか受付で確認する。

面会時間は午後八時までのこと。今はまだ午後六時を回つたところだから余裕がある。

一応、確認がてらに目的の知人が入院している病室を受付で訊き、

自分の記憶と相違ない事を確認したのち、その病室へと向かつ。

「よつ。暇だから来てやつたぞ」

ノックも無しに無遠慮に扉を開いて病室に入る。この病室の入院患者さまは身体をビクッと震わせたが、俺の存在を知覚すると頬を緩ませてリラックスしたような顔になつた。

「なんだキリトか。いきなりやつて來たからビックリしたじゃないか」

「いや、久しぶりに恭介に会いたくなつてな。もしかして邪魔だつたか？ それなら今すぐ帰るんだが」

「ちょうど僕も暇をしていたところさ。それよりも一日ぶりなのに“久しぶり”ってどういふことなのさ」

ハハツ、と恭介は笑つた。

コイツは上条恭介。病院に入院しているところから察せられると思うが、所謂他人から同情を買われ憐れみの目で見られる可哀想な少年だ。

将来を有望視されたヴァイオリニストだったが、三ヶ月ほど前に交通事故に遭つてしまい、治療も虚しく身体に麻痺が残つてしまつた。特にヴァイオリニストの命である指の回復の見込みはないと言われてしまつて、絶望を味わつてしまつていた。

恭介とは中学に入学した時からの知り合いで結構仲良くしていたが、あの事故の直後の彼には近づき難く、それでも今こうして彼が笑顔を出せていることにホツとしている。

「あれ？ そうだつけか？」

あははっ、と俺も恭介につられて笑う。今日は色々なことがあったが、友人と談笑するこの時間が一番楽しい。

巴さんにとっても、鹿田にしても、美樹にしても……もちろんキュウベえにしても今だ俺は信じきれない。そのせいですつと緊張を張り巡らせていたが、今はそんな事をする必要はない、自然体の自分が出せた。

「なあ、恭介」

「なんだい？」

恭介と会話をする中で、ふと氣になった。

系統は違うとはいっても、言葉上では同じ“絶望”を知る友人に俺は問い合わせたくなった。

「もしも、だ。もしも、奇跡や魔法があつたらどうする？」

いきなりの突拍子もない質問だったが、恭介は十秒ぐらい考えてから答えてくれた。

「もちろん、この指を治すぞ。例えどんな対価を払つても良い。僕はヴァイオリンが好きなんだ。僕の魂と交換だつて言われても了承してしまうんじゃないかな……」

麻痺の残る手を持ち上げて、それを見ながら言つ恭介。

「そつか……、やっぱりお前もそつこつ答えに辿り着くよな」

恭介の言葉を聞き、心のどこかにあつた罪悪感が消えていく。こ

これまで自分を雁字搦めに拘束していたそれは最後の防波堤だったのかかもしれない。

だけど、それを俺は否定することとした。

叶えたい願いがあるのなら、己の全てを賭けるつもりにならなければいけない。

「そうだな。うん、そうだ。そうに決まっている。

「急にこんなこと聞いてくるなんてキリスト教しくない。どうかしたのかい？」

「ちょっと悩んでることがあつてな。恭介のおかげでスッキリしたよ

「そうか、それなら良かつたよ。もしかして僕の心の傷を抉つてきただんじゃないかと思ったよ」

「……悪い。そんなつもりはなかつたんだけど」

「わかつてるよ。キリストはいつだつて僕のことを心配してくれたよね。ただ氣を使うだけじゃなく、敢えて僕の現状を説明してきたりして、一時は僕をいじめて楽しんでいるんじゃないかと思った時もあつたけど、今はそれが優しさからきたものだつてちゃんと理解しているよ」

「……あつ、そろそろ面会時間が終わるみたいだね」  
かけていただけさ。

「……」

恭介に言われ時計を確認してみると、確かにもう少しで午後八時になるところだった。

「そうみたいだな。また来るわ

「うん、待ってるよ

恭介の病室を後にする。ぴょいぴょいとキコウベえが俺に続き病室から出していく。

『なんかお前にとつて有益なモノでもあつたか?』

病院内と書つた上でテレパシーで話しかける。

『まあ、それなりにね。僕の事なんかよりも君も収穫があつたんじゃないかな?』

おおつ、バレてるわけね。病室ではおとなしく俺が腰かけたお見舞い用の椅子の下にいた癖に、ちやっかり聞いていたんだな。

『ああ、もう俺は迷わない』

悪魔と罵られよつが、何としてもこの繰り返す時間から這い出てやる。

そつ、例え無垢な少女を欺くことになつたとしても……。

俺は、俺の叶えたい願いがあるのだから。

## 第22話 考える余裕さえなかつた、つてだけ

もう迷わない、と決心してからおおよそ一週間。願いの為なら『』の全てを賭けると思つていても、結局は今までと変わらず日々を過ごしてはいた。と言つても、巴さん主催の『魔法少女体験コース』とやらに参加してはいたので『エンジヤラスな日々』であったが。

そんな日々であつたが、危険な事は少なかつた。なぜなら、俺たち一般人（少々道を外した）に危険が及ぶ前に、すべて巴さんがそれを排除してしまうのだ。巴さんがこの体験コースを開いてはいるから当然のことだと思つが、それで勘違いしてしまうヤツもいる。

「やつぱ、マリエたこはカッ『良いッスよ！』

使い魔を華麗に倒した巴さんには美樹が称賛の言葉を贈る。別にそれ自体が悪い事ではない。

あまりにも楽観視しているのだ。

「もう！ 見世物じゃないのよ。危機感も持つてもらわないと困るんだから」

変身を解いた巴さんが美樹を窘める。

そう、そうなのだ。使い魔と言えども俺たち一般人にとつては危険なのだ。それなのに美樹はまるで映画館に来ているかのようにこの状況を楽しんでいるように思える。

「イエース、分かつてますつてー、いざとなつたら『コイツがあるんで大丈夫ですよ』

そう言って、美樹は右手に持つ金属バットを掲げた。

……まだ持っていたのか。そもそも学校に返さないと盗難の被害届が国家権力の方に届けられてしまうんじやないか？ まあ、たかだかバット一本でそんなことにはならんとは思うが一応ね。

「グリーフシード落とさなかつたですね」

「まあ、今のは使い魔だつたしそれを期待するだけ無駄じゃないのか」

鹿田がポツリと零した言葉に俺が答えてやる。どうやら使い魔がグリーフシードを落とさないことを知らなかつたらしい。

『 そうだね。今のは魔女から分裂した使い魔でしかないから、グリーフシードは持っていないよ』

俺の言葉にキュウベえが補足をした。

「ここんとこハズレばつかじやない?」

美樹はブーブーと頬を膨らませる。もしかしたら魔女退治を遊びか何かと勘違いしているかもしれない。敵キャラを倒してドロップアイテムを期待する気持ちは理解できるが、ここは現実なんだぞ。別に俺はどうつてことないが、美樹は死ぬことが恐くないのか？

「放つておくわけにはいかないわ。使い魔だつて成長すれば魔女になっちゃうもの」

確かに使い魔は魔女になる。そしてその魔女が人を襲うことが、

巴さんにとっては許せないことなのだろう。だから、いつか街を歩いてパトロールしているのだ。

「やういえば一人とも、何か願い事は見つかった？」

と、思い出したかのように巴さんが口を開く。

「いやあ、まだ……。まだかは？」

「あはは、わたしもまだかな」

二人は顔を向き合わせて乾いた笑い声を出した。

「やうだ！ マリさんは……」

何かを閃いたのか、鹿田は口を開いたが、全てを言い終わる前に口を噤んだ。大方、巴さんにどんな事を願ったのか訊こうと思つたのだろう。だけど、俺に忠告されたことを思い出して咄嗟に口を閉ざしたと。

「何かしら、鹿田さん？」

巴さんが鹿田が急に黙りこくれた事に疑問を投げかける。さて、鹿田はどうするのかねえ……。

「あつ、いえ、その……」

もうびりして良いのか分からなくなつて、鹿田は言葉を上手く紡ぎだすことが出来なくなつっていた。

「大丈夫よ。言こづらっこになら言わなくていいけど、怒つたりしないから言つてくれても良いのよ」

巴さんは勘違いしているのか、いつもの柔軟な雰囲気で言つた。それが巴さんの長所であり、欠点でもあると俺は思つ。

鹿目は巴さんの言葉を聞いて、意を決したようにあわあわさせた口を動かす。

「言こづらっこになら別に良いんですけど、マリさんまだんな願い事をしたんですか？」

結局、鹿目は訊くんだな。俺としても気になることではあるが、とてもではないが合つてそしたらで訊ける内容では無い。

まあ、こつもならこつして鹿目がやらかした場合は美樹がフォローに回るのだが、その美樹さえも「どしどしそう、どしどしそう……」と慌てていてフォロードーンではなく、助け船が来ない状態だったから進むしか無かつたのだらうが。

鹿目の発言で先ほどまでの空氣が凍りついた。

しかし、巴さんは先ほど自らの言葉で自分の首を絞めていたので喋るしか道は残されてこなく、暫しの沈黙の後、巴さんはポツポツと口を開く。

「………… そうね。私は…………」

「えー? あ、いや、言こづらっこなら別に…………」

「ううん、いいの。自分が言つたことには責任を持たないよね」

年上としての義務と言つたが、意地と言つた。俺の思つていた以上

「巴さんはある意味で頑固者だった。

「……数年前になるわ。家族でドライブに行った時、大規模な交通事故に巻き込まれてね。そこでキュウベえと出会って」

語られたのは、不幸な一人の少女の話。

その話を聞いて、その少女 巴さんと俺は少し似てると思った。自らが原因では無く、ただただ巻き込まれただけなのだ。

ただ、俺と巴さんとでは違うことが一つだけあった。

その不幸を自らで解消出来るか出来ないかの違いである。田の前に希望<sup>キュウベえ</sup>が存在したのにもかかわらず、一方は少女だという理由で願いは叶えられ、一方は少年だからといつ理由で願うことすら出来なかつた。

「 考える余裕さえなかつた、つてだけ」

考える余裕がなかつた？

良いじゃないか、例えそうだとしても願いは叶えられたじゃないか。

巴さんが息継ぎの為に話を区切ると、鹿田と美樹から「口クソ」と唾を飲み込む音が聴こえた。

「だからね、選択の余地があるあなた達にはきちんと決めてほしいの。私にできなかつた事だからこそね。もちろん、向井君もね」

俺もだと……？ 願うことすら叶わぬ俺にいつたい何を選択する余地があるといつのだ。

巴さんの言葉に俺は戸惑いを憶える。

「……あ、あのさ、マリさん！」

これまで事の成り行きに身を任せていた美樹が口を開いた。

「願い事つて自分の為の事柄じゃないと駄目なのかな？」

「え？」

「例えば、例えばの話なんだけどさ。あたしなんかよりずっと困っている人がいて、その人の為に願い事をする……とか……できるのかなつて……」

それは可能だ。むしろ可能でなければ、俺がお前たちとこうしてつるむ意味すらなくなつてしまつ。

しかし、自らの願いを叶えてもらつた相手は、普通なら真実を知つたら後悔するだろ？。自分のせいだ、一人の少女の人生を台無しにしてしまつたつて……。

『うん、可能だよ。前例もないわけじゃないし』

キュウベえが美樹の質問に答えた後、意味深に俺へと視線を向けてきた。

ああ、わかつてゐ。俺はもう迷わない。

「でも、あんまり感心できた話じゃないわね」

「どうこうことです？」

「美樹さん。あなたはその人の夢を叶えたいの？ それとも夢を叶えた恩人になりたいの？」

厳しくも、美樹のことを心配する優しい言葉。巴さんは他者を気づかい過ぎて呆れてしまいそうになる。

巴さんの言葉に美樹は顔をしかめる。

「他人の願いを叶えるのなら、なおのこと自分の望みをはつきりさせておくべきだわ。同じようなことでも全然違つことよ、これ」

もしも俺の願いを叶えてくれたのならビックリでも構わない。やつ、俺を助けてくれるのなら。

「…………きつい言い方でごめんね。だけど、そこを履き違えたまま進んだらきっとあなたは後悔することになるとと思うから」

亀の甲より年の功…………って言つのは、たつた一つしか違わない巴さんに失礼か。それでも巴さんと俺たちの人生の密度は全然違うんだろうな。

「…………うん、そうだね。あたしの考えが甘かつた。ごめん」

暫しの沈黙の中で何か解答を導き出したのか、美樹はきつぱりと謝罪を述べた。コイツの性格から言えば有り得ないことのよう思えてならない。

「難しい事よね。焦つて決めるべきじゃないわ」

『僕としては早い方がいいんだけど』

「だめ！ 女の子を急かす男は嫌われるぞ？ 向井君はキュウべえ

「本当に女の事を急かしちゃダメよ」

「わかつてますよ」

「あはせ……」

まあ、良こや。とにかく俺は田の前の事からやつてこくしかないんだ。

## 第23話 向井君には向井君の願いがあつたのよね

かつたるい授業を終え、学校から帰宅することにする。

今日は『魔法少女体験ツアード』なる男の俺が何で参加しているか分からぬモノは休みだそうで、少し調べたい事があるのでショッピングモール内にある書店へと足を向けていた。

何故、図書館に行かないのかと訊かれれば、あの人気がいるのに静かな空間に俺が堪えられないからである。まあ、調べ物つて言ってもそこまで真剣に調べなければならないわけでもないし、まあいいかつて感じだ。

「魔法……魔法……魔法……」

本が痛まないよう空調設備の行き届いた大型の書店で、人差指で新書コーナーの本棚にキレイに並べられた書籍をなぞりつつ、知りたい情報が書かれているだろう本を探す。

「おっ、『現代科学による魔法考察』か……」

そう、俺が調べたかったこととは『魔法』についてである。

こんな方法で間違っているだろう方法を調べるよりも、巴さんやキュウべえに訊いた方が手っ取り早いわけだが、例え間違っているとしても知ることに意味があると思つていてる。

可能性が低くとも、選択肢が多い方が良い。

そのままレジに直行してから書店を出る。

「……今日も何も変わらないか」

どんな些細なことでも良い、どんな小さなことでも良いんだ。

日常の裏側にある非日常さえ俺の田の前に現れてくれたら、俺はそれに飛びこむだらう。存在するかもしない可能性を求めて。

目的のモノは買ったので、それを読むために帰宅することにする。別に公園とかで読み耽つても良いが、最近は暗くなるのが早いので家に帰つてから読み始めたことにした……が、どうもそういうわけにはいかないらしい。

「向井君、おねがい来てっ！」

「うわあ、ちよ、待て！？」

何故だかよく分からぬが、全力疾走の鹿田が俺の腕を取り、そのまま連れだつて行こうとしたのだ。急いでいるみたいなので、仕方ないと諦めて俺は鹿田に腕を掴まれながら並走することにした。

「詳しい話は後でするから今は急げわよー。」

といふか、田さんまでいる。これは何が起つたとこいつことで間違いないだろう。望んでいた非日常の始まりだが、もう少し穩便な方法で誘つて欲しかつたものである。

あつ、せっかく買った本落とした……。

\*\*\*\*\*

鹿田に先導されて走ることおおよそ十分。

俺と巴さんはそれほどでもなかつたが、鹿田は途中から走るスピードが落ちてきて最後の方は俺が逆に引っ張る形となつた。

息を切らせながらも鹿田は、

「はあ、はあ……マミさん……！」です！」

「ええ！」

巴さんはソウルジムを掲げる。するとH音がぐにゅりと歪んだ。なるほど、鹿田が焦つていたのはそういうことか。このときに魔女がいると……。

「キュウべえ、状況は？」

『大丈夫、すぐに孵化する様子はないよ』

巴さんが空間の歪んだ場所に話しかけると、いつもの無感情のキュウべえの声と黒いカーテンレバーが聴こえてきた。どうやらこの魔女の結界の中にいるらしく。

キュウべえと話始めた巴さんを横田が窺いつつ鹿田に向かって言つ狀況なのか訊く。

「えと、せやかちゃんといつしょにグリーフシードを見つけて……、阻止足らさやかちゃんがここに残るつて言つて、マミさんを連れて来なくちゃいけなくて……でもそれはもう終わつたんだけど、途中で向井君を見つけて無理矢理連れてきやつたんだけど、『めんね』

うん、とつあえず鹿田の言つてこむことは分かつた。とにかく魔

女の結界の中に美樹がいると言つわけだな。

「落ち着け」

色々と頭の中が纏まつてしまつてこない鹿田の両肩に手を置く。

「鹿田は良くやつたよ。」「まだ田舎を連れてきたんだろ？ それで良いじゃないか」

「えつ……」、「うん。こきなり連れてきちゃつて」「あんなさー

「気にしてないから安心しin。むしりありがとつと言いたいといふだ」

「え……？ でもわたし……」

「良じにから氣にするなつて」

聞きわけの無い鹿田の頭を乱暴に撫でる。突然の事態に鹿田はあわわし始めた。

「鹿田は田の前の自分に出来ることをしたんだよ。それは他人が責めるべきことじじゃないし、それに俺を連れてきたことに關しては、俺自身としてもありがたいと思つてるんだ」

そこまで言い終えると田舎の方から「一人ともやりそろ行くわよ」とお声が掛かった。もちろん、連れていかせてもう俺たちはそれに従うしかないので、俺は鹿田の背中をポンッと軽く叩き、言外に行くぞと言つてやる。

鹿田もバカではないので、田舎の後に続いて魔女の結界の中に

入つていつた。それに俺も続く。

相変わらず、魔女の結界は異質な空間だった。今回は病院の中みたいな空間だ。

ああ、そう言えばここは病院だつたか。魔女の結界に入る前に見た景色を思い出す。

しかも恭介が入院している病院とか状況が最悪過ぎる。もしも恭介に何かがあつたら……。

良いじゃないか、どうせまた繰り返すんだし。

ふと頭に浮かんだ言葉が俺に圧し掛かる。

俺は何を考えているんだ。これでは、諦めてしまったようじやないか。

頭を振つてその考えを無理矢理振りほどく。

「待ちなさい」

巴さんを先頭に結界内を進む俺たちの背後からそんな声が聞こえてきた。

「何かしら?」

あくまで冷静に巴さんが返す。振り返つた先には一人の少女がいた。

暁美ほむら。現状の俺には魔法少女であると言つ事実しか知らない一人の少女だ。

彼女は巴さんの射抜くような視線なんて気にもしない風に淡々と口を開く。

「今日の獲物は私が狩る。もちろん結界内の一人の安全は保証するわ」

「だから手を引けつて言つの?」

何故だかよく分からないが、巴さんは暁美ほむらに對しての歎たりが強いやうに感じる。こつもの優しくて柔軟な巴さんから想像できないうらいに、暁美ほむらに對して敵意をむき出しへしていた。

「信用すると思つて?」

言いながら、巴さんは腰を屈め右手を地面に向ける。

すると、暁美ほむらの足元から巴さんの拘束魔法である黄色く光る魔力のリボンが現れ、暁美ほむらを拘束する。

リボンによつて不意打ちで拘束された暁美ほむらは苦悶の表情を浮かべ、

「な……ッ! ば、バカッ。こんな事やつている場合じや……」

「怪我をせんつもつはないけど、あんまり暴れたら保証しかねるわ

殺す覚悟は辞さないとでも言つよつて冷徹に巴さんは言つ放つ。

「行きましょ、鹿田さん、向井君」

「……はい」

暁美ほむらに背を向け結界の奥に歩き始めてしまつた巴さんの後に鹿田が続く。俺もそれに倣い歩きだす。

「待ちなさい！ 今度の魔女は……これまでとは訳が違つ……」

背後からは悲鳴に近い俺たちを制止する暁美ほむりの声。  
そうだ、今なら……。

「田ちゃん。すいませんが、俺は少し戻つてきますね」

決めたのなら即実行。それに今じゃなことこれから先、いつ暁美ほむらと話を出来るかわからない。拘束されている彼女となら無理矢理にでも話すことが出来るだろう。

「わかったわ。でも、気をつけなさいね。いくら拘束していると言つても、相手は魔法少女なんだから」

「はい。だからこそ、戻るんですよ」

「ふふ、ううね。向井君には向井君の願いがあつたのよね」

「田ちゃんは、言葉に出さなくとも俺のやりたい事が分かってくれている。別に分かってくれな良くても良いのだけれども、鹿目みみたいに困惑の表情浮かべるのは止めてもらいたいな。

「田ちゃんの近くにいれば安全だから心配するなよ鹿目

「でも向井君は……」

「俺の事も心配するな。俺は俺の意思で俺自身の為に行かなくちゃならないんだ。例え無駄な事でも無意味じゃないんだ。無駄を積み重ねればしつかりとした土台は作れるんだよ」

それでは、と巴さんに言つてから俺は彼女たちの進むべき方向から逆走し始める。

さて、暁美ほむらはなを知つてはいるのだろうか？

あわよくば、俺の知りたい情報であつてほしいモノだ。

## 第24話 あなたと「人きりなんて」めんだわ

「よひ

俺は目の前で拘束魔法によつて捉えられている暁美ほむらの姿を確認すると、彼女に声を掛けた。

暁美ほむらの方も、俺の存在には気づいていたようで、淡々と口を開く。

「何か用かしら？ 用がないのだつたら、私の身体を拘束している田[アマ]のリボンをどうにかして欲しい」といだわ

「うん、無理だ。たかだか巻き込まれただけの一般人の俺に魔法のことをどうにか出来るわけないだろう。お前もわかつていて言うなよ」

「ええ、そうね。それであなたの私に何の用があつてここまで戻ってきたのかしら？ まさか拘束されている私を見て善がりに來たとでも言つの？」

自分では身動きとれないハズなのに、暁美ほむらの双眸は毎度のこと見てきた冷静な視線でこちらを射抜いてきている。

まったく、俺が何かするとか考えないのかねえ……。仮にも俺は男で、暁美ほむらは女だ。身動きとれない女が目の前にいれば普通の男なら何かいらしい事でもする可能性が高いだろう。俺はしないけど。

俺は大きなため息をつき、壁に寄りかかる。

「そんなことをするために俺は戻ってきたわけじゃない。俺は魔法少女である暁美ほむらと少しばかり話があるんだ」

「え？ でも私にはあなたと話すことなんて無いわ

「ハハハ、まあそんなこと言つなよ。これから先、長い（・・）付き合にならぬかもしれないんだしわ」

「それはどうこうの意味かしら？」

「ああ、気にするな。」この話だから

よくよく考えてみれば、今こつして焦る必要はないのではないかと思つてきた。

現状では、俺と彼女は敵対している。しかし、これから先の繰り返された時間のいずれかは敵対していない関係になつてゐるかもしない。そう考えれば焦る必要なんて無かつた。

諦めに似た考え方かもしれないが、魔法と出会つた今回だけで俺の願いが救われるとは思つてはいない。

「…… どうかもしないわね。あなたとは長い（・・）付き合つてなるかもしないわ」

「んあ？ それはどうこうの意味だ？」

「向井キリスト。あなたには関係ない話よ」

「ほう…… 暁美ほむらはなかなかに口が悪いよつだ。これはまともに話せるようになる今まで時間が掛かるかもな。

「まあいいや。今回ほこりで引く事にするよ。また今度、一人きりで話がしたいよ」

壁に預けていた背を浮かせて俺は暁美ほむらに背を向ける。

「あなたと二人きりなんてごめんだわ」

「背後から悪態が飛んできた。

俺は上半身だけ振り返り、

「そうだな。確かに今みたいな状況じゃないと二人きりは俺の身が危ないな」

少し特殊な存在とは言え、あくまで俺は一般人から毛が生えた程度の存在。だけど、アチラさんは魔法少女なる非常識な存在。

今はこいつして巴さんの拘束魔法のおかげで身の安全は保障され、更には話すことが出来ていいけれど、それがなければ俺の話なんて聞いてもらひつことすら叶わないだろ？

「じゃあ、またな」

今度こそ俺は暁美ほむらに背を向け、戻ってきた道を更に逆走する。

……暁美ほむら。

確かに俺は彼女の事を知らないのだが、どこかで会ったような気がする不思議な魔法少女。

とりあえず、彼女のことは後回しだ。

\*\*\*\*\*

先に進んだ田中さんと鹿田に追いつく。

「どうしたんですか？」

「ううん。なんでもないの」

明らかに田中さんの様子がおかしかった。田元に涙を溜め、目は真っ赤に充血していた。それで何でも無いと言わざれども説得力なんてありやしない。

「私のことは良いから、向井君はあの子とお話をじて何か収穫はあったのかじらう。」

「ええ、まあ」

今はとても話せる状況ではないと言つことがわかりましたよ。いつになつたら曉美ほむらと話せるかわからないけど、それはきっといつか実現するような気がしていた。だから俺は先ほど引いたのだ。その後は一・二問答があつたが、それはキュウベえの緊急を知らせる声で中断せられる事になった。

『アハ大変だ！ グリーフシードが動き始めた！ もうすぐ孵化する……急いでー』

「ええ、わかったわ。だったらもうゴンゴンする必要もないわね！」

そう言つと、巴さんはそれまで着ていた見泷原中の制服から魔法少女の「スクールームへと変身する。

「行くわよ、一人とも…」

「あ、はいっ」

「ええ」

「うして俺たちは駆けだした。

途中で出現する使い魔は巴さんのマスケット銃によつて撃たれ、時には銃身で殴打され、その身を滅ぼされていった。

「お待たせつ…」

「ま、間に合つた……」

美樹の元へとなんとか辿りつく。

視界一面に巨大なケーキやらクッキーやらプリンやらが埋め尽くす、ある意味夢の空間ではないだろ？ しかし、だからこそこの空間には異質さしか存在しなかつた。

巴さんが異質の中心へと目を向ける。

どうやらグリーフシードは孵化してしまつたようだ。愛らしいぬいぐるみのような魔女が俺たちを可愛らしく見ていた。

しかし、巴さんは非常にそんな魔女へと銃弾を放つ。撃つては新たなマスケット銃を召喚し、次々と銃弾は愛らしい魔女へとヒットしていく。

巴さんは止めどばかりに暁美ほむらへも使用していた黄色い魔力

のリボンで魔女を拘束し、マスケット銃を魔女へと向ける。

「これで終わりよ」

圧倒的な力の差がそこにはあった。

少し前からしか巴さんことは知らないが、それでもいつもの巴さんよりも強さを感じた。何故かはわからない。だけど、それでも強かつたのだ。

パンツと乾いた銃声が鳴り響く。

真っ直ぐ空気を切り裂いて突き進んだ銃弾は拘束されて身動きのとれない魔女の胴体に吸い込まれるように命中した。

「え……？」

この場にいる誰もが巴さんの勝利を確信していた。鹿田も美樹も、そして当事者である巴さん自身も。だから巴さんは反応できなかつた。愛らしいぬいぐるみのような魔女の口から顔のついた黒くて長い蛇のようなヤツが這い出てきた事を。

しかし、俺だけがそいつに反応することが出来た。

何故なら俺は誰も信じていらないからだ。そう、自分さえも信じていない。だから巴さんの勝利を確信しつつも、それを信じられない自分がいて、そいつが無意識に俺の身体を動かした。

「『ハフツ』

大丈夫ですか巴さん、……確かにそう言おつとしたのに俺の口から血が吐き出された。

信じられないと叫んだ巴さんの表情。まあそれもそうか。今、俺の右腕から右上半身にかけてあの魔女に食われちまつたんだからな。咄嗟に巴さんの事を左手で押して助けた対価ってヤツだ。何ら後悔はしていない。

何故自分がこんな事をしたのかはわからない。だけれども、今は魔女に殺されたらこの連鎖から解き放たれるんじゃないかと思つて少し期待していた。

ほんの少しの間だけ呆然としていた巴さんだが、彼女の魔法少女としての役割と言つていいのかわからないが、俺の右上半身をバリバリと咀嚼している魔女に向けてマスケット銃の撃鉄を鳴らした。

そこまで確認して俺の意識は遠のき始めた。

## 第25話 何で俺の事を中途半端に助けたんだ！？

「向井君！-？」

段々と遠のく意識の中、俺の視界一面には必死な形相の田さんの顔が見えた。

身体が暖かく感じた。おそらく、田さんが治癒魔法でも使ってくれているのだろう。しかし、田さんの表情を見る限り、俺が助かる事は無いんだろうな。

まあ別に俺は命が助かる事自体にこじして興味は無いのだから、でも良い事なのが。

美樹が田を白黒させて驚いている。鹿田の田からは大粒の涙が堪えず流れ出て、俺に何かを伝えようと叫んでいる。

もはや断片状にしか彼女たちの声は聞こえてこない。

「ねえ、キ　え！　　を　　ねーとほで　　いの！-？」

鹿田がキュウべえに縋るよに詰め寄った。何を言つているのかは聞き取れない。しかし、その内容はなんとなくわかった。

おーおい、そんなことはしなくても良いんだよ鹿田。魔女に殺される事で、この永遠とも言える繰り返す時間の呪縛から解き放たれるかもしない。今回、俺はその可能性を試す事にしたんだよ。だから頑張らなくても良い。どうか死なせてくれ。

『もちろん可能だよ。なに、簡単な事さ。君にはその願いを可能にする力があるんだ』

いやにクリアなキュウべえの声。頭に直接語りかけているのだから

ら当然のことかもしれないが、今の俺にはそれが苦痛でしか無かった。

待て、キュウベえ。お前は何を……。

「 に……？」

『 もひろんだよ。だから、僕と契約して魔法少女になつてよー。』

止める……止めてくれ鹿田。お前は俺に可能性を試させてくれる事すら許さないとでも言つのか？

それに俺の為に願つてくれると言つのなら、俺を生かすのではなく、存在を抹消してくれ。そうすれば俺は楽になれるんだ。

喉が張り裂けそつなぐらい大声を出しそうな叫び声。その叫び声には冷静な彼女には窺い知ることが出来なかつた感情と言つモノが俺に伝わってきた。

きっと、それは俺と彼女が思つてゐることが同じだつたからだろう。

不意に聞こえてきた、俺の言葉を代弁するよつた叫び声。その叫び声には冷静な彼女には窺い知ることが出来なかつた感情と言つモノが俺に伝わってきた。

暁美ほむり

俺と彼女は鹿田まどかにキュウベえとこんな形で契約なんにして欲しく無かつた。その想いが同じだからこそ、俺には感じ取れた。

\*\*\*\*\*

鹿田まどかはキュウべえと契約した。

つまり、巴さんの治癒魔法でも治す事が出来なかつた俺の身体の損傷が完全に治つたと言つ事だ。

身体を起き上がらせると、鹿田が俺に抱きついて來た。

「向井君……。良かつた……本当に助かつて、良かつた……。」

俺に抱きついている鹿田の格好は、先ほどまで着ていた見滝原中の制服ではなく、ピンクと白を基調としたフリフリの魔法少女のコスチューム。

涙を流して安堵する彼女は放つておいて、周りを確認する。

巴さんはペタンと腰を降ろし、天を仰いでいた。

美樹は安堵の溜め息をついて心を落ち着かせていた。

そして、少し離れた場所で確認出来た暁美ほむらは 無表情だつた。

何もかもを諦めたように顔には全くの変化は無く、先ほどあれほどの叫び声を挙げていた少女と同一人物だとはとてもではないが信じられない。

「どうして助けた？」

「え？」

「どうして俺を助けたんだ！？」

鹿田を俺の身体から引き剥がして俺は言い放った。やり切れない気持ちばかりが先行する。

「だって、そうしないと向井君が死んじゃって……」

「やつだぜ向井。まじかのおかげで向井は助かつたんだよ」

「お前は黙つてろ美樹！」

キッと美樹を睨みつけて黙らせる。

「な、なんだよ……」

たじろぐ美樹を無視して更に俺は鹿田に対して詰問する。

「どうしてだ！？　どうしてなんだよ？　俺はここで死んだといふで全然良かつた。なのに何で俺の事を中途半端に助けたんだ！？」

俺自身の願いを彼女に話していないからいついう風になるのは当然かもしれない。理屈では理解していくても、感情は納得してくれはしなかつた。

鹿田の田元から流れる涙は安堵のモノから別のモノへと変容していった。鹿田は横目で巴さんの事を見るも、巴さんは天を仰いだまま動く事は無かつた。

その時、

ガチリツ

『どこからか聴こえてきたこの場に似つかわしくない音に、俺は鹿田から視界を変えてその音源の方向に視線を向けた。

「暁美ほむら……？」

俺の見間違いでは無ければ、暁美ほむらを中心として空間が切り取られ始めていた。魔女の結界が崩壊していっているのかと思ったが、少し様子がおかしい。

『そりか。ほむら、君が時間を巻き戻していただね。これで一つの疑問に答えがでたよ』

「え……？」

今、キュウベえは何と言つた？

暁美ほむらが時間を巻き戻していただと……？

もしそれが本当ならば……。

「暁美ほむらあああああああツーーー！」

もう、俺の眼中には巴さんや美樹は当然のことだろうが、先ほど理不尽な怒りをぶつけていた鹿田すら映つていなかつた。全ての元凶へと向かつて駆けだす。

お前が、お前が、お前が俺の時間を止めたのかツー？

問い合わせるつもりだった。いや、ぶん殴るつもりだったのかもしない。

頭に血が上つていて自分が何をしたかったのはわからない。  
しかし、結果から言ってそれが実現する事は無かった。

俺の意識が暗闇へと引き摺り込まれた。

## 第26話 あれは……何だったんだ？

「ねえ、キリトくん。キリトくんのなまえってキリストさまみたいだね」

「キリストさま？」

「うん。キリストをまだよ。ひとつでもえらべ、それなのにみんなにやわしい、かみさまみたいひとだよ」

「そりなんだ。じゃあ、ぼくはキリストさまになるつー！」

「それじゃあ、わたしは

太陽が燐々と降り注ぐ中、公園のベンチに腰掛け一組の五歳くらいの少年少女が第三者の視点から見るとなんとも微笑ましい会話を楽しんでいた。

会話内容から察せられるに、一人の仲は良いらしい。

少年 僕は黒髪の少女に対して身ぶり手ぶりで子供ながらに将来設計図を語っていた。少女もそれに笑顔で答えている。

おかしい。

何もかもがおかしかった。

ここはどこだ？ この少女は誰だ？ そして俺は何を言っている？

確かにそこにはいる少年は俺だったが、俺にはこんな記憶は無かつた。

こぐら俺の脳内で検索を掛けても今俺の目の前で起ころる

との記憶は何も見つからなかった。

「ハハツ、じゃあ ちやんぱくのおよめさんだねつー。」

「うそ。わたしはキコトへのおよめさんになる。」

「マイシラは何を言つてるんだ……。」

“お嫁さん”だと、おそらく子供ながらに将来を誓つているのだろうが、おい止める俺。それは後に黒歴史にしかならないんだぞ。

声を出して一人の間に割り込もうとしたが、ここぞよしやく俺自身が目の前の人には認識されていない事に気づく。何故なら俺は俺自身に掴みかかるとしたのに、手が空を切つたからだ。これでさりに意味不明になる。

今のこの状況は何なんだ？

ようやくと言つて良いほど、気付くのが遅すぎた。田の前に子供の時の俺がいて、それなのに繰り広げられているのは俺の記憶には無い出来事。そしてそれを傍観する俺。わけがわからない。

そんな言葉しか出てこなかつた。

「うん。ぼく、とおへりひつ「わなくちやいけないんだ

「え……」

俺の困惑を尻目に、場面が変わる。

何故かこきなり別れを告げる子供の俺。そして黒髪の女の子は今の俺と同じように困惑に包まれていた。

「「めん。ほんとうに元げん……」

「…………」

「…………」

子供の俺は悲痛な面持ちで黒髪の女の子に謝る。しかし、女の子は黙りこなってしまう。それに釣られるように子供の俺も言葉を無くす。

やがて女の子は意を決したように口を開く。

「……またあえるよね？」

田には涙を浮かべ、子供の俺に対し再会の誓いを問う。

「うん。もちろんだよ。だって、やあんはまくのおめさんなんだ」

子供の俺は女の子に負けじと必死に涙を堪える。

本当にこれは何なんだ？

繰り返しになるが、本当に俺にはこんな過去の記憶なんて無い。生まれも育ちも見滝原だし、幼少のころにこんな黒髪の女の子の友達はいなかつたはずだ。

「「れ……。キリトくんにあげる

既に決壊してしまった涙を流しつつ、女の子が自らの首から提升了モノを外し、子供の俺へと差し出す。

その差し出されたモノを見て、俺はさらに混乱する。

「なんで、なんでそれがそこににあるッ！」

意味がわからなかつた。  
訳がわからなかつた。

「ありがとう。たいせつにするね

子供の俺はそれを受け取り、自分の首へと提げる。

「にあつてるよキリトくん」

「ありがとう ちゃん

二人とも堪え切れなかつた涙が頬を伝つていた。しかし、別れを涙で終わらせないために必死に笑顔を作つている。

あれ？

何故か俺の目からも涙が溢れていた。

黒髪の女の子のことなんて知らないはずなのに、こんな別れの記憶なんて無いはずなのに。

何故だか、知らぬうちに目の前の一人に引かれるように涙が頬を伝つていた。

\*\*\*

ゆつくりと瞼を開く。

そこには、い、もと変わらぬ、俺の部屋の天井があるた

あれば……何だつたんだ？」

「これがベッドの上であると言つことを確認してから、右手で顔を覆つた。

ある種の二國共の記憶。

これが一番しきりきた口の母の一つの回答だった。

「それにしても……」

ベッドから起き上がり、顔を覆っていた右手をすぐ伸びのテープルへと伸ばす。

「なんでこれが……？」

俺が手にしたのは十字のネックレス。別にロザリオとかそんな高尚な物ではない、ぞんざいな作りのただのネックレスだ。

このネックレスを子供の俺はあの黒髪の女の子から受け取つてい

た。

「……そんなはずないじゃないか」「

俺の記憶が正しければ、この十字のネックレスは子供の時に両親に買ってもらった物のはずだ。

だからあの女の子の介入する余地は無い……。そう、出でる余地は無いはずなんだ。

なのに、なんで俺は先ほど経験した過去の記憶だかなんか知らないが、よくわからん夢を否定しきれないんだ？

生まれも育ちも見滝原の俺に引っ越しなんて絶対に記憶に残るはずのイベントを憶えていないはずはないじゃないか。

「……わけ、わからん」

せっかく起き上がらせた身体をポスンとまたベッドへと預ける。こんなにも訳がわからなくなつたのは、繰り返しが始まつた当初以来ではないだろうか？

いや、あの時と今では少し意味合いが違うか。

あの時はなんで繰り返すのかがわからなかつたといつ、自分以外に向けた不信感。

しかし、現状感じているのは血ひりを信じられない言い知れぬ不安感。

どうして……どうして、と疑心暗鬼になるものの血ひり防衛のための一つの手だつ。

だが、俺は何を疑えばいいのかわからず、ただただ頭を空っぽにしてボーッとすることしか出来なかつた。

## 第27話 あなたはあの場所にいたあなたのね

結局、母親が学校の時間だと言つたことを知らせてくるまで、ずっと天井を見詰め続けていた。

あの過去の記憶だか夢だかよくわからんものを何で俺は見てしまつたのかとか、繰り返しの原因が暁美ほむらのかもしないとか、考えるべきことはいくつもあつたのに、まるで脳内の許容量を超えてしまつたのではないかと思つぐらいに何も考えずにボーッとしていた。

母親に急かされるまま制服に着替え、朝食を食べ、そして学校へと続く道路をゆらゆらと歩く。

「せういえば、今回はキュウべえはいなかつたな」

繰り返しの原因が暁美ほむらとかもしないということを知ることができた以上、別にキュウべえはいなくても良いのだ。暁美ほむらに直接繰り返しのことを問い合わせればそれで良いのだから。

しかし、いなくても良いが、どちらかと言えばいた方が良い。暁美ほむらが魔法少女であるという事実を鑑みれば、キュウべえがいた方が円滑な話し合いが出来るかもしれないし。

ダラダラとした足取りで見滝原中学の校門を潜る。

周りには俺以外に誰もおらず、すでに授業時間が始まつているようだ。

俺は急ぐ氣にもなれず、トボトボと自分の教室を田指して廊下を歩いた。

「おはようございます」

ガラーッと教室後方の引き戸を開き、朝の挨拶をしながら教室に入る。

クラスメイトが全員、授業中の闖入者である俺に目を向けてきたが、それも数秒後には一時限目の授業を担当している教師へと視線を戻した。

教師の方も、これと黙つて俺に遅刻のことについて何を黙つてもなく、早く着席するように促すだけだった。

退屈な一時限目の授業が終わると、友人が俺のところへとやって来た。

「キリトが遅刻してくるなんて遅刻してくるなんて珍しいじゃん。なんかあつたの？」

「いや、ただの寝坊だから心配すんな。お前だつて時々あるだろ？」

「まあな。でさあ、キリトちょっと聞いてくれよ」

遅刻した理由を適当に言つと、友人はすぐさま納得してくれたが、その友人の続けた言葉に俺は胸の奥に何かが燃るのを感じた。

「 組に超可愛い転校生が来たらしいんだけどあとで見に行かねえか？」

「……転校生？」

「そ、そ、黒髪の長い美少女らしいぜ。これはもう、アタックするしかねえよなー！」

黒髪…… そう言えば暁美ほむらは転校生だったな。

暁美ほむらのことを強く意識すると更に胸の奥が熱くなつた。  
怒り、憎しみ、苛立ち。この気持ちを上手く表現する言葉が見つ  
からないが、負の感情であることは間違いない。

「……そ、そудだな。俺は止めておこうとするわ」

なんとか冷静を装つて返答する。

「なんだ、向井はノリ悪いなあ。もしもその子と俺が付き合つなん  
てことになつてもしらねえぞ」

「ハハハッ、それは無理だわから安心しどけ」

「な、なんだとっー?」

友人とのそんな会話も一時限田の予鈴でお開きになる。

そうだ…… そだつたな。俺はこの繰り返す時間から解き放たれ  
たいんだ。

今日、田覚めてからずっと考へることをあまりしなかつたことを  
強く認識する。いや、本来の目的を再確認すると言つた方が正し  
かもしけない。

昼休みまで待つて、暁美ほむらがいるであろう鹿田と美樹の教室  
へ向かう。

すると何とタイミングが良い事に、暁美ほむらと鹿田が教室から  
出てきたところだった。

「暁美ほむら。話があるんだが」

ちゅうど俺がいる方向に歩いてきたので名前を呼ぶ。

しかし、暁美ほむらは俺になんて目もくれずにつかつかと俺の真横を通りすぎる。

「あ、暁美さん。呼ばれてるよ……？」

鹿田がそんなことを言つたが、暁美ほむらは振り返つて「早く行きましょ」ただけ言つてだつた。これに鹿田はどうしたら良いのかわからなくなつたと言つた風にあたふたし始めた。

そんな鹿田は放つておいて暁美ほむらに話しかけることを続ける。

「暁美ほむらはなかなかに酷いヤツだな。一人きりで話をしたいつていたじやんか。まあ断わられたんだけどさ」

「あなたもしかして……」

今まで眼中になかつたはずの俺を見て田を見開く暁美ほむら。おひ、反応ありつてか。これはもう間違いないのかもしれない。

「互いに長い（・・）付き合つてになるかもつて言つた仲じやないか」

俺が言い終わつて数秒の沈黙の後、暁美ほむらは鹿田へと視線を移動させる。

「……「めんなさい鹿田さん。保健室には彼に案内してもいい」とあるわ」

「あ、う、うん。それじゃあ、またあとでね暁美さん

鹿田はしつかりと暁美ほむらに挨拶をしてから、教室に戻つていった。

暁美ほむらは鹿田が戻るのを確認してから、視線を動かして俺を睨む。

「どうあえず屋上行こうか」

積もる話もあるし、誰もいないところであつくりと静かに話すためにな。

「そうね、一人きりで話をするためにもそれが良いと思つわ」

暁美ほむらはぐるりと俺に背中を向け、階段を手指して歩きだした。俺はその背中から一メートルほど開けて追隨する。

階段を一段一段と足を踏み外さないためにゆっくりと踏みしめるように昇り、暁美ほむらは屋上へと続く扉を開ける。少しずつ開けられたドアの隙間からは今が真昼間と言つこともあり、陽射しが差し込んでくる。その陽光に一瞬目が眩んでしまうが、視線を下に向けることで明るさにすぐさま対応する。そして、屋上へと俺も進んでいく。

「驚いたわ。あなたはあの場所にいたあなたなのね」

俺を待つよひにひりを向いていた暁美ほむらはそんなことを訊いて来た。

「ああ、そういう前はあの場所にいたお前で間違いないよな?」

「ええ、間違いないわ」

「そりか……」

ようやく俺の願いにまた一つ近づいたことが出来た。  
これで彼女が繰り返しの原因で、俺を解き放ってくれさえすれば  
全ては解決されることだろう。

第27話 あなたはあの場所にいたあなたのね（後書き）

マリヤさんマジ天使過ぎて悲しくなるね。

## 第28話 だから俺はもうお前に頬張らない

「だったら何故、俺を繰り返しに巻き込むんだ!? 理由があるなら教えてくれよつ!」

鬱憤をすべて吐き出す様に、力強く言葉に乗せる。

さきほど暁美ほむらと相対してからずつと言いたかった。屋上に来るまで、一步一步と歩を進める度に我慢していた。むしろここまで来るまでに「こと」を我慢できたことに我ながら驚きを隠せない。

暁美ほむらは俺の言葉にて、黙っている意味がわからないとしても言ひように首を傾げる。

「そればばじうこい」とかしらへ。私からしてみれば、あなたがこの時間軸に存在していることに驚いているのだけれども「

「わからない……だと……？」

「こ」で俺は我慢の限界に達し、必死に押さえつけていた自制心を開放して暁美ほむらに詰め寄り胸倉を掴む。

暁美ほむらは抵抗せずにそのままに胸倉を掴ませてくれたのがちょっと拍子抜けだったが、今はそんな事を考えている場合では無い。

「何度も何度も……気付いたら今日で、俺の時間は今日から約一ヶ月しかなくなつたんだよ! 周りの全ての時間は停滞しているのに、俺だけ進み続けていて……狂いそうになつた。いや、一時は狂つていた

胸倉を掴まれていいはすなのに無表情の暁美ほむらの紫色の瞳には、ただただ俺の悲壮感漂う表情が映っていた。

「なあ、お前がこの時間の繰り返しの原因なんだろ？……だつたら、俺を解き放ってくれよ」

一つ一つの言葉を言つ度に暁美ほむらの胸倉を掴む手の力がどんどん抜けてゆき、終には彼女の前で地に手を置いてしまう。屋上のタイルが俺の視界一杯に広がっていた。

やつと見つけた。……やつと見つけたはずなのに、俺の身体は暁美ほむらに復讐をするでもなく、目の前で力無く崩れ落ちることしか出来なかつた。

彼女が俺を巻き込んだ張本人。だけれども、何故か彼女に対して俺の感情を捲し立てることしか出来ない。

「…………めんなさい」

自分自身がわからない……そう思つてゐると、不意に頭上から俺の勝手な言い分を黙つて聞いていた暁美ほむらの声が聞こえてきた。その声に釣られて顔を上げる。

「確かにあなたの言つ通り、時間を巻き戻してるのは私よ」

「だつたら、だつたらなんで謝るんだよ……。早く俺の時間を進めるなり、俺を繰り返しから除くなりしてくれよ……。なあ、本当にお前がこの繰り返しを起こしてゐるなら簡単に出来る」とじやないのかよ！？」

懇願するように言葉を吐き出す。

自尊心なんて捨ててしまえ。今俺に必要なのは、俺の時間が進むか止まるかといつどちらか一つの結果のみだ。どちらかを俺にくれると言うのならば、例え俺を今の状況に巻き込んだ暁美ほむらに頭を下げるべりごどつとこつとはない。

「頼む……頼むよ。お前が俺の願いを叶えてくれないと言ひのなら、俺は同年代の少女に俺の代わりにキュウべえに願つて貰うぐりいしか、方法が見つからないんだ。そんなの俺は嫌なんだ。俺のせいで女子に苦しみを押しつけるなんて……本当は嫌なんだ」

一度は迷わないつて決めたのに。この繰り返しからどんな事をしても這い出でやると自らに固く誓つたはずなのに。

結局のところ、俺は心の底から覚悟なんて出来ていなかつた。

表面上だけ自分を取り繕つて、自らをまるで悲劇のヒロインかのように扱つていた。そして今、自分の言葉によつてそのメリッキが剥がれ落ちた。

「あなたの事情はわかつたわ

「なら」

「でも、じめんなさい。私にはあなたが何故私の時間遡行に巻き込まれてゐるかわからないの」

本当に申し訳なさそうな顔。いつも無表情だった暁美ほむらの初めて見る表情だつた。

暁美ほむらは俺と言ひ存在に対し、負い目を感じたのかもしれない。そんな視線はいらないんだよ。ただ、俺を繰り返しから解き放つてくれさえくれば……。

「どうこう」とだ……？ もしかして俺の停滞した時間をお前はどうすることも出来ないとでも言つのか？ お前が俺の時間を止めた癖に……

「……」めぐなさ

俺にただただ謝罪の言葉を言つ曉美ほむり。

「嘘だ嘘だ嘘だ、嘘だッ！」

俺は立ち上がり、曉美ほむりの肩を乱暴に掴む。彼女は瞳を伏せ、俺と目を合わせようとはしない。単純に力を比べれば俺の方が弱くて簡単にあしりでしまえるのに、彼女は何もじょとほしなかった。

「本当に本当に、俺の時間を進める事も止める事も出来ないのか……？」

やつと見つけた誰も傷つかずに俺の願いが叶えられると思った方法。だけど無情にも返つて来た言葉は先ほどから繰り返されてきた言葉と同じモノだった。

それを訊いて俺は暫しの間動きを止めて考えることに没頭した。

「……悪いな

ようやく考えがまとまつた俺は曉美ほむりの肩から手を離し、揺ら揺らと校内へと続く扉へと向かう。

「待つて」

「なんだ？」

俺を呼ぶ暁美ほむらの声が聞こえてきて振り向く。

「私にはあなたが何故巻き込まれたかがわからない。だからあなたの時間を進ませる事も止めることもできない」

「それは俺も理解した。だから俺はもうお前に頼らない」

「向井キリト。それであなたはこれからどうするつもりなの？」

引け目を感じたのだろうか。自らが自分は何も出来ないと黙つておきながら、俺に訊ねてきた。

「決まってるじゃないか。俺の時間を停滞させた張本人である暁美ほむらが俺の願いを叶えられないと言うのなら、残る方法はただ一つだ。俺の願いを俺に変わってキユウベえに願つてもらう。なに、素質があるという少女には心当たりが一人ほどいるんでね」

「ここは心を鬼にしてでもそれに縋るしかないんだ。」  
「道は残されてない。」  
「言つたキュウべえを頼るしかない。もはやそれしか俺が解放される  
そうだ。張本人様が出来ないって言うのならば、以前に出来ると

「もしかして、その一人と言うのは

「ああ、美樹さやかと鹿田まどかだ」

俺は他に魔法少女になれる素質を備えた少女を知らない。だから何としてでも、二人のうちどちらかに俺の願いを叶えてもらうしか

ない。

もう一回は用はない。止めていた足を動かし、校内を回す。

「じゃあな。もうお前とは関わること無いこと願つ。せっかく長い付き合いになるかもしねな」

去り際に挨拶を残そうとしていると、乾いた音とともに突如左胸辺りに痛みが走る。

視線を向けるとその痛みの中心からどんどん赤い液体が学ランに広がっていくのが見えた。

「え？」

「「」みんなさい。私の願いが叶つまでもあなたの苦しみも私が背負つわ」

パンツ

再度聴こえたその乾いた音とともに俺の意識は途絶えた。

## 第29話 僕とお前は進み続けているじゃないか

「んあ……」

朝。窓から吹き込む優しい風で意識がだんだんと覚醒する。寝惚け眼ながらもベッドから身体を置き上がらせ瞼を擦り、意識の覚醒を急がせる。

そう言えば、暁美ほむらに殺されたんだと頭がボーッとする中、思い出す。しかし、不思議と俺の中に怒りは湧いてこなかった。なんなんだろうか。不思議な感じだ。暁美ほむらが繰り返しの原因とわかったのにも関わらず、彼女では俺を永遠の呪縛から解放できないと知つて、それで彼女に対し興味が無くなつたのかもしない。

覚醒した意識で、彼女に話しかける。

「ここなどこままでやつて来て、何か用かよ？」

俺の視線の先には暁美ほむらが居た。

ちょうど俺がベッドから上半身を起き上がらせた目の前に、青を基調とした魔法少女のコスチュームを身にまとつた彼女が静かに佇んでいたのだ。窓から吹き込む風がカーテンを吹き上げ、それが朝の淡い光と相まって幻想的だつた。

だが、俺の関心はすでに暁美ほむらには無く、特に驚くことも何も思うことは無かつた。強いて挙げるのならば、なんで俺の部屋なんかに居るんだろうと思つたぐらいだ。

「…………」

それだけ言って、暁美ほむらはいつの間にかその手に持っていた拳銃を突き付けてくる。

そのゆっくりとした行為に俺は身体から汗がじつと噴き出しきったのを感じた。

「おー……やめろ、何を……しようとしてるんだ

数秒後、俺の部屋には誰もいなくなつた。

\*\*\*\*\*

瞼を開く、そしてすぐさま部屋から出よつとベッドから飛び降りる。

### 力チャリ

ベッドから飛び降りた態勢のまま、俺は動くことを許されなくなつた。後頭部に感じる固い感触。きっと拳銃だらう。

普通なら有り得ない状況だが、それ以外には考えられなかつた。

「なあ、どうしてこんなことするんだよ。お前は俺のこと助けられないって言つたじゃないか。それなら俺の好きにさせてくれよ」

背後でいるであらう暁美ほむらに對して話しかける。

おそらく少しでも動いたらその手に持つ拳銃で頭を撃ち抜かれるであらう。だから口だけを動かし、なんとかこの状況からの脱出を図る。

「壇つたはずよ。あなたの苦しみも 私が背負つて

「俺はこんな事を望んでいたわけじゃない

「知つているわ。だから私はこいつして、あなたの苦しみを最小限に抑えようとしているのよ」

「めんなさい

\*\*\*\*\*

田を開き身体を起こすとやはりそこには暁美ほむらがいた。窓から吹き込む風が彼女の長い黒髪をふんわりと揺らしている。そんな彼女に對して口を開く。

「……また俺を殺すのか？」

「ええ、その通りよ。それがあなたを巻き込んでしまった私の罰だから」

抵抗は無駄のようだ。そもそも多少変わっているとしてもただの人間である俺が、魔法少女である暁美ほむらに對して抵抗なんて出来るはずがない。

だからと言つて逃げようとしても、前回と同じ結末になるだろう。ならば俺が取れる行動は一つしかない。

「せうか、なら殺せよ。俺の苦しみも背負つてくれるんだろう？」

人分の苦しみに苛まれながら、早くお前の願いとやらを叶えて俺を解放してくれよ」

本当に暁美ほむらが俺の苦しみまで背負ってくれるかはわからない。だけれども自分が巻き込んだ人間を殺し続ける苦しみは背負つてもらひ。

これぐらいしか俺に出来る抵抗が見つからなかつた。

### 力チャリ

女子中学生の小さい手に握られた拳銃の照準が俺へと合わせられる。

「今の私には、これぐらいしか方法が浮かばないから……」

「いつになつたらこの連鎖は終わつてくれるのだろうか。

\* \* \* \* \*

「今回はどうだつたんだ？」

「……駄目だつたわ

「やうか……そりや残念だ」

眩しい朝の光が俺の部屋に差し込む中、俺と暁美ほむらは言葉を交わしていた。

なに、別段珍しいことではない。朝起きて暁美ほむらに殺される。

その幾度となく繰り返されてきてワンパターン化した流れの中の一幕だ。

彼女に殺され始めた最初の方は互いに何もしゃべることはなかつたが、何度も繰り返すにつれてどちらからともなく言葉を交わすようになつていった。

俺の勝手な想像だが、おそらく孤独に耐えられなかつたのだろう。俺たちの時間は進み過ぎたのだ。

繰り返せば繰り返すほど、周囲との時間は少しずつズレしていく。これは俺の経験談だが、なまじ少し先のことを知つてゐるから迂闊なことをしゃべれば周囲からは疎外される。

孤独とは本当に寂しいのだ。それを知つてゐるから同じ時間を生きてゐる存在に惹かれたのだろう。現に俺は暁美ほむらと過／＼するの短い時間が好きになつていて。

少しの違いはあれど、いざれは全てがリセットされてしまう人たちといふよりも、時間の進み続けている存在と一緒にいることが何よりも落ち着けた。こんなのは繰り返しが始まつて初めてのことだつた。

「これから私に殺されるとわかつてゐるのに、なぜあなたは笑つていられるの？」

自然と表情に出でいたらしい。

「なぜって、それは暁美ほむら。お前といつして同じ時間で存在出来てるからだ。周囲はみんな停滞してゐる。だけど俺とお前は進み続けてゐるじゃないか」

「でもそれは私が

「

「わかったる。原因は確かにお前かもしれないけど、今となつてや  
そんなことどうでもよくなつちましたよ」

抵抗は無駄。逃亡も無理。それなら、せめて苦しみを……と思つ  
ていたが、俺は現状に満足してしまった。

「どうして？ どうして……そんなこと言うのよ。あなたの苦しみ  
も私が背負つて置いたの、これじゃあ私が馬鹿馬鹿しいじやな  
いの」

「やうだな……それじゃあ、その手に持った拳銃を貸してくれない  
か？」

「じつこいつもつ？」

「ああ、勘織るな。自分で自分を殺すだけだから。それならお前は  
俺の分の苦しみは背負わなくて良いだろつ？」

自殺なら慣れている。包丁で自分の喉を搔つ切つていた経験がこ  
んなところ役に立つとは思いもよらなかつたな。  
ここに置けど、曉美ほむらに手のひらを差し出す。もう彼女だけ  
に苦しみを押し付けるのは止めよう。

「どうした？ 早く渡せよ。そろそろ学校が始まる時間だぞ。転校  
生が初っ端から遅刻は色々とマズイんじゃないか？」

時刻はもうすぐ八時になつていていた。そろそろ母親が俺を呼  
びに来る時間なので早くして欲しい。

「どうしてそんなことを言うの？ 私はあなたの苦しみも背負つて覚悟したこと、それなのにどうしてツ！？」

拳銃を持つ暁美ほむらの手がガタガタ震え始めた。その震えた状態で俺に照準を合わせる。

「どうしてって、それが俺の出した結論だからだ。俺はお前と過ごすこの短い時間が好きになつちました。だからせめて自分の苦しみぐらい自分で背負いたい」

それぐらいしか、背負い続けてきた彼女に出来ることが無かつたから。

「ふざけないでツ！」

俺の想いとは裏腹に、暁美ほむらはそれを否定する。

「そんなの自分勝手よ！ 私のことを何も知らないくせに！」

「そうだな。これは俺の自分勝手だ。だから早く渡せ。もつすべ母親が来そうだ」

「駄目、駄目よ……。それは許せるわけないじゃないツ！」

そう叫んで暁美ほむらは引き金を引く。

俺はなんら抵抗はせずにその弾丸を身体で受け止めた。

### 第30話 「めん。……また、背負わせ、ちやうな

「ツラ……」

俺の身体ごと寝巻として着用していた白いTシャツの腹部に一つの穴が穿たれる。その小さな穴を中心として、クモの巣のように俺の血液が白いTシャツに染み込み広がつてゆく。

右手で撃たれた個所を押さえるも、流れ出る血液は止まらない。すぐに死ぬことは無い。何故なら現に今俺は生きているからだ。しかし、このまま何もしなければ俺は数分後には死ぬだろう。

ああ、自分で自分を殺すつもりだったのにな。

俺がこの繰り返しから解放するために、暁美ほむらの負担を減らす事。そして、俺自身がもう彼女に俺なんかの為に手を汚して欲しくなかつたから。

彼女の手から力が抜け、拳銃が床へゴトトッと音を立てて落ちた。

「あ、ああ……、あああああ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、あ、ツツ  
!!!!」

暁美ほむらの叫びが静かな俺の部屋に響き渡つた。痛みを堪えながら拳銃に向いていた視線を彼女に向けると、暁美ほむらは頭を抱えながら顔を歪ませていた。

こんな彼女は見ていられない。素直にそう思つた。

だから俺はベッドから降り、彼女の元へと近寄る。一步踏み出す度に血が腹部から勢いを増して体外へと流れ出ていった。

俺の額には汗がにじみ、暁美ほむらと別の意味で俺の顔は苦痛に歪んでいた。

血液が足りないみたいで身体が重い。彼女の元まで来るように息を切らしていた。

「ハア、ハア、ハア……」

俺と暁美ほむらの視線が交差する。

彼女は、未確認飛行物体だと未確認生命体でも見てしまったかのよう眼を大きく開く。その瞳からは弱々しい彼女が感じられる。尻には少量の水分を確認することが出来て、俺の為に泣いてくれたのか、と俺の心は何故か満たされた。

それまで撃たれた個所を押さえていた右手を離し、俺は両手で縋つづくように暁美ほむらの身体に抱きつくる。

「えつ……」

「じめん。……また、背負わせ、ちやうな」

ここまで移動するのに力を使いきつており、既に自分で自分を殺す余力なんて残されてはいなかった。

俺の予定なら、ここまで辿り着いて、暁美ほむらが床に落とした拳銃を拾って自分の頭をブチ抜くはずだつたんだけどな。今は喋ることが俺に出来る残された唯一の事だ。

彼女に抱きついたことで、彼女の青を基調としたセーラー服のような魔法少女のコスチュームに俺の血液が染み込んでいった。これについても謝りたかったが、余計なことに残されたことを使うわけにはいかない。

「次から……自分で死ぬから、そんな、顔、するなよ」

もはや俺の身体にはほとんど力が残っておらず、腕の力が抜け、重力に従つようにならぬままの身体から床へと崩れ落ちる。

「駄目えッ！？」

だが俺の身体は床へ衝突する前に暁美ほむらの手によつて抱きすくめられた。

残る最後の力で必死に彼女の顔を窺つ。

「『めんなさい』……『めんなさい』『めんなさい』『めんなさい』

そこにはぐちやぐちやに崩れた泣き顔しか無くて、むづかしくて仕方なかつた。

なんで俺は、彼女にこんな顔をわせてしまつているのだろう。確かに始めは暁美ほむらの苦しむ姿を見るために俺は死ぬことを選んだ。しかし、今は彼女の泣き顔なんて見たくなかった。

無力な自分がどうしようもなく嫌いになつた。

\*\*\*\*\*

ベッドの上で起き上がり窓の外を見る。

今日と言つての朝日を浴びるのは何度目だろう。

きつと薄れた記憶を思い出すとしても無駄になる。それほどま

でに何度も……何度も何度も繰り返してきた。

『やあ

俺以外誰もいないはずの部屋なのに知っている声が俺の中へ直接響いてきた。ソレがいるであらう勉強机の上に視線を向ける。

「何か用か?」

『はじめまして、僕はキュウベえ。さつそくで悪いんだけど、君は何者だい?』

「ふふふ……あははははは」

『一度目だな。今日目覚めて最初にあった存在がキュウベえだったのは。おそれくそその回数は一番少なくて、次点が俺を起こしに来た母親だろう。そして、一番多かったのは……。』

『急に笑い出してビックしたかい? いきなり過ぎて僕にもついていけないや』

「ああ、悪いな。あの時の俺があまりにも馬鹿馬鹿しいことをしていたんだなって思つてさ」

俺の返事にキュウベえは首を傾げる。

別に俺は理解してもう一つもつて言つたわけではないからビックでもいい。

『まあいいや。それでなんなんだい、君は? 僕の経験上、君みた

いな男なのに莫大な魔力をその身に宿している存在は始めてみるよ

「……何なんだろうな？ 僕にもよくわからん。ただ……」

『ただ……？』

「ただ……いや、やっぱり何でも無い』

言いにかけて、コイツに言つても無駄だと思い口を噤む。

キュウベえに俺は願えない。だとしたら、鹿目や美樹を代わりに犠牲にしなければならない。そんなのは俺望むところでは無いのだ。それに俺は、全ての原因の彼女と一緒にいた方が良いと思つている。

「もうお前と話すことはない。そろそろ学校に行かなくちゃいけないからどっか行つてくれ」

『残念だよ。君とは良い関係を築けそつかと思つたんだけどな』

そう言い残してキュウベえは俺の部屋から姿を消した。

俺はそれを確認してから見滝原中学の制服に着替え、忘れによう十字のネックレスを首から提げてから、朝食を食べにリビングに向かつた。

さつさと朝食を食べ、早めに学校に行くこととする。

学校についた俺は上履きに履き替え、裏門へと通じる正面玄関で彼女を待つ。

彼女がここに来るかはわからない。だけど、彼女は今日転校してくる転校生のハズで、それならばここから学校へ入つてくる可能性が高い。

何故か、今日は彼女は俺を殺しに来なかつた。

そのことが俺の頭に過ぎよるが、首を乱暴に振つて頭から追い出す。

時折登校してくる教員たちに挨拶をしながらその時を待つ。  
そして彼女はやつて來た。

俺の存在を確認して、彼女の動きが固まつた。久しぶりに見た彼女の制服姿はなんだか懐かしさを感じた。

「なんで、あなたがここに……」

「なんであつて、それはこつちが訊きたいな。なんで今日、俺のところに来なかつたんだ？」

「それは……」

彼女はなんとも言ひこべて顔を歪ませる。

「まあ、いいや。それよりもお前に言つていいことがあるんだよ」

「私に？」

朝日覚めてから学校に来て、そしてここで彼女を待つはずつと考えていた言葉を言つ。

「俺に、お前の願いを叶える手伝てんいをさせてくれ

これがもつとも良い選択だと俺は導き出した。

誰にも迷惑をかけることが無く、俺がこの繰り返しから解き放たれる唯一の選択。それに彼女にこれ以上俺を殺させると言つ苦痛を

了えずに済む。

彼女 晓美ほむらの返答は……。

### 第30話 「めぐらし」……また、背負わせ、ひやうな（後書き）

この作品内ではほむらの魔法少女装束は藍色っぽい青と黒の設定です。

原作では灰色ですが、この作品ではその灰色の部分が青色なんです。ビックリマーク。

まあ、小さなこだわりなんで、特に伏線と云つわけではありません。

### 第31話 あれを私が倒さない限り、私の時計の針は進まない

「あれが……アイツのせいでほむらは永遠とも思える時間の中を繰り返してきたのか」

「ええそ、あれを私が倒さない限り、私の時計の針は進まない」

#### ワルブルギスの夜

それは激しい嵐の中、悠然と見滝原市の宙に浮いていた。巨大な歯車に、ドレスを着た人形を逆さに吊るしたような姿。あまりにもその魔女の大きさが馬鹿げているぐらいに大きすぎて、こんなのを本当にほむらが倒せるのか心配してしまつ。そんな俺の心情が顔に出ていたのだろう。ほむらが俺に微笑みかける。

「大丈夫よ。私は何度もあれと対峙してきた。こんどこそ倒して、私とあなたの時間を進められるように頑張るわ。だから……」「ああ、わかつて。アイツのことは俺に任せておけ。成功を祈つてるよ」

ワルブルギスの夜に向かって駆けてゆくほむらの背を見届ける。さて、俺も俺のするべきことをしなければな。

彼女がいるであろう避難所に指定されている体育館を目指して歩いていると、その進路上を逆走するように目的の人物が他一名と連れだって息を切らせながら走つて来た。

大雨の中、よくもまあ傘も差さずに「」苦労なことであるが、俺からしてみれば彼女がここにいると言うだけでナンセンスだ。

「そんなに急いでどこ行くつもりだ 鹿田？」

「む、向井君…？」

「向井こそなんでこんなとこにいるんだよ…？ 今がどういう状況かわかつてんんだろ…」

俺がここにいるだけで驚く鹿田に対し、美樹はその手に一振りのサーベルを握つており、マントを羽織つた騎士のようなその服装からも美樹が魔法少女であると言つことが窺い知れる。

「ああ、だから美樹、お前はこの先に進むと良い。だが鹿田、お前を先に進ませるわけにはいかない」

「どうこうことだよ向井…？ まどかはあたしの仲間だ。それにまどかが一緒にいてくれるからあたしはあたしのままで戦えるんだ！」

俺は美樹には進んで良いと言つてゐるのに、何故か鹿田も一緒に通せと美樹がうるさい。完全に鹿田は置いてきぼりの状況で、あわあわしている。

「そんなに魔文化を恐れてるのか？」

「ツ……」

魔法少女は魔法を使う度にソウルジムに穢れを貯める。普通ならその穢れは魔女が落とすグリーフシードを使って吸収するのだが、それをせずに穢れを貯め続けると魔法少女は魔女へと変貌を遂げる。

あの時は大変だった。

失恋から自暴自棄になつた美樹が闇雲に魔女や使い魔を倒していつた。それだけなら何の問題も無いのだが、美樹は死ぬつもりだったらしくグリーフシードを使ってソウルジェムの穢れを吸収しなかつた。

それを近くで見ていた鹿田がほむらに相談して、やむなく俺たちが と言つても、ほむらが鹿田経由で美樹に真実を伝えることでなんとか魔女化を止めさせることが出来た。

その後、なんか色々と鹿田がいたから自分は魔女にならなかつたとか勘違いした美樹が鹿田にベッタリで、現在進行形で非常にめんじくさいことになつてゐる。

「そんな言い方は良くないとと思つよ」

黙つた美樹に代わり、鹿田が喋り出す。

「こんなのがいいでも良いじゃんかよ」

俺のするべきことはに美樹は関係していない。だからこそ、美樹なんてどうでも良い。

「どうでもいい、って……」

「それよりも鹿田、お前はどうなんだ？ お前がこの先に進めば確実に足手まいになる。もしかしたらそのせいで美樹が、そしてお前自身も死ぬことになるかも知れないんだぞ」

「わたしは……」

「まどかはあたしが護るッ！」

俺の問いかけに対して答えよつとした鹿目だが、言い始める前に美樹が大声を張り上げて言わせなかつた。

その行為がどうしようもなく俺を不快にする。美樹さえいなければ、俺がやるべきことは割と簡単に済みそうなのに。

「護れるのか……？」この先にいる魔女はほむらでも勝てるかどうかも怪しい相手だぞ。ほらむにさえ簡単にあしらわれるお前に、本当に鹿目を護りながら戦えると思うのか？」

「つ……!? だつたら、なおさらあたしが行かないといけないじやんかよ。転校生一人じゃ倒せないんだり？ だつたらあたしが加われば」

抜け穴を見つけた風に勝ち誇った表情をする美樹。だけれども口イツは何もわかつていない。

「だから言つてんだろ。美樹、お前は先に進んで良いつてさ。ほら行けよ。お前がほむらに加勢してくれれば勝てる可能性が高まるからさ」

バカだバカだとは思つていたが、ここまでバカだとは思つてもみなかつた。美樹の鹿目に対する執着心はすでに病的な盲信にまでなつているのかもしれない。

「ダメだダメだダメだつ、まどかがいないとダメなんだ！！」

美樹の叫びを聞いた次の瞬間、感じる死の感触。それは初めて感じる感触だつた。

「グッ……」

まさかサーべルで腹を刺されるとは思わなかつた。

「向井が悪いんだからな。そつ、向井が悪いんだよ」

美樹は、俺にサーべルを突き立てた態勢で自分の行為を正当化する言葉を呟いていた。

「さやかちゃん!？」

「さあ行こうか、まどか。邪魔者はいなくなつたよ」

美樹がサーべルから手を離すと、俺の身体は呆氣なく地面に崩れ落ちる。

「大丈夫、向井君!？」

鹿田が駆けよつてきて俺のことを抱きあげ涙を流してくれるが、それに応える」とすらできない。

「なんで……なんで、向井君にこんなことするの、さやかちゃんつ……」

俺の視界からは確認できないが、言葉から察するにきっと鹿田は美樹を睨みつけているのだろう。

「あはは、なんでもどかがそんな顔してるので、あたしたちの邪魔者が消えたんだよ? もつと喜ばなくちゃ」

狂ったように美樹が笑う。そんな美樹を鹿田が拒否して、鹿田は美樹に殺された。

これでずつと一緒だね、と鹿田の死体を抱きしめる美樹を最後に薄れゆく意識の中確認して、俺の意識は完全に終わりを迎えた。

\*\*\*\*\*

じめん、ほむら。

今回はお前の願い、叶えられなかつた。

鹿田まどかを死の運命から救い出す

たつたそれだけのことなのにな。

だけど、その願いはほむらが幾度となく改変させようと繰り返しても成し得てこれなかつた願いでもある。

鹿目がワルブルギスの夜と相対せばキュウベえと契約して魔法少女になり、そして魔女になる。

もしもワルブルギスの夜に相対しなくても何かしらの原因で鹿田は死ぬことになる。

そのことをほむらから訊いた時は若干信じられなかつたが、今なら完全に信じられる。

何故なら俺の目の前で鹿田が死んだからだ。

どうしてほむらが鹿田を救おうとしているのかは知らない。だけれども、俺はほむらの願いを叶えるために鹿田を救わなくてはならない。

それが、彼女に苦しみを背負わせてしまった同じ時間を生きる俺にしか出来ない贖罪だから。

### 第32話 向井君ひてほむらひちやんとなかよしなんだよね？

何度もなく、俺とほむらはこの一ヶ月を繰り返してきた。時には巴マミと共闘し、美樹さやかと共に闘し、今だ語った事はない佐倉杏子とも共闘したりしたが、それでもあの最悪の魔女『ワルブルギスの夜』にはまるで勝てる気配が微塵も無かつた。

他にも俺たちの目的である鹿田まどかを死の運命から救い出すことを想定してきたイレギュラーである美國織莉子、吳キリカの存在もあった。

その平行世界では美國織莉子が魔法少女として現れ、彼女の持つ未来を見通す魔法で鹿田まどかの魔女化した未来を知り、それを阻止するために同じく吳キリカとともに鹿田まどかを殺そうとしてきた。

もちろん、俺とほむらも黙つて見ていたわけではない。なぜなら俺たちの目的は鹿田まどかを救うことだからだ。

しかし、最終的には俺たちは美國織莉子の執念に負けてしまった。せつかくワルブルギスの夜に勝つことが出来そうな戦力が揃つたと思つたのに、鹿田まどかが殺されてしまつてはほむらの願いは果たせないので、やむなく俺たちは次の時間へと旅立つた。

あの時のほむらの悔しそうな表情は見てられなかつた。

次こそは……と意気込んでみるも、その後は美國織莉子も吳キリカの姿を確認出来た時間軸は存在しなかつた。

ほむらは何も俺には教えてくれなかつた。

俺は彼女の願いを叶えるのを手伝つてはいるといつにだ。しかしそれでも俺は全然構わなかつた。

それは勝手に俺が言い出したことなので、それなのに色々と教えてもらおうなんて厚かましいにもほどがある。

だから俺は、様々な事を知りうと動きまわった。

これから語るのは俺が体験したほんの一部の記憶である。

\*\*\*\*\*

「ふうん、これが鹿田の部屋か」

初めて入った鹿田の部屋を見渡す。壁にはデザインを意識したのが十一本の突起が飛び出している奇怪な時計やタペストリーが掛けられており、ベッドの上にある台にはいくつもの可愛らしいぬいぐるみが並べられていて、女の子の部屋に入ったんだなと実感する。勘違いして欲しいわけではないのだが、女の子の部屋に入るのこれが初めてのことではない。むしろ、ほむらが住むアパートにはよく出入りしていたりするのだが、あの部屋は魔法でその内装が変えられており、上から見れば時計盤のような部屋だ。これ以上は説明し難いので勘弁願うが、とにかくアレを女の子の部屋とは俺は認識してはいない。

「あはは、はずかしいからあまり見ないで欲しいんだけど……」

「悪い悪い。配慮が足らなかつたよ」

鹿田に促されるように俺は勉強机に備え付けられていたイスに座り、鹿田自身は自分のベッドへと腰を降ろした。

「それで、何の用？」

だいたいの見当はついていたが、確認ついでに本人の口からしゃ

べつてせいかひついでます。

「……あ、あのね。向井君つてほむらひやんとなかよしなんだよね？」

「仲が良いつて言つのかな……？ 良く一緒にいることが仲が良いつて言つなり仲は良いんじやないか」

俺とほむらは仲が良いのだろうか？

イマイチ、自信を持つて答えられない自分がいた。俺たちの関係を例えるなら共犯関係とでも言つのだろうか。同じ目的のためにそれ以外すべてを見捨てられる。そう言つた意味では共犯関係が近いかもしれないが、なんか違う気がしないでもない。

「うそ、それはなかよしだと思つよ」

何故か鹿目からお墨付きをもらつた。

「で、俺を自分の部屋まで招いておいて話はそれだけなのか？」

自分で話をそらせとおいてなんだが、話を戻すことにする。

鹿目は少しの間顔を伏せて、やがて決心したのか顔を上げ、俺と目を合わせてから口を開く。

「向井君は恐くないの？」

「恐い？」

「マリさんだけじやなくて、おなかのやんも杏子のやんもみんな死んじやつた

初めに田代さん。彼女は油断し過ぎた。

次に美樹。彼女は自分に絶望した。

最後に佐倉。彼女は、美樹の後を追つて行った。

「やうだな。魔法少女が辿り着く先は死だけだよ」

「」の魂であるソウルジームを碎かれれば魔法少女は死ぬ、魔法を使い過ぎてソウルジームに穢れを溜め過ぎたら魔女へと魔法少女はその姿を変える。

「」のまじや、ほむらちやんも死んじやうになるとになるのに、どうして向井君はそんなにも平氣そつな顔をするの？ わたしには全然わからなこよ」

顔見知りの死。それは悲しいことだ。

未だ中学生である鹿田にはそれが堪えられないのだう。だから彼女の長所である他人を思いやる優しさが、ほむらの安否に注がれる事は自然の成り行き上予想しやすいことであった。

ハハツ、互いに互いの安否を気にする仲か。良かつたじやないか、ほむら。

「俺は……俺とほむらには目的があるんだよ。それさえ叶えられるのならば俺たちの命なんていくらでも対価として捧げても良いくらいだ」

「そんなん死んでも良いなんて言つちやだめだよー。わたしはほむらちやんにも向井君にも死んでもしきないよー」

消極的な鹿田には珍しく、腰を降ろしていったベッドから勢こよく

立ち上がり、俺へと詰めかけた。

「お願いだからそんなこと言わないでよ……。お願い……お願いだから……」

今にも泣き出しそうな鹿田の表情が見てられなかつたが、グッと堪える。

「……そんなこと言われても、俺たちの決意は変わらないぞ

心が痛い。本当は鹿田にこんな事は言つたくなかったが、非常になるしかないんだ。

「…………」

「…………」

「……そつか。だつたら最後にほむらやさんの家に連れてつてもらえないかな?」

申し訳ない気持ちでこつぱいだつた俺は、その鹿田のお願いを「それぐらいなり……」と、叶えてあげることにした。

今にして思えばこの時に周囲を警戒してなかつたのが失敗だつたのだろう。まさかキュウべえがこの時の俺たちの会話を盗み聞きしていたとは思つてもみなかつた。

最終決戦の最中、俺たちの田の届かないところで彼女の優しさに浸けこんで契約を結び、鹿田まどかは魔法少女になつた。

### 第33話 ワルプルギスの夜……噂に違わぬ大きさね

「ワルプルギスの夜……噂に違わぬ大きさね」

巴さんはポツリとそう言葉を漏らした。

そもそもどうだろ。俺もアレとの邂逅は何度も経験しているが、それでもその超弩級の巨体に慣れることはなく、見ただけでもの凄くプレッシャーが圧し掛かってくる。

「……勝てますか?」

ワルプルギスの夜を見上げている巴さんに問いかける。

「もちろん。だって私たちはそのためにここにいるんですもの。 そうよね、暁美さん?」

「ええ、何としても倒すわ。それが私のやらなければならぬことだから」

ほむらが巴さんの問いかけに返す。

二人とも、なんと心強い言葉を出してくれるのだろうか。応援することじぐらーしか出来ない俺からしてみれば、逆に何も出来なくて申し訳の無い気持ちになつてくる。

だけれども人には領分と言つモノがある。

俺に出来るのは記憶を持ち越して次の時間軸に移動できるだけで、魔女に対する戦闘能力は全くの皆無。そちらは魔法少女である一人に任せて、俺は後ろで勝てるように見守るつ。

「いくわよ、暁美さん」

巴さんがワルブルギスの夜に向かつて駆け出す。

その進路上にはアレの使い魔なのか魔法少女に酷似した影のよつた存在がどこからともなく涌き出てくるが、巴さんはマスケット銃を片手にその中を突きぬけてゆく。

「私も行くわ」

「ああ、こつてらつしゃー。今度こそ倒せるようこ健闘を祈つてる

ほむらも行つてしまつ。

最後の話し合い手がいなくなり、本当に見守るしかなくなつたので手頃な瓦礫に腰を降ろすことにする。

『やつてくれたね、向井キリト』

『こからともなく聽こえてくるキュウべえの声。相変わらず神出鬼没なヤツだ。』

『まさか、一度精神が壊れてしまつたマミをあんな方法で正常な精神に回復させるなんて思つてもみなかつたよ』

「なに、孤独を埋めてあげだけだよ。それほど驚くことでもない

巴さんは寂しかつたのだ。その寂しさの渴きを埋めるために、魔法少女体験ツアーナるものを開催して後輩との繋がりを求めたり、頼れる先輩を演じてあそこまで俺たちにお節介を焼いてくれていたのだ。

その原因は彼女が魔法少女になる原因になつた交通事故によるところが大きい。

数年前に家族でドライブ中、自動車事故で自分以外の家族を失い、しかも自身も瀕死の状態に合つた中、命を繋ぐためにキュウベえと契約を交わし魔法少女になった。だけれども、彼女には遠縁の親戚しかおらず、中学生であるのにもかかわらず独り暮らしをしていたそうだ。

自分の周りにいる存在は消えて行つてしまつ、そんな風に巴さんの心の中に強い不安感や孤独感が生まれ、だんだんと精神が脆くなつていつたようだ。

「まあ、俺たちにも似たような経験があるからな」

他者に依存することは楽なのだ。

だから俺はそれを巴さんに示してあげただけ。なんてことない、たつたそれだけなのだ。

視線の先ではほむらが左腕に装着している盾からグレネードを取り出し、ワルブルギスの夜目掛けて照準を合わせている。次の瞬間ににはいくつものグレネード弾がワルブルギスの夜目掛けて殺到していた。

ほむらが扱う魔法は時間操作。時間停止と一ヶ月前まで時間を遡らせる時間逆行だけしか出来ないが、それでも強力な魔法だ。

さきほど使用したのは時間停止を用い、その間にいくつものグレネードを盾から取り出しては撃ち、取り出しても撃ちを繰り返し、同時にワルブルギスの夜に直撃させたのだ。これにより、高威力を生み出す。

グレネード弾がいくつも直撃したワルブルギスの夜だったが、その身体に損傷は見受けられず、わずかにノックバックしただけという結果になつた。

だが、その隙を窺つていたように、巴さんが召喚魔法で何百と言

う数のマスケット銃を規則正しく上空に展開し、それらの全ての撃鉄を鳴らした。

吹き荒ぶ暴風にも負けない轟音。だけれども、それさえもワルフルギスの夜にダメージが通った気配がない。

『ほむらとマミだけじゃ、おそらくワルフルギスの夜は倒せないだろひひ』

キュウベえが田の前で起つてている戦闘の結末を予想する。

「……かもしれないな」

俺自身も、彼女たちを送り出す前からそんな気がしていた。送り出す時は健闘を祈つてるとか言つてはみたものの、心のビックでまだまだ戦力が足りないと思つていた。

ほむらには本当に悪いと思つていてる。

彼女は、繰り返してきた全ての時間軸で真剣にワルフルギスの夜を倒そうとしてきたのだ。なのに手伝つとか言つておきながら、諦めの入つた気持ちのままで望むことは失礼に当たる。

「もつと戦力が必要か」

せめてほむらがワルフルギスの夜との真っ向から戦闘を集中出来るように使い魔たちを足止め出来る存在が欲しい。

今の状況は、巴さんが戦いに参加しているとは言え、それでもなお、使い魔たちはほむらに対して隙あらば攻撃を仕掛けてくる。そのことは元来、魔法少女は単独で魔女と戦ってきた存在なので即席の連携では上手く噛み合わないことも起因する。

その辺りのことも次からは考えなくてはならないな。

『戦力なら君たちのすぐそばにいるじゃないか』

「鹿目のことか？」

『そりゃ。まどかにはどんな運命を覆すことを可能にする力があるんだ』

運命、ね。

たしかに鹿目にはそれを覆すだけの力があるかもしない。いや、実際にそのか弱い少女の身体に宿っているだろう。

それは俺はこの目で見てきた。キュウベえと契約してワルブルギスの夜を一撃で粉碎するその姿を。

だが、鹿目にはどんな運命をも覆してしまえる力はないと思つ。もしもあつたのなら、俺たちが繰り返してきた意味が無くなつてしまつ。鹿目が自分の死の運命を覆すことが出来ると言つのなら、俺とほむらの努力は一体なんだったのだろうか？

「それだけは絶対にしないぞ」

キュウベえに俺たちの意思をハッキリと伝える。鹿目を魔法少女にする事はほむらが許さない。だから俺も許さない。

視線の先の戦闘中のほむらと巴さんの表情が芳しくない。戦闘に關しては素人の俺でさえもわかつてしまえるほど、コチラ側が不利な状況に立たされていた。

『どうしてだい？』このままでは君たちの住むこの見滝原市が壊滅してしまつよ』

起死回生を狙つた巴さんのティロフィナーレ。ほむらが困となり、

巴さんが巨大な大砲を召喚し砲弾を放つもワルプルギスの夜にかり傷をつけられた程度。

しかも巴さんのティロフィナーレを放った後の硬直した時の隙を窺つていたかのように使い魔たちが巴さんに詰めかけ、黄色のソウルジエムを破壊してしまった。

超弩級大型魔女『ワルプルギスの夜』。あまりにも敵が強大過ぎた。その力の差は圧倒的で、どうしようもないくらいに無慈悲な存在だった。

「駄目だったか……」

瓦礫から腰を浮かせ、しばらく待つ。

「行こうか、ほむら

戻つて来たほむらは悔しそうな表情をしていたが、すぐさま気持ちを切り替えたのかいつもの無表情になる。精一杯の強がりだ。

ガチリツ

時間軸を切り替える音。

その発信元はほむらの盾だ。その音に嫌な思い出も沢山あるが、今はもう、次へ旅立つための合図でしか無い。

『フフツ、なかなか面白い状況になってきたじゃないか』

次の時間軸へ旅立つ瞬間、聽こえてきたキュウベえの言葉が嫌によく響いた。

### 第34話 なんか恥ずかしくなっちゃったじゃん！

「こんな時になんなんだかじり、向井にはホント感謝してるんだ」  
ほむらを先頭にワルプルギスの夜の出現予測地点に向かつ中、えへへと俺の隣で歩く美樹は恥ずかしそうに顔を綻ばせた。

「急にびくしたんだ？」

ほむらと美樹の格好は魔法少女装束。藍色のような濃い青のほむら、水色のような薄い青の美樹。魔法少女のイメージカラーとはその人の心の中を映しているようだ。

すでに一人はワルプルギスの夜との戦闘の為に気持ちを静めているかと思っていたんだが、急に美樹からそんなことを言われたので少し驚いてしまった。

「もしもあの時、向井があたしを勇気づけてくれなかつたら、今ここにあたしはいなかつたなーって思つちゃつてわ」

あの時ね……。

特に何かをしたと言つ憶えはない。俺はただ、友達である恭介のために行動した。恭介の隣にいるのは美樹が相応しいと思ったから、俺は志筑仁美よりも美樹を応援したいと思つた。

「そんなに恭介のことが好きなのか？」

「うん……つてこんなこと言わせんなよ！ なんか恥ずかしくなつちやつたじゃん！」

「いやいや、先にお前が振ってきたことじやないか」

美樹は顔を真っ赤に染めてぶんぶんと振って恥ずかしさを紛らわしている。つて、おい。いくら鞄に納まっているとはいえサーベルを振り回すなよ。危ないじやないか。

ひとしきり恥ずかしさを紛らわす行為をした後、美樹は顔を引き締める。

「あたし、この戦いが終わったら恭介に自分の気持ちを伝えるよ」

「そうなのだ。美樹は惚気ておいてまだ恭介に告白していない。これはこちらの事情を優先してもらつた結果で、申し訳ない気持ちになる。

「……悪いな」

「どうして向井が謝るんだよ。むしろあたしは向井に感謝してくるくらいなんだよ？」

「だってさ、この一週間美樹が恭介に告白する機会はいくらでもあつたのに、対ワルブルギスの夜を想定したほむらとの連携訓練ばつかりさせた。ホント悪いな」

田さんの時の教訓を生かして、今回は一週間ほど前から一人の連携訓練を行なつてきた。成果は上々。この前現れた魔女には可哀想になるぐらいに圧勝している。

「ううん、いいんだ。だってワルブルなんとかを倒さないと見瀧原がメチャクチャになるんだよね？」

「やつだな」

「だとしたら、恭介の身も危ないってことになるよね。それにまどかや仁美やクラスのみんな、あたしの家族だって危ないんだ。いつちよ、その元凶を倒して、みんなを助けないとね。あたし自身のことはそれをしてからでも遅くはないと思つ」

そのせいで志筑仁美に一步リードされているとしても?

……とは、口が裂けても言えなかつた。そんなこと美樹は百も承知だらうし、こんな時に言つべきことでもない。

「そういうは気になつてたんだけど、あんたたちつてビリうう関係なの?」

美樹のその言葉に先を黙々歩いていたほむらがピクリと反応する。

「……」の一週間ぐらゐあんたたちと一緒にいるけど、恋人つて感じでもないし、親友……つて感じでもないか。でも友達つて間柄でもないよね

「…………」

返答に困つた。ほむらはこちらに聞き耳を立てたまま前を向いて前進し続けている。助け船は期待できそうにも無い。

とりあえず考えてみることにする。

まず恋人と言つ選択肢が排除される。そもそも付き合つてないのだから当然だ。

次に親友も無い。別に仲良くしているわけでもない。それと同じ理由で友達も選択肢から排除されることになる。

「あれれ？ 訊いちやいけない質問だつた……？」

「いや、別に問題無いんだが……どう答えたたら良いのか決めあぐねててな。ほむらは俺たちの関係つて何だと思う？」「

助け船を期待できないのなら、救援筒を焚いて無理矢理船を来させれば良い。

先を歩くほむらに問いかける。すると、彼女は立ち止り一・三秒考え顔だけ振り返り俺の眼を見て一言。

「……仲間よ」

ほう、そんな選択肢もあつたのか。

同じ目的に向かつて一緒に進み続ける関係。確かに、それが一番近いかもな。

「だ、そうだ」

ほむらの視線をスライドさせるよつこ、俺は美樹へと視線を滑らせた。

「そつか。頑張れよ、向井ッ！」

「いつてえええええッ！！」

何故か、バチンと背中を叩かれた。

「何すんだ、美樹！ 俺はただの一般人なんだぞ！？ 魔法少女のバガぢからで叩くんじゃねーよつ！」

「いーじゅん、いーじゅん

良くねーよ……と内心思いながら諦めることにする。もしかしたら、これが美樹の緊張のほぐし方かもしない。

これから彼女が立ち向かうのは超弩級の大型魔女であるワルブルギスの夜。幾度となくほむらが挑戦し、それと同じくらい敗北してきた存在。ほむらによれば、俺がこの繰り返しに参加する前に一度倒したことがあると言うのだが、詳細は聞いていない。繰り返し続けているこの現状がすでに答えなのだから。

「お出ましのようよ

すでに出現予測地点についていたらしく。ほむらのその言葉とともに一面の空が灰色雲で覆われていた見滝原に突如として暴風が吹き荒れた。

俺はこれを何度も経験しているから反応することはないが、今回の美樹はこれが初めてなので、現れた存在に目を限界まで見開き有り得ないようなモノを見るように驚きを表している。

「あはは、あたしの予想以上の大きさとは……向井たちの言つてた通りだつたんだね」

あれだけ何度も言い含めていたのにも関わらず、美樹は俺たちの言葉を信じきれていなかつたらしい。でもまあ、誤差の範囲などで気にしないことにする。

「こくわよ、美樹さやか

「よつしゃ、とつととアソツ倒してあたしたちの街を護るんだ！」

魔法少女一人を見送る。

俺には戦う力がなく、ただただ結末を見届けることしか出来ない。だけれどもそれを悔しいと思うことはない。

人には領分と言つモノがあつて、俺にはそちら方面で頑張る必要はないからな。

「……いつちまつたのか」

この場には良い俺以外誰にも居ないはずなのに聴こえてきた声。その音源へと顔を向ける。

「付き合こきれねえってどつか行つたんじゃないのか？」

「う、うるせえ。ひょっと見学に来てやつただけだ！」

佐倉杏子。真紅のように綺麗な赤髪をポニーテールにし、その勝

氣な性格を表したかのよつたハ重歯が特徴の魔法少女だ。チャイナ服を西洋風にしたよつた自らの髪と同じ赤色の魔法少女装束を着ている。

「だけど駄目だな。圧倒的に経験がたらねえ。あんなんじゃともじやねーが勝てねえよ」

美樹が契約したのはおよそ一週間前。経験不足は百も承知だつたが、今回の戦力は彼女しかいなかつた。

美樹がその身に宿す強力な治癒魔法を用いて壁となり、ほむらが必殺の一撃を叩きこむ。それが今回の作戦だつた。

「一応壁としての役割はできるようだけど、あれはそのうち押し切られて終わるな」

「だったら、加勢してくれないか？ 魔法少女としての経験が長い佐倉が入ってくれればまともな戦いになると思うんだが」

「アタシは他人のために戦うアイツらとなんて一緒に戦いたくねえよ。悪いーな、負ける戦には参加しない主義なんでね」

それだけ言い残して佐倉は俺の前から消えていった。

それにしても経験か……。

魔法少女として戦い続けてきた経験がなければ、連携を練習しただけではワルブルギスの夜は倒せないようだ。

それを証明するように視線の先では美樹の犯した小さなミスからどんどん戦局が悪くなってきていく。

「次はそれも考えないとな……」

俺に出来るのは、色々なことを考えてほむらが選べる選択肢を多くすることだけだ。

### 第34話 なんか恥ずかしくなひやつたじゃんー（後書き）

さやかが死亡フラグを立てやがりました。  
いや違うんだ。私はさやかを救おうとしただけなんだ。なのこさや  
かが勝手に死亡フラグを立てたんだよー！

そしてあんこが登場しました。

原作未視聴・未読の方には申し訳ありませんが、唐突に登場させま  
した。

あんこって誰だよって思つたらまずはアニメ観てください。話はそ  
れからです。

といつも、この作品は原作を知つてゐることを前提として書いてい  
るので、ある程度の説明の省略は仕方がないことだと思つてください。

### 第35話 ただ問題は、全員をそろえることなんだよな……

佐倉杏子と言つ少女がいる。

自己の利益を優先し、他人の利害を考えよとしない身勝手な主張をしている利己主義者だ。

魔法は自分の望みだけを叶えるためだけに使うべきだと、彼女は言つていた。

だが、そんな彼女が見滝原市の市民を護るために、魔法を その身に宿る魔法少女としての力を惜しみなく使つていた。

自分とは相反する信条を持つ美樹と対立していた佐倉であったが、美樹と関わるうちに自分の過去を美樹と重ねていった。

そして美樹が死に、美樹が護ろうとしていたものを護るために、佐倉はその力を奮つている。

「つまおおおおおおおおおおッ……」

その手に握る槍でワルブルギスの夜の使い魔たちを休むことなく切り刻み続けている。その背後からほむらも援護するよつこ、ロケット砲やグレネードを撃ちこむ。

それを離れたところから双眼鏡を用いて見守る俺は落胆の色を隠せなかつた。

「……こんなものか」

これまでの中では一番善戦しているかもしねれない。

だけれども、こんなものではワルブルギスの夜を倒すことは出来ない。そう、戦闘に関して素人である俺にも理解出来てしまえるほど、戦況は芳しくなかつた。

田さんの広域殲滅型の戦闘スタイルではほむらとの連携が難しい。美樹とでは連携しやすかつたが、圧倒的に魔法少女としての経験が足らない。

だから両者の欠点を補つために、ほむらとの連携が取りやすく、経験豊富な魔法少女である佐倉を苦労して生かす事に成功したと言うのに、この光景を見る限り遺る瀬無い気持ちでいっぱいになる。

「やはり鹿目を除く全員で挑まないと駄目なのかな……」

その考えは実質不可能だと言える。

巴さんが死ぬからこそ佐倉は見滝原市にやつて来るので、その時点で全員そろえることは出来ない。それに、美樹だつてキュウべえと契約して魔法少女とならなかつた時間軸もあつた。

他にもワルブルギスの夜に全員で挑むことが出来ない理由なんて少し考えただけでも沢山出てきた。

「どうすれば良いって言つんだよ。もっとも成功率が高いと思つて望んだ末の結果がこれじゃあ、諦めたくなつてくるじゃんか」

愚痴を零しながらも、俺は諦めることは出来ないと自分を鼓舞する。

双眼鏡越しで戦つているほむらを見ると、その表情は今も明日を願つている。そんな彼女を見ていると、諦めようとしていた自分が嫌になつてくる。

「だけどじうすりやいいんだうつな……」

座つた状態で背中から倒れ、空を仰ぐ。

一面の灰色。時々青い線が灰色のキャンバスに走り、「ゴゴゴ」と重低音を響かせている。風も強く、台風がやつて来る前兆みたいだ。

頬にポツツと何かが当たる。それを皮切りに、バケツをひっくり返したような雨が見滝原市を襲った。

そんな状況の中でも彼女たちは戦い続けている。

「「」苦労さん……だな」

ひとまず起き上がり、屋根のある場所まで退避する。

「「」いや双眼鏡は無意味だな」

あまりにも雨量が凄過ぎて双眼鏡を除いても何がなんだか状況が把握できなかつた。

仕方ないので肉眼で見守ることにする。幸いなことにワルブルギスの夜は巨大で、ワルブルギスの夜を見ているだけでもその動き次第でほむらたちの攻撃が通つていいかどうかわかる。

もつとも、攻撃を受けて仰け反ることはそう何度も起こらなかつたけど。

しばらぐザーザーと降りしきる雨音に耳を傾けながらほどほど決まり切つた結果を待つ。

時折響く爆音は、ほむらが使う爆弾や重火器だらう。それらをもつてしても、毎度のことながらワルブルギスの夜には勝てる気配がない。

ぴちゃぴちゃぴちゃ、と水浸しの地面を歩く音がする。その足音はだんだんと近付いて来て、俺の前で止まる。

その姿を確認すると予想通り先ほどまでの戦闘でボロボロになつたほむらの姿だった。

「駄目だつたわ……」

「……そつか

長く艶やかな髪に雨が染み込み、ほむらの顔を隠していた。俺からではその表情を窺うことが出来ない。

「それじゃあ、作戦タイムと行いつか。ほら、いつまでもそこに立つ立つてないでここへ座れ」

俺が座っている段差のすぐ隣をペチペチ叩き、早く座るよつて促す。このまま立ち廻していくても何も始まらないからな。

彼女が座るのを待ち、先ほどまで俺が考えていたことをそのまま話す。

「そうね。まどかを助けるためには、それしか方法は残されてないかもしけないわ」

考えつく最大の戦力。この見滝原市にいる全ての魔法少女を集め、ワルブルギスの夜に挑む。

もしもこのパーティーで負けるどこのか、勝機を見出すことが出来なかつたら、ほむらの心は完全に折れてしまふかもしれない。そう思えるほどの最後の手段と言つても良いくらいだ。

「ただ問題は、全員をそろえることなんだよな……」

「こればかりは神に祈るしかない。そう思ってきた自分がいた。

上着の上から首から提げた十字のネットクロスを握り締める。

神よ。

俺はアンタを信じちゃいない。だけどさ、必死になつて頑張つて  
いる女の子のことぐらい助けちゃくれないか。  
俺のことなら気にしなくても良い。だからほむらのことを  
……。

ガチリッ

薄れゆく意識の中、俺は神に祈り続けた。

### 第36話 全ては宇宙の寿命を延ばすためなんだ

繰り返す度によく見るようになったあの夢。登場人物はまだ小さい昔の俺と見憶えの無い長い黒髪の女の子。気にならない訳ではないが、それを一生懸命思い出そうとする時間は俺にはなかった。

瞼を開ける。見慣れた天井。この光景は俺にとっての始まりである。

そしてベッドの上で起き上がり、田の前に白い生き物がいることも、俺にとっての始まりと言つても良いぐらいに当たり前になってきた。

『やあ

』よひ

そのネコとウサギが会わさつたような存在が喋りかけてきたので、素直に返事をする。

『君はなかなかに興味深い存在だね。僕を知覚しているのにもかかわらず冷静に対応してみせるその態度。それにその身に宿る莫大な魔力には驚かざるをえないよ』

キュウベえは自分の身体を同じくらいの大きさの尻尾をゆらゆらと振つている。なにやら機嫌が良いみたいだ。

『まあ……俺にも色々事情つてものがあるもんでね』

魔力については知らん。だけれども、キュウベえがいつの間にか目の前にいた程度でお驚くことはない。

『そりだ。自己紹介を忘れていたね』

別にしなくて良い。もつお前の名前は知っている。

『僕の名前はキュウベえ。実は僕、君にお願いしたいことがあるんだ!』

『……お願い?』

今までになかつた事象。これまでキュウベえは、俺と言つ存在を興味深そうに観察するだけで、俺に対してアクションを起こすなんて無かつた。

だから俺は少し戸惑つた。

『そりだ、お願いだよ。だけどその前に君の名前を教えてもらつても良いかな?』

「あ、ああ……俺は向井キリトだ

『キリトは魔法少女と言つ存在を知つてゐるかい? 彼女たちは僕と契約して魔女と戦う宿命を負つた女の子たちなんだ』

「それは知つてゐる

俺がそり返すと、キュウベえは『やつぱりね』と言つてから言葉を続ける。

『僕が魔法少女を生みだすのには理由があるんだ』

それも知っている。だけれどもそれを言葉に出すことはしない。  
そうしたら、ほむらのためにならないし。

『全では宇宙の寿命を延ばすためなんだ』

「キュウベえは宇宙人なんだな」

『そうだね。君たち人類から見れば、僕という存在は地空外生命体だ。君はエントロピーという言葉を知っているかい?』

「熱力学の第一法則だつたか?」

『言葉だけなら繰り返す中で何度も聞いた。しっかりと理解出来ているかは別として。そもそも中学一年の俺に期待してはいけない。』

『簡単に説明すると生み出されるエネルギーと消費されるエネルギー等しくないということだね。エネルギーは形を変換することにどうしてもロスを生じさせてしまうんだ。このままの状態では宇宙全体のエネルギーは減りする一方だ』

「それはお前たちの責任じゃないのか。なぜ俺たちを巻き込んだ?』

『お前たちさえこの地球へやって来なければ、ほむらが苦しむこともなかったハズなのに。』

『キリストはなかなか面白い質問の仕方をするね。まだ僕は説明し終えていないのに』

キュウベえは相変わらず無表情なのに、ニヤリと笑つたよつに感じた。

自分のバカさ加減が嫌になってくる。

『まあ、今はおいておくとしてあげようか。それよりも説明の方が先だ』

『救われた……』と叫うわけではなく、問題が先延ばしになつただけだ。

『このままでは宇宙全体のエネルギーが枯渇してしまう』ことまでは説明したね。だから僕たちはその危機を回避するために、そして宇宙に飛び出した先駆者の責任として、僕たちはエントロピーに縛られないエネルギーを獲得するテクノロジーを発明したんだ』

それが俺たちを苦しめている契約システム。

『僕たちの文明が発明したのは知的生命体の感情をエネルギーに変換する技術なんだ。ところが生憎、当の僕らが感情というものを持ち合わせていなくてね、宇宙の様々な異種族の中から君たち人類を見出した』

さきほどの問いは『』にするべきだった。自分の愚かさは反省するしかない。

というかそもそも、なぜキュウベえたちの文明は自ら持つていない感情を資源とする技術を発明したのかが理解出来ない。もっと別の方法があるかもしれないのに。

『一人の人間が生み出す感情エネルギーは、その個体が誕生し成長するまでのエネルギーを凌駕する。君たちの魂はエントロピーを覆

すエネルギーたり得るんだ。もつとも、とりわけ効率がいいのが第一次成長期の少女の希望と絶望の相転移というわけさ』

だから男の俺とは契約できない。

この繰り返しの中で、知ることになった真実。それがこの事実だ。  
『ソウルジヨムとなつた魂は、燃え尽きてグリーフシードへと変わる瞬間に膨大なエネルギーを発生させるんだ。それを回収するのが僕たちインキュベーターの役割というわけさ』

「……まあ、うん。お前が言つてることは一応理解出来た。それで、これがお前の言つお願いとどう関係するんだ？」

『さう急かさないでくれないか。もう少しキリトは落ち着くべきだよ』

自分では十分落ち着いているつもりだ。

これまで起きることがなかつたキュウベえからのお願いという事象。俺としては早くそれを確認してワルブルギスの夜を倒すために役立てられるかが知りたい。

『さて、これからが本題だ。僕たちはエネルギーを欲している。それは理解出来たかい？』

「ああ」

宇宙の寿命を延ばす。表面上の平等な契約。

その一つを免罪符に、奇跡を対価に魔法少女を生み出し、魔女へと成長させ、エネルギーを回収する。そしてその魔女が絶望を撒き散らし、それによつて不幸になつた少女が奇跡に縛り魔法少女とな

る。

新たなエネルギーを生み出すための見事な循環が整った円環構造のシステム。

もはや驚嘆に値する。

『ならば、君にお願いするとしよう』

続くキュウベえの言葉に驚きを隠すことが出来なかつた。

『僕と契約して魔法使いにならなさい?』

一度は諦めざるを得なかつた選択肢。

それなのに、何故今になつてこつも簡単に、その選択肢が俺の目の前に取りやすくぶら下がつてゐるのだらう……。

### 第36話 全ては宇宙の寿命を延ばすためなんだ（後書き）

なぜ『魔法使い』なのかは完全に私の好みです。

『魔法少女』は、やがて魔女になる存在だからといつ理由なので却下。詳しくは次話で書くかも。

『魔法少年』は、なんか嫌だった。これまで書かれてくる一次で結構この呼称が使われていたし、前に後書きで「この作品は魔法少年を否定します」と書いたので使うわけにはいかなかつた。

マリマジ天使過ぎて悲しくなるね。

### 第37話 契約に同意している時点で結果は君たち人類の責任さ

キュウベえの言つている事の意味がわからなくて頭が混乱した。

俺と、契約……？

確かにキュウベえはそう言つていた。俺の耳がおかしくなったが、俺の願望のせいで幻聴を聞いたとか、まだこれは夢の中だとかしない限り間違いないハズだ。

尻尾をフリフリさせていつもと変わらない円らな瞳で返答を待つキュウベえ。だが、俺はコイツに対しても即答してはいけないということを知っている。

なぜならキュウベえは合理主義者だからだ。  
筋を通すためなら、情報を制限して相手に誤認させたまま物事を進めてゆく。

その最たる例を上げるのならば、魔法少女という存在だろう。  
少女たちは奇跡を対価にキュウベえと契約し、魔法少女となり魔女を戦う宿命を負う。だけれどもキュウベえは、少女の魂をソウルジエムへと変容させることや、魔法を使い過ぎてソウルジエムに穢れを溜め過ぎると魔法少女が魔女へと変貌を遂げることなどを、えて契約の時には話さない。

おそらくそれを話せば少女たちが契約を結ぶことを躊躇するを理解しているのだろう。だから情報を制限する。嘘の言葉を吐くのではなく、言葉の一部を隠すのだ。

「なぜ俺と契約しようと思った？ それに俺は生物学上男に分類されているから、お前の言つ最も効率の良い第一次成長期の少女はもとより女ですらないんだぞ」

そうなのだ。これもおかしい。

キュウベえは別に誰もかれもと契約して人類を蔑ろにしようとしているわけではなく、損害を最小限に抑えるために契約対象を最も効率の良い第一次成長期の少女だけに絞った。

だとするならば、俺と契約するなんて言い出すなんて有り得ない。何か思惑があるのではないかと疑つてしまつ。

『なに、簡単なことさ。君のその身に宿る莫大な魔力は、決してエネルギー回収効率が良いと言えない第一次成長期の少年であるにもかかわらず、魔法少女一人が生み出すエネルギーとなんら遜色のないレベルでエネルギーを生み出すんだ。まあ、もつとも君の合意を得られなければ、この例外的契約はなかつたことになるんだけどね』

キュウベえの言葉を聞いて考える。

その言葉に偽りはないハズだ。それがキュウベえにとつてのルールだから。だとしたら、隠された言葉はないか？

わからない。それが出された結論だ。

今の俺の状況で、真実を見つけ出す事は出来ない。そう結論付けてた。

「俺はお前の言葉を素直にそのまま信じられることが出来ない。だから少し時間をくれないか？」

『もちろんだよ。僕は君を急かすつもりはないよ。でも、できるだけ決断が早いに超したことはないかな』

せつかく起こした上半身を再びベッドへと沈める。

「なあ。気になつたんだけど、なんで『魔法使い』なんだ？　お前

と契約した存在は『魔法少女』になるんじゃないのか

契約のことばかりが頭の中を駆け巡っていて、頭がパンクしそうになつたので別のこと考えて気を逸らそうとする。

結局種類は違うが系統は同じ。それぐらこそしか逸りひとつ成功していないが。

『君はなぜ、彼女たちが『魔法少女』と呼称されているか知っているかい?』

キュウベえは嫌な顔一つしないで説明してくれるよつだ。感情がないのだから当たり前なかもしねいが。

「それは彼女たちが少女だからじゃないのか? お前と契約する時の年齢や肉体的な意味でも」

『ふむ。たしかにキリトが言つてる意味もあるね。でも、それだけじゃないんだよ』

「どうこういとじだ?」

『この国ではキリトが言つよつて成長途中の未熟な女を「少女」と呼ぶんだろ? だったら、やがて浄化しきれなくなつたソウルジエムが燃えぬき、「魔女」と成熟する彼女たちのことは「魔法少女」と呼ぶべきじゃないか』

つまり、魔法少女とはやがて魔女へと成長する存在とこつ意味なのだ。

『だが君といつ存在はイレギュラーだ。僕と契約した末に絶望した

からと言つて、君が魔女になるかどうかなんて僕でも予測しようがない。魔王になるかもしけなし、そもそも君が絶望を撒き散らす存在になるかどうかすら現状では確認することはできないんだよ。だから君を「魔法使い」と呼ぶことにしたんだ』

「じゃあ、なんで俺と契約しようとする。そんな不確定要素を受け入れるお前じゃないハズだ』

『やれやれ、キリトは勘違ひしてやしないか？　君が願いの果てにどういう存在へと変貌を遂げるかなんて君たち人類の問題じゃないか。僕は君たちに奇跡を手にする手段を提示するだけで、契約に同意している時点で結果は君たち人類の責任さ』

あくまで対等に。それがキュウベえが言つていることだ。

どんな奇跡でも叶えてやるから、代わりに宇宙の寿命を延ばすためにその結果から生じるエネルギーを貢っていく。

それが悪いことではないと理解出来る。愚かだったのはホイホイ真実も聞かず簡単に契約する人類の方なのだから。

だけど、納得は出来そうもない。

『うすりやいいんだよ、俺は……。

奇跡を手に入れる片道切符は入手した。

だけれども、その線路の先に待ち受けている未来は真っ暗で何も見通すことができない。

『僕はもう行くよ。契約する気になつたらいつでも呼んでね』

見慣れた部屋の天井を仰ぎながら思考していると、キュウベえがそんなこと言つてきた。それに俺は飛び起き、待つたをかける。

「俺との契約のことは誰にも言わないでくれないか？ それが守れないのならば俺は絶対に契約なんてしない」

『わかつたよ。それで君が契約してくれる気になつてくれるなら安いもんだ』

今度こそ、キュウベえは俺の部屋から出て行つた。

胸中では契約について迷いに迷つている。

俺がこの繰り返しから解き放たれ得たいと願えば、きっとその通りになるだろう。だが、それではぼむらが一人になつてしまつ。もしくは他の願いを叶えてもらい、俺が魔法使いになつてワルブルギスの夜との戦いの戦力になれば良いのだろうか。

他にもいくらでも選択肢が思いついていく。

それだけ、奇跡というものが魅力的なのだ。

だが、もしも契約して俺が絶望した時の未知のリスクを考えると、契約すること自体に尻込みしてしまう。

もう、どうしたらいいかわからねえよ。

結局今日も、母親が起こしに来るまでベッドの上で考え方耽るのだった。

### 第37話 契約に同意している時点で結果は君たち人類の責任さ（後書き）

本編とは全く関係ない契約についての考察。

（ セリフはめんどくさいので漫画より抜粋）

『一人の人間が生み出す感情エネルギーは、その個体が誕生し成長するまでのエネルギーを凌駕する』

第一次成長期少女とは限定していない。

『とりわけ最も効率がいいのは第一次成長期の少女の希望と絶望の相転移』

第一次成長期少女は効率が良いだけ。つまり、人間なら誰でもエントロピーを凌駕している。

また、『第一次成長期の少女の希望と絶望の相転移』とあるように、第二次成長期の少女は『希望と絶望の相転移』がもつとも効率が良いらしい。だとするならば、第二次成長期の少女以外は『希望と絶望の相転移』が効率良いわけではない可能性がある。まあ、本作品はそんな設定考えるのがめんどくさいので使いませんが。

例えば、第一次成長期の少年は愛情と憎悪の相転移とかいくらでも考えられる訳ですが。そもそも相転移かどうかすらわかりませんし。

### 第38話 あとは全部俺が何とかするから

“どうれば……どうすれば良いんだ。

俺は考え続けた。

朝食を食べながら、中学への道のりを歩きながら、授業を聞きながら……ずっと考え続けた。  
そして答えは出なかつた。

ほむらに相談するのが一番良い選択肢だろう。

俺よりもキュウベえとの付き合いが長いのは彼女だけであるから、キュウベえが隠しているかもしれない言葉の意味がわかるかもしれない。

それにもしかしたら、俺がほむらの「魔法から脱出できる」と喜んでくれるかもしれない。

全ては可能性でしかないが、これが一番の選択肢に俺は思えた。

しかし、俺はほむらに相談することに抵抗感があった。  
やつと掴んだ奇跡を望む権利なのに、それを手にしたことを見つたほむらの反応が恐かった。

さつきは良いイメージだけを想像したが、どちらかといつと悪いイメージの方が簡単に想像出来る。

それに、俺がこの繰り返しから解き放たれたら、ほむらが独りになつてしまつ。

孤独は寂しい。悲しい。苦しい。

俺がほむらと出会うまでは抱き続けてきた感情。きっと、ほむらも同じ感情を抱き続けてきたはずだ。

だから俺だけ途中で抜けるなんてとてもではないが出来ない。

「どうかしたかしら？」

思考の海に潜り過ぎてこたよつた。ほむらの呼びかけで意識を浮上させる。

「ううん。なんでもない」

場所は見滝原中の屋上。時刻は昼飯時。

つまり俺たちは昼休みとこいつと一緒に一人きりの屋上で昼飯を食べていた。

俺は手に持つてこむローバーで買った食べかけの総菜パンに齧り付いた。

「で、今回はどう方針で動くんだ？」

ほむらも自分で作ったと思われる小さな弁当箱の中身を突きつつ、返答する。

「あなたが言った通り、巴マニア、美樹さやか、佐倉杏子の全員と協力してワルブルギスの夜に挑むわ」

「まあうん、そりやわかってるんだよ。これまでの経験から言つて、それが一番成功率高そうだし。ただ問題はどうやって全員そろえるか……なんだよなあ」

「その方法はあなたに任せる。あなたの存在を知るまで何度も試したことがあるのだけれど、全て失敗。私には無理だと判断したわ」

「そんなことを言われてもなあ……」

確かに、俺が加わってからは全員そろそろよつとましそんなかった。それは俺が意図的にそうしてきたのだ。

最大戦力で向かつて行つて歯が立たなかつたら、ほむらが絶望してしまふそつで恐かつたからだ。ほむらが絶望してしまえば、時間を巻き戻す存在が消え、俺は繰り返しから解き放たれることになるのだが、その時の俺はすでにほむらと過ごすこの時間が好きになつていたからな。

終わつて欲しいことこの半面、すつと続いて欲しいと思つていた。二律背反。

……そつが、俺はほむらと過ごすこの時間が終わつて欲しくなかつたのか。

だから、キュウべえとの契約をこんなにも悩み、尻込みしている。

今さらこんなことに気がつくなんて、本当に俺がどうすれば良いんだよ。

この俺が経験している状況が物語の中の事だつたのならば、終盤も終盤。結末へ向けたラストスパートに入つたところぢやないか。最後の手段を切るしかなくなつたこの状況で、終わりたくないと望んだつて、もう立ち止まることは出来ないんだよ。

「そつ……だな、ほむらは今まで通り、鹿田に忠告し続けてくれ。あとは全部俺が何とかするから」

キュウべえに「この時間を永遠に」とでも願うのか？

いや、そんなことは、ほむらの願いに反する。俺は一生懸命なほむらの隣で進み続ける今の状態が好きなのだから、それを邪魔するなんて考えられない。

俺に出来るのは、ほむらの願いを叶えるだけ。

考えた末、結局これしか答えは出なかつた。

「あなた一人で大丈夫なの？」

「ああ、大丈夫。ほむらは愚直に鹿田のことを想い続けてやれ」

そんな君の隣にいるのが好きだから。  
だけれども、ずっとこの状態に甘んじてはいけない。この状態を  
積極的に望んではいけない。

だから、全てのことが終わつて再び俺たちの時計の針が進み出しあつ時に、ほむらの隣に居続けられるように頑張りつ。

最高の結末を求めて。

\* \* \* \* \*

昼飯を食べ終えて、教室に戻る。

ほむらとは彼女の教室の前で別れ、俺は自分の教室へとさつさと戻つて俺に与えられた机に着席する。

「向井イイイイイイイイイイイイー！ 貴様どういうことだッ！ なんでお前なんかが美人と噂の転校生と一緒に昼飯食つてんだよ！」

耳元で叫ばれてうるさかつたので途中から耳を塞いでいたが、それでも友人の声は聞こえてくる声量だった。

耳がキンキンして頭が痛い。

しかも最悪なことに、友人が叫んだせいで教室中の視線が俺たちへと向けられた。

「どうこいつ」とだ向井！ オイテメヨ、俺に納得出来る説明してくれんんだよなー！？」

友人は目尻に涙を溜めながら「向井だけは信じてたのによオオオー！」と俺に詰め寄つてきている。

「とりあえず、うるさい。ほむらとは昔の知り合いだったんだよ」

「な、なんだとうー？ 下の名前で呼び合ひ仲だと……」

驚愕の表情を顔に貼り付ける友人。

「どうか、驚くところはそこなのか。普通は知り合いつてところだと思うんだけどな。」

まあこれは、俺たちの関係性を訊かれた時の方便なんだが。おそらくほむらも壁数枚離れた教室で同じようなことを言つていいことだろう。

「向井様！ わたくしめを噂の転校生に紹介していただけないでしょうか！」

綺麗なお辞儀。腰を90度まで折り曲げた最敬礼。俺は天皇じやないんだからそんなことをされても困る。

俺たちを見る視線も友人の女を求めるその姿に呆れていた。

「そんなこと言われても無理だ」

俺たちには時間がない。  
こんな友人のために割いてやれる時間なんて、今こうして相手してやつてる時間ぐらいだ。

友人はチャイムが鳴るまで「そんな殺生な、殺生な」と俺を説得し続けてきたが、教室に入ってきた担任に怒られることで渋々俺の席から離れて行つた。

さあ、今日の放課後から頑張らないとな。

### 第39話 現状ではあなたの言つてること信じられないの

放課後。友人に拘まり、美少女転校生を紹介しようとウザかつたが、一時間ほどでなんとか逃げ出すことに成功した。

あの下駄箱での靴の確保は一生忘れることが無いと思つてしまつほどの攻防だつた。まあ、伊達に魔女とやり合つてきたわけでないので俺が勝つたわけだが。

「なんで初っ端からこんなに時間を無駄にしてんだよ」

友人の飽くなき執着心には驚くしかなかつた。

友人から逃れた俺は見慣れたショッピングモールにいた。

これまでの経験則から言つて、ここで初めて鹿目や美樹はキュウベえとの邂逅を果たす。別にそれを止めようとは思わない。そうしたら美樹が魔法少女となる可能性が消えてしまうかもしれないから。

「時間もちょっと良いくらいか

どうやら友人に拘束されていた時間は無駄ではなかつたらしい。携帯で時間を確認するといつもと同じくらいの時間だ。

書店やCDショップの目の前を横切り、固く閉ざされた改裝中と張り紙が貼られている扉を開けて、立ち入り禁止のフロアへと足を踏み入れる。

日中であるのにもかかわらず最低限の照明だけの薄暗さ。すでに毛玉のように丸い髭の使い魔は倒されているようで、結界は見当たらなかつた。

危険はないと判断し、つかつかと奥へ進んでいく。このフロアの構造は完璧に把握しており迷うことはない。

「「」たにむらはー」

開けた場所に彼女たちはいた。

魔法少女の衣装を身にまとった巴さんとほむらは睨みあつ形で。鹿目は傷ついたキュウベえを抱きしめながら美樹と事の成り行きを見守っていた。

「こんな時にそんなツ！？ 君、危ないから早くこっちに来なさいっ！」

優しい優しい巴さんは、俺を何も知らずに迷い込んだ一般人であると勘違いしたらしい。「この構図から考えるに、今回、ほむらは巴さんと敵対することにしたらしい。」

「あー、『心配なく。俺はコチラ側の人間なん』

そう巴さんに告げてほむらの隣に並ぶ。

なつ、とほむらに言葉を投げかけるが、無視された。こんな巴さんみたいにベテランを相手に睨み合いの状況で、俺に意識を向けることの危険性を考えれば当たり前なのだが、訝然としない気持ちになつた。

「あら、そうだったの。それは残念なことだわ

「俺としても残念でなりませんよ。あなたみたいな人とこう言つ状況になつていいことは

今はほむらの側についている。だがあの時、俺は巴さんの後ろで会話についていけずに困り果てている鹿目や美樹の隣にいた。

何も知らないわけではなかつたが、それでもいきなり現れたほむらを心の奥の方で恐れていたのを憶えている。

なのに、全てを知つた今では鹿目たちに恐怖を植え付ける方になつてしまつたのか。

「そうだ。自己紹介がまだでしたね。俺の名前は向井キリト。で、こつちが暁美ほむらつて言います。一人とも見滝原中の一年なんで学校で会つた時はよろしくお願ひしますね」

円滑な話し合いにはまずは自己紹介。ということで、ついでにほむらのことも紹介しておいた。勝手にしてしまつた事なのであとで怒られやしないかと、ほむらの顔色を窺つてみたが大丈夫みたい。これで少しでも警戒心が解ければ良いかなと思つたけれど、駄目だつたようだ。出来る限り陽気に話しているつもりなんだがな。

「私の名前は巴マミ。あなたの言つていることが正しければ、あなたたちと同じ見滝原中の生徒よ」

「あつ、酷いなあ。見てくださいよ、この学ラン。ちゃんと見滝原中男子の制服なんですよ?」

「じめんなさいね。現状ではあなたの言つていること信じられないの」

…………泣いてなんかない。何度も経験して予想を着いていたことだけれども、これは心にグサリと突き刺さるんだよな。

人外であるキュウベえを除いて俺の言葉を初めて聞いてくれた人は巴さん。そんな人にこうも絶対の意思を示されることは何とも堪え難い。しかし、ほむらのために堪えなければならない。

「それは残念です」

表情を変えないよつこ、あくまでも陽気こ返す。

「それで、君たちの名前は？」

田中君の後ろに控えていた鹿田と美樹に喋りかける。どうせほむらのことだからまだ名前訊いてないんじやないかと思つてついでに訊いたが、そう言えば同じクラスだつたと思つ出して、自分の思慮の無さが露呈する。

だがまあ、俺が彼女たちの名前を知る機会として考えれば問題ないか。結果オーライである。

「「え……わたし（あたし）たち！？」」

双子と見紛うばかりにシンクロする鹿田と美樹。一人は緊張した面持ちで顔を見合させて頷き合つ。

そして代表して傷ついたキュウベえを抱える鹿田が口を開く。

「あの、わたし、鹿田まじか。それでこの子が美樹さやかちゃん」

「よひじく

おひおじしながらも、田中紹介する鹿田。そして美樹は顔を強張らせながらも無愛想に挨拶をしてきた。

「おひ、よひじくな

友好的な関係を築くにはまずは笑顔だと俺は思つ。キュウベえやほむらみたいに無表情では人が寄り付かないと思つんだが。この一

人の目的を考えたら疑問が浮かんでくるのは俺だけではないだろ？

「セヒセヒ、一通り自己紹介も終わつたし 」

スー、と斜め後ろに移動し、ほむらの両肩を掴む。巴さんと睨みあいの攻防を繰り広げていたほむらは反応できない。

「俺たちは帰ることにしますわ」

ほむらの背をぐごぐごと押し、元来た道を戻ることにする。

「あつ、ちゅうと、まだ話がツー？」

「良いから良いから。俺に任せてくれるんだろ？？」

細い身体で抵抗するほむらを無理矢理説得する。

しかし、敵対していたハズの存在から待つたが掛かつた。

「あなたたち待ちなさいッ！」

巴さんだ。まったく、せつかく引くとこのだから見逃してくれたつていいじゃないか。

仕方ないので、首だけ向ける。

「良いんですか？ そちらには何も知らない足手まといが二人。ですが、こちらにいる足手まといは俺一人。どちらに分があるか、巴さんにはわかると思つんですが」

「ここのほむらを戦わせるわけではないが、退散するために少し脅してみる。」

「 ッ！？」

効果観面つてところかな。

さすがは魔女との戦いで長く生き残つてきている魔法少女だ。油断されなければ状況判断は問題ない。

やはり田舎さんは最終決戦の舞台に立つてもらわなこと。

「それでは、また会いましょう。ほひ、行くよ」

ぐいぐことほむりの背中を押して改装中のフロアから退散する。ほむりは最後まで鹿田のことをチラチラ見ていた。

ショッピングモールへと出る前にほむりは変身を解き、見滝原中の制服へと戻る。そしてから、タ焼けの中ショッピングモールの中を歩く。

「本当に、アレで大丈夫なの？」

「ほむりこち田舎さんと対立してどうするつもりだよ。あの人に生きていってもらつたためには、ケンカ売つてたら駄目だと思つただけだ」

「あなたこそ、最後にケンカ売つてたじやない。それはどう言い訳するつもり？」

「ああ、早くあの場から退散したほうが良いからだよ。この後、鹿田たちせ田舎さんの住んでいるマンションで魔法について教えてもらうんだ」

ホント懐かしいな。あまり良い思い出ではないけれど。

「以前に、似たような経験があるから、今後の展開を予想しやすい  
よつこ物事を進めよつてわけだ。そのままグダグダとあの場に留  
まるのは得策じゃない」

俺とほむらの考え方には違いがある。

鹿田を救うために今までと違う展開を求めるほむらに対し、俺は  
展開を予想してその節々に介入することで鹿田を救おうとしている。  
些細な違いだが、これは意外と大きい。

ほむらが立ち止まり、俺の顔を見てきた。だから俺も見つめ返す。  
長時間見つめ続けていると紫紺の瞳に吸い込まれそうになる。

「考えがあるのなら良いわ。今回、私は全てあなたに任せてるから

ほむらは俺の返事も待たず、ブイツと顔を正面へと戻し歩きだし  
た。

## 第40話 ヘえ、それは奇遇な廻り合わせだね

俺の住む見滝原市は、近代的な都市開発によつて地方都市化が進められた街だ。新興住宅地には人工的な景観の緑地や小川が整備され、郊外には風力発電施設や水門、工場などが置かれている。

そして病院もまた、都市開発によつて最新鋭の医療機器が揃えられている

だが、そんな医療機器があるにもかかわらず、助けられない病気や怪我は確かに存在するのだ。

上条恭介。交通事故によつて自らの夢を諦めなければならなくなつた俺の友人。

恭介とは中学に入学した直後からの付き合いだが、かなり親しく、彼が交通事故にあつた時は俺も心を痛めた。

将来有望と資質を認められたヴァイオリニストであつたのに、たつた一つの交通事故で、その指は動かなくなり、夢を諦めなければならなくなつた。

「コンコンン」、と病室の戸を叩く。すでに時間は午後七時だ。面会の残り時間は一時間ほどしかないが中から恭介の返事を待つて入室する。

まずベッドの上で起き上がつている恭介が見え、少し視線をズラすと……。

「なんであんたがここに……！？」

「そりやまあ、俺は恭介の友達だからな」

何を当然ことを、と恭介に視線を飛ばす。

「そうだよ、さやか。僕とキリトは中学に入学してからの仲でね。といつか、君たち知り合ったの？」

「知り合いつてほどモノじやない。ただひょっと、昨日会つたばっかりつて感じだな」

「へえ、それは奇遇な廻り合わせだね。どうしたんだい、さやか。そんな顔して？」

明らかに警戒している美樹。

おいおい、そんな表情を恭介の前でするなよ。

「……」めん、恭介。少し、アイツ借りてくれ

美樹は見舞客用の椅子から立ち上がって、俺の腕を服の上から乱暴に掴み、恭介の病室から強引に連れ出す。

恭介が呆気にとられていたので、俺が「大丈夫」と言い残しておいた。これで、恭介のことは心配ないだろう。

「どこまで行くんだ？」

ズンズンと進んで行く美樹に訊ねる。

さつきから入院患者や白衣の天使たちから、「青春ねえ」みたいな視線を貰いまくつて、非常に居心地が悪い。それもこれも、腕なんて掴んでどこかへ向けて一心不乱に早歩きで進み続ける美樹のせいだ。

ようやく美樹が止まつたのはエレベーターの前。扉が開くと、中へ連れ込まれ、ここでようやく拘束が外れた。

美樹が押したのは屋上へと登るボタン。ウイーンと胃の内容物が

競り上がる浮遊感が始まる。屋上へ上がるまで、いぐり話しかけても終始無言で気まずいことこの上なかつた。

「あんたどうこういつもり？」

時間が時間なので、照明で照らされた屋上の中ほどまで進み、美樹がこちらへ振り返つてみづやく口を開いた。先ほどと同様、俺を警戒している。

「どうこういつもり、とは？」

「恭介のことだよ！ なんであんたみたいのが恭介の友達なのよ！？ それにあたしはあんたのこと知らなかつたし、まさかあんた魔法を使って……ッ！？」

もう色々と勘違いをしてくるようつだ。

「はあ……、さつき恭介が言つてただろ。俺と恭介は中学に入学した時からの付き合つ。んで、俺もお前のことは知らなかつた。ただそれだけだ」

「嘘だッ！」

真実だけしか喋つていないので、それを否定されるのはツライな。本当に、この繰り返しが始まる前までは俺は恭介と美樹が幼馴染だつたなんて知らなかつた。何の因果の廻り合わせか、何度も病院に見舞いに来ていたハズなのに、病室で力合戦つことも無かつたし、恭介自身が美樹の話をしてきたことも無かつた。

「嘘じやない。 真実だ」

それだけ言ひて、近くにあつたベンチに腰掛ける。物分かりの無いヤツと話すのは想像以上に疲れるのだ。

「それで、美樹は魔法少女のことは聞いたか？」

ちょうど良いタイミングだったので、これ幸いと話題を振る。

「一応、一通りは……。でもあなたには関係ないことでしょ」

関係ないわけではない。むしろ、関係あり過ぎるほどだ。

「それでどう思つた？ 奇跡も、魔法もこの世に存在すると知つて、美樹はどうしたいと思つた？」

「そ、それは……あんたには関係ないじやん！」

「ハハッ、恭介を助けたいとは思わなかつたのか？ キュウべえに願えば、恭介の身体は元通りになるぞ」

俺は見てきた。

美樹が願い、そして恭介の身体治つてきた、その光景を。何度も、何度も。

「だけど……それは」

「魔女と戦つのが恐いか？」

「ちがうつー！ ただあたしは、恭介の意思を無視してあたしだけの想いで、勝手にしちゃうのは駄目だと思つんだ」

「美樹は、幼馴染のくせに恭介の想いがわからないのか……？ アイツはどこまでも、ヴァイオリンが好きなヤツだ。だから感謝こそすれ恨む」とは絶対にない

「そんなことわかつてゐる。だけど……だけど、あたしは恭介を……

それ以上、美樹の口から言葉が発せられることはなかつた。自分の想いを上手く言葉に出来ないんだろう。

俺にも憶えがある。想いを伝えられなくて後悔したこと也有つた。「迷うなら考へろ。そして答えが出たらそれに向かつて一直線に進んで行け。それが俺から言えることだ」

幸い俺には時間だけはあつた。だからずつとずつと長い時間の中で考へ続け、答えを出した。

だけど、美樹には時間をかけて欲しくない。それが本心だが、彼女のためにそれはあえて言わない。

ポケットから携帯で時間を確認するともうすぐ午後八時。面会時間の終了だ。

「もうこんな時間が。俺は帰るぞ」

携帯を仕舞いつつベンチから立ち上がり、とぼとぼとエレベーターを指す。

「待つて」

「ん？」

呼び止められたので顔だけ向ける。

「あんたは恭介の友達なんだよね？」

「ああ、恭介が友達だと思つてくれているなら友達のハズだ」

訊きたかったのはそれだけしかつたので、さうあとエレベーターに乗り込み病院から出る。

夜道は街灯に照られ、変なモノを踏んでしまつことも無い。

『感謝するよ、キリスト。まさか君が契約の手伝いをしてくれるとはね』

「まー、俺にも事情があるんでね」

いつの間にか、隣を歩いているキュウべえ。神出鬼没にも程がある。

『その事情について詳しく訊かせて貰えると助かるな』

「そのつぢお前には話すかもな」

別に隠し立てするほどの事情でもない。

ただ単に、美樹さやかに早いところ契約してもらつて、魔法少女としての経験を少しでも積んでもらいたいだけだ。

切り札を切つたのだから、最高の状態でワルブルギスの夜に挑みたい。

今日たまたま、恭介のお見舞いに行つたら美樹がいたから、契約を促したに過ぎない。少々強引過ぎた部分もあつたが、まあ良いだ

れい。

「やついや、恭介の病室に戻るの忘れたな……」

これは心配をかけたかもしだい。

ここは、美樹が病室に戻ったことに期待するとしよう。

## 第41話 それでもあたしは恭介が大好きだから

翌日。今日も今日とて、友人に美少女転校生を紹介しようと詰め寄られながらも、用があるの一点張りで教室から抜け出し昇降口までやつて来ると、知ってる顔が一つ並んでいた。

入口の右と左にそれぞれ立つて、誰かを待つているようだ。二人の間に会話はなく無言だ。

右は長い黒髪の力チユーシャ。左は短い青髪のヘヤピン。どうしてこうなっているのか事情が知りたい。

ギスギスしている雰囲気が流れていたが、美樹が俺のこと気につく。

く。

「あつ

「遅いわ。いつまで待たせるつもり?」

何事か言おうとしてきた美樹にほむらが言葉を被せてきた。美樹がほむらを睨む。

あれ、君たちはいつからこんなに仲悪くなつたの? そもそも、今回はそれほど接触はしないハズなんだが。

「いや、待ち合わせなんてしてないだろ」

とりあえずツッコム。基本的に別行動。用がある場合は携帯に連絡。それがルールだったハズなのに、いきなりどうしたんだ。

「細かいことを気にする必要はないわ。それじゃあ、行きましょう」

美樹を完全に無視して話を進めるほむら。おいおい、最終的には

美樹の協力が必要なんだぞ？ 何をイライラしているんだ？

美樹の方もイライラにゲージが存在していたとしたら振り切れているだろ？ぐらいに噴火寸前だ。

「待ちなよ。あたしも向井には用があるんだけど」

精一杯の強がりだろ？ 魔法少女の戦闘能力を知った後では、ほむらを恐れるのは理解出来る。自分と敵対しているかも知れない存在が、自分が手出しできないぐらいの強さを持つていたら恐れるに決まってる。

巴さんみたいな、対抗出来る見方が傍にいてくれれば別だが、今美樹は一人。

魔法少女であるほむらに、その仲間といった俺。美樹が体育会系の女の子だからと言つても、その力は無力に等しい。

「 そうだぞほむら。せっかく来てくれたんだから話しぐらい訊いてやつても良いじゃないか」

「 そう言つと、ほむらは一瞬嫌そうな顔をしたが、すぐにいつもの無表情へと戻す。

「 と言つわけで、場所でも移動して話すか」

これ以上ここにいて、明日、意外と情報通の友人が修羅場とか言いだしてきたら面倒なので、場所を移動する。  
場所を近くのファミレスへと移す。

学校帰りの学生達で賑わっており、深刻な話をして、他へ耳を傾ければ気分はそこまで沈まないだろ？。

「 向井は昨日言つたよね。恭介の友達だつて」

「ああ、言つたぞ。それがどうした？」

俺の隣にはほむりが座り、対面には美樹が座つてゐる。

「それじゃあ、恭介の身体が治つたら嬉しいんだよね」

「当たり前だろ。友達なんだから」

美樹が魔法少女として戦う切つ掛けになる願いはいつだって恭介の治癒だった。もつと他に、恭介が美樹のこと好きになるとか、彼女にとつて都合の良い願い方はいくらでもあるのにも関わらず、彼女は恭介の身体を治し続けた。

それがどれだけスゴイことだか、美樹自身は気が付いているだらうか？

俺みたいに選択肢が一つ増えただけで悩んだり、やるべき道を踏み外しそうになつたりせずに、いつの美樹でも一つの奇跡を願い続けた。

それが俺には眩しくて、嬉しくて。だから、俺は恭介の隣にいるべきなのは美樹であると思つてゐる。

「昨日の夜ずっと考え続けたんだ。おかげで、授業中爆睡するハメになつちゃつたけど、それでも答えは出たよ」

「それで、美樹は奇跡も魔法もあるって知つてどうしたいんだ？」

答えが出たと言つてきたのでもう一度問う。

「あたしは恭介が好きだ。だから恭介には夢を叶えてもらいたい。身勝手なこんな願いだけど、それでもあたしは恭介が大好きだから」

「そうか……」

それで良い。今回の美樹も、俺が知る美樹さやかだつた。それを確認できただけでも、応援したくなる。

「やう言えば、なんで俺にそれを話すんだ？ 普通なり巴さんで話すべきじゃないのか」

どう考へても、一日前は軽く敵対関係になつた感じだつたし、あの後絶対に巴さんで俺たちのことを利用するなとか言い念められただろ？ うう注意が出来るのが巴さんの優しさである。

「いや、だつて、向井は恭介の友達つて言つてたし……でも、そこ転校生を信用したつもりじゃないけどな」

視線をズラし、ほむらを睨みつける美樹。まるで肉食動物に対して草食動物がビクビクしながら噛みついているようだ。

ほむらの方はと言えば、始めから終始無言で美樹にガン垂れまくつていた。

あの、だからさ……なんで君たちはそんなに仲が悪くなつちやつたわけ？

前回までは、じんなに急に仲悪くならなかつたじゃないか。ほむらも自重してくれよ。君がちやんと美樹と連携とれないと勝てる者も勝てなくなつちやうんだぜ？

……みたいなことを、もむらん言葉にせせらべる度胸を持ち合わせているわけも無く、仕方なく話を進めるところとした。

「はははっ、まあほむらとは追々仲良くなってくれたら良いけどさ。でも、いくら俺が恭介の友達って言つても、巴さんは危険だから俺たちには近付くなつて言つてただろ?」

「うそ、たしかに言われた。巴さんはあたしたちのことを心配して言つてくれただな、つて思ったよ」

「だったら何故? そう、問う前に隣に座つたほむらがようやく口を開いた。

「巴ママはそんな人間ではないわ。孤独になることに恐れを抱いている、人一倍臆病で矮小な存在。それが巴ママといつ人間よ」

「おい」

「言ひ過ぎだ。

もしもこの会話をキュウべえに聞かれていた時はどつさるつもつりだ。アイツと敵対するのは得策じやないぞ。そう思えるほどに、彼らの知力は凄まじい。

「え? そればどうこいつ……」

「反応して欲しくないのに、美樹は空氣を読んでくれない。

「あー、もう。ええと、つまりアレだ。巴さんは魔法少女として後輩になる可能性のあるお前たちにお節介を焼いているだけだ。そうすれば最低限、お節介を焼いている間は独りではないからな

「独りは寂しい。経験しないと意外とそんなことでもわからないからな。

「それじゃあ、行くか」

「どうに?」

立ち上がる俺に美樹が疑問を口にした。

「病院に決まってるだろ。美樹が決意したんなら、少しでも早く恭介に、ヴァイオリンを弾かせてやりたいじゃないか」

俺にはこれまで他人を導いてやることしか出来なかつた。だけど、奇跡を望む権利を手にした。だと言つのに、結局他人を導いてやることしか出来ない。

それで良いんだと思つ。奇跡なんて忘れて、今まで通りにやっていけば。

ほむらはすでに立ち上がり俺の隣でスタンバつてゐる。だからこれまで恭介の身体が治ると呆けている美樹に言つてやる。

「ほら、行くぞ」

「うん。」

返ってきた返事は、いままでの彼女との付き合いで一番の笑顔と一緒にだつた。

第41話 それでもあたしは恭介が大好きだから（後書き）

さやかが同じ願いをし続けてきたといつのは捏造設定。たぶんあつてゐると思ひナビ。

## 第42話 さあ、受け入れるといい。それが君の運命だ

一人の少女が戦いの宿命を背負い、一人の少年が再び夢を取り戻す。

何度もなく行なわれてきた契約。それが今、病院の屋上で行なわれている。

俺の隣には、それを惡々しそうに見守るほむらがいる。

『覚悟は決まつたかい。美樹さやか』

「本当にどんな願いでも叶うんだね……」

『大丈夫。君の願いは間違いなく遂げられる。じゃあ、いいんだね?』

キュウベえが美樹に近寄り、最後の言質を取る。

「うん」

迷うことなく、美樹が答えた。

すると、彼女の胸元からソウルジエムが生み出される。

『さあ、受け入れるといい。それが君の運命だ』

ここに契約は成された。

\*\*\*\*\*

契約後、俺たちは恭介の病室を訪れ、彼の指の痺れが取れている」とを確認した。あまりの嬉しさで美樹が泣きだし、なだめるのがもの凄く疲れたことを憶えている。

その時に恭介が一緒にいたほむらのことを彼女と勘違いした時はキモが冷えた。そんな関係じやないと恭介を説得するまで生きた心地がしなかった。

「ふう……」

「麦茶よ」

「ねっ、ちゃんとーーー」

美樹の邪魔をしては悪いので、早々に病室退散した俺たちは、ほむらの住むアパートへ着ていた。

その部屋は上から見れば時計盤のような内装をしており、真っ白でとくかく説明し難い内装をしている。魔法を使っているようなのだが、まったくよくわからない。どうして外から見るよりも中が広いんだ？ まあ、きっと魔法の力なんだろうが。

差し出された麦茶を口に含む。

「やつこやわ」

「なにかしら？」

「やつこへー息つけたのでかなり気になっていたことを訊くことにした。

「なんであんなにも美樹と険悪な雰囲気になつてんだ？ 滅茶苦茶ビックリしたんだけど」

繰り返しになるが、かなり氣になつていた。

ワルプルギスの夜を倒すためには美樹の力が絶対に必要。であるにも関わらず、ほむらがわざわざケンカ売る必要はないのだ。むしろケンカ卖るのは連携の邪魔になる可能性が高い。

「だ、だつて、美樹さやかがあまりにも愚かだつたから……」

俺から顔をそむけ、ほむらは小声で呟いた。

「愚か？」

「危うくまじかに契約をさせてしまつといふだつたのよ」

つまりアレだ。」「うーうー」とうい。

昨日、巴さんに連れられ、あの頭にバラが咲いており、背中には蝶の羽の生えている四足歩行の魔女と彼女たちは戦つた。もちろん、ほむらは見届けていたらしい。

そこで美樹が軽率な行動をし、危うく死にかけたそうだ。そして仕方なく傍観していたほむらが助けに入ることになった。この時美樹が死ねば鹿目は契約する。それはわかつていたことだ。

だからほむらは助けた後、美樹にぐちぐちと色々言い聞かせたそうで、そこから犬猿の仲。もう少し自重はできなかつたのかと俺は言いたい。まあ、鹿目関連のことではむらが自重するなんて難しいことだけ。

「まあ、アレだ。とりあえずこれからは最低限仲良くしてくれよ。別に仲悪くても良いけど、戦闘訓練とかはしどきたいして」

美樹が俺たちの側に来るとは思えない。だけれども、今回の一件で気にかけてはくれることだらう。

基本的に美樹はほむらと同様で鹿田のことが好きだから、鹿田が田代の傍にいる限り、美樹もあちら側にいるだらう。

「わかつてゐるわ、それぐらい。さうじやないとまじかを助けられないもの」

時々だが、ほむらはこうして年相応の子供みたいな反応をすることがある。いつもは無表情の仮面を被つてるのでわかりづらいが、付き合いの長い俺にはなんとなくわかるようになつてきた。

「それなら良いんだけど、ホントにわかつてゐるよな?」

「確認してこなくともちゃんと理解しているから問題ないわ。私が付き合いの長いのよ」

「そりやじもつとも。むしろ繰り返しの原因であるほむらの方が付き合いで長いのは当たり前だと思つんだけどな」

「ただまあ、結果から見れば、ほむらと美樹のケンカは意味あつたな。まさかこの時点で美樹の契約に遭はれることは思つてもみなかつた」

予想外と言つても良い。おそらく美樹は恭介の怪我を治すためだけではなく、ほむらへの対抗心が後押しになつて契約に踏み切つたのだろう。もしも、巴さんに助けられていたら、「助けられて当たり前」。そんな風に思うかもしれないし。

麦茶の入ったコップを傾け、全て飲み干してテーブルの上に置く。

「おかわりはいるかしら？」

「いや、いい」

部屋の主の気配りに断りを入れる。  
ほむらは、「わつ」と言つてから、

「それじゃあ、昨日あなたは美樹をやかと何があつたの？」

「ああ、昨日は恭介の見舞いに行つたら美樹が病室にいてな。たぶん、ほむらに助けられて気分が沈んでいたのを恭介と会つて無理矢理上げようとしてたんだな。で、色々と言われたから、逆にこっちも色々と言つた。そんだけ」

そして、結果的にそれが契約に結び付いた。  
果たして今回の美樹は真実を知つた時、どういう反応をするんだろうか。契約を促した俺を憎むんだろうか。それならそれでも良いんだけどさ。それでワルブルギスの夜を倒せるならな。

「ん？ どうした？」

ざつくり説明し過ぎたのが悪かったのだろうか、ほむらからの返事がない。

なにやら難しそうな顔をして、何かを考えているようだった。

「なんでもないわ。少しあなたの言葉が本当か考えていただけだか

「うわあ、酷いな。俺はほむらには嘘はつかないぞ」

キュウべえの姿勢を見習つて、俺はほむらに嘘を言つひととせやめよつと思つた。嘘をついて彼女を傷つけてしまつにならば、言葉を隠してしまえば良い。

ほむらにとつて必要な真実の言葉だけを俺は彼女に言つひとにした。それが彼女の笑顔に通じると思つて。

「それじゃあ、詳しく述べるつかしら

「ああ、もう。仕方ないなあ」

昨日のことを出来るだけ細かくほむらに説明していく。  
まったく、メンドクサクないよつに簡略説明したと云つて、彼女ときたら……。全てを疑つていたら疲れるだけだぞ。

## 第43話 こればかりは焦つても仕方のない」とだわ

美樹が契約してしばらく経つた。

予想通り美樹は鹿目と一緒に巴さんについて、魔法少女としての経験を順調に積んでいく。巴さんが指導するのであれば、俺としても何う心配ない。

ただ、一つだけ懸念事項が残つた。

それは鹿目のことだ。美樹が契約したことで、鹿目が自分も契約しなければ、と焦り出した。これは予想外の出来事で、そう急に対応しなければならないかもしれない。

「そろそろよ」

「りょうかい」

ほむらの声に思考を止め、視線を向けた先のグリーフシードが孵化しそうになつていることを確認する。

ここは恭介が入院していた病院。現在はリハビリのために通院しているとかなんとか。その病院の駐輪場の壁にグリーフシードはあった。

普通なら孵化前のグリーフシードは、発見次第すぐに回収するのだが、今はそうもいかない。この状況で回収しても穢れが溜まっている状態なので、それ以上穢れの吸収が出来ない。だからワルプルギスの夜との決戦に備え、一度孵化させ、溜まりに溜まっている穢れを解放してから回収しておきたいところ。

周囲の空間が歪み始め、魔女の結界の中に取り込まれる。

その時に俺たちが分断されないように、ほむらと俺は手を握っている。若干恥ずかしいが、もしも俺がほむらの近くから離れたらか

なりの確率で死んでしまうので必要なことだ。

結界の内部に入り込んだ瞬間に握っていた手が離されてしまったのが、少し残念でならない。

結界の内部は、視界一面に巨大なケーキやクッキー、プリンやらが埋めつくす、ある意味夢の空間ではないだらうか。しかし、だからこそこの空間には異質さしか存在しない。

周囲を確認するヒグリーフシードは小さなテーブルの上にあった。それを囲むように置かれた高い椅子が一つあったので、俺とぼむらはそれに座つて孵化を待つことにした。

「あとどれくらいで孵化するかわかるか?」

五分ぐらいで待ち切れなくなつたので、専門家のぼむらさんに訊く。素人には今にも孵化しそうとしかわからない。

ぼむらは一度ソウルジョムへと視線を落としてから予想をする。

「もうね……あと十分ぐらいとこつたところかしきり。こればかりは焦つても仕方ないことだわ」

「いやだつて、もしかしたら巴さんが駆け付けてくるかもしれないじゃん。そうなつて、もし巴さんが死ぬことになるのは絶対に避けたいからさ」

そう、今回俺たちが狩ろうとしている魔女は、俺の右上半身をバリバリと喰いやがつたアソツだ。

今から生まれるこの魔女は、もしもあの時俺が巴さんを助けなければ、巴さんを何度も殺してきた凶悪な魔女だ。もちろん、巴さんとの油断ということもあるのだけれど。

「そんなに暇であるなら、ソレの感触でも確かめておいたらどうか

じり

「ハハ、ねえ……」

テーブルの上に無造作に置かれている拳銃に視線を落とし、それを手に取り試しとばかりに構えてみる。

「重いな」

これが命を削る武器の重みか。  
これからは俺も最低限身を護らなくてはいけない。ほむらが少しでも集中出来るように。  
手始めて立ち上がって試し撃ちしてみる。

バンッ

初めて体験する射撃の衝撃に手元から拳銃が吹き飛ぶ。

「 ッ

よくもまあ、ほむらの細腕でこんなことが出来るよな……とは思ふことはない。魔法少女は身体能力が強化されているから当り前のことだし。

拳銃を拾い、椅子に座り直す。

「うん、俺には無理そうだ」

肩が外れそうになつたし、とてもではないが俺には使っこなすことが出来そうにもない。

「どうやらやつね

先ほどの俺の様子を見て、ほむらが溜め息をつきながら言った。  
情けない限りだが、仕方ないことだと割り切る。男として拳銃には憧れてたんだけどな……。

「でも何があるかわからないから一応持つておいて」

「……やつするわ」

少し悩んでから返す。  
さて、どうやって保管するかな。親にバレたら大変そうだ。

「キタわ」

そういう間に孵化すること。すぐさま椅子から立ち上がり、俺は後退する。

パキパキ、と音を立てて、まるでヒヨコが孵化するように、グリーフシードが割れて、中から這くるしいぬいぐるみのような魔女が飛び出してくる。

そして次の瞬間には爆発。こうして魔女はほむらの時間停止と爆弾のコンボで倒された。

「お疲れ」

待ち時間の方が長いとは、なんともやるせないが、わざわざ危ない橋を渡る意味もない。

爆発によって巻き上げられた粉塵が収まるのを待つて、グリーフシードを回収してからまむらへ近寄った。

魔女の結界が崩壊する。

すると、目の前に巴さんに連れられた美樹とキュウベえを抱いた鹿目がいた。

しかも彼女たちは魔女の結界の内部にいたらしく、巴さんと美樹は魔法少女の衣装を身に纏っている。

「早く変身解いた方が良いですよ」

人の気配が少ない病院の駐輪場だからと言つて、誰かが来ないと言つわけでもない。今は偶々俺たちだけの姿しかないから良いモノの、誰かが来た時魔法少女の姿でいたら「コスプレです」という恥ずかしい言い訳をしなくてはいけない。

それがわかつているようで、すぐさま一人は変身を解いて見滝原中の制服へと戻る。ちなみにほむらは魔女の結界が崩壊する前にすでに変身を解いている。

「魔女はあなたたちが倒したようね」

見滝原中の制服に戻った巴さんが喋りかけてきた。

「ええ、今回の獲物はこれまでと訳が違つもの。あなたたちでは殺されるのがオチだつたわ」

「おいおい、本当のことだとしてもそんな挑発みたいなことを言つなよ。ほら、巴さんが睨んでくるじゃないか。フォローするために口を挟む。

「なんでしたら、このグリーフシードります？ 良かつたら差し上げますよ」

せむらには一応十分なグリーフシードの蓄えがあるため、これ一  
つぐらこ巴さんにあげたって問題ない。まあ、魔法少女にとつてグ  
リーフシードの貯蔵量は魔法の使用回数とイコールで結ばれるので、  
多ければ多いほど良いんだけど。

「遠慮しておくれ。あなたたちからの施しは受けたくないの」

巴さんの後ろで美樹がごめんと手を合わせているのが見える。  
別に巴さんの態度を気にする訳じゃない。あつ、いや、気にする  
べきか。このままじゃ、どうせひとつ巴さんを「チラ側に引き込むか  
悩む結果になつてしまつ。

巴さんの命を助けた結果こつになつてしまつたので、プラスマイナ  
スゼロといったところか。

「そうですか。それは残念です」

「」のグリーフシードで機嫌を直してくれたら最高だつたが仕方が  
ない。隣に立つ  
ほむらにグリーフシードをわいつと渡す。

「ああ、そうだ。もしも、何もかも嫌になつたら俺のところに来て  
ください。ここにいるキョウベえよりはあなたのチカラになれると  
思つますよ」

『酷いなあキリスト。僕だつてみんなのチカラになれるんだよ』

「との」とよ。心配してくれてありがと」

大きな溜め息を一つ。

「残念です……本当に残念ですよ。行こうつかせむり」

「ええ」

田さんたちに背を向けて俺たちは歩きだす。  
とりあえずはほむらのアパートで反省会とこつたといひだひつ。

#### 第44話 ただちよつと招待状をお届けしたいと思いましてね

昼休み。学校の屋上で俺は本来持つてくることが禁止されている携帯を手に、記憶の片隅からとある番号を引っ張り出して電話をかけていた。

プルルルル……プルルルル。なかなか相手が出ない。

「はあ……早く出でくんないかな」

空を見上げれば、今日も今日とて穏やかな青空。とてもではないが一週間後、この空が暗雲に覆われるとは思いたくない。

『.....』

どうやら電話が繋がったらしい。だが、相手は無言でこちらの様子を窺つていてるようだ。吐息だけが受話器から漏れ聞こえてくる。

「こんにちは、佐倉杏子さん」

『.....誰だテメエ』

「なに、しがない一般人ですよ」

今の状況では佐倉には見滝原にくる理由がなかつた。巴さんが死んでここから一帯の縄張りが空席になるわけでもなし、たまたまフライと立ち寄つている様子もない。

だったらこちから招くしかない。

『そのじがない一般人様とやらがアタシに何の用だい？ しょーも

ないことだつたらただじゃブチ殺すよ』

「おお、恐い恐い。ただちょっと招待状をお届けしたいと思いましてね。と言つても、電話という形ですが」

『招待状……？』

知らない番号からの通話。俺のことを疑うのは当たり前のことだ。

「ええ。とても大きな舞台会場があるのですが、あなたにはその舞台を彩る女優の一人になつて欲しいんですよ」

その巨体は他の魔女の追随を許さないほどの大引きだ。佐倉を除了いた三人だけでは役者不足なのだ。

『アタシは回りくどいのは嫌いだ。ハッキリ言えよ』

声からハッキリと殺氣立つていることがわかる。

俺つて一般人のつもりなのに、なんでこんなことがわかつちゃうんだろう……。

「ああ、すいません。怒らせるつもりはなかつたんですよ。つまりこうことです。およそ一週間後、ワルブルギスの夜が見滝原市に出現します。俺たちはあなたのチカラをお借りしたい」

『見滝原といえば、マニの奴の縄張りじやん。手が足りないならそつちに頼みな』

「いえ、巴さんも勘定に入れてもまだ足りないんですよ。他に新人の魔法少女も参戦させて合計3人の魔法少女でワルブルギスの夜に

戦いを挑むとしても、それでもまだ勝てそうもない。だから、魔法少女としての経験の長い佐倉杏子さんにお願いしているという状況なんですか？」

俺の言つたことをよく吟味しているのか、しばし佐倉は無言で考えていたようだが、三十秒ほどで口を開いた。

『信用なんねえな』

「どうしてですか？」

『そもそも何故、アンタはワルブルギスの夜が一週間後に出現するとかかる？ それに出出現位置まで特定してみてえじゃねーか。その根拠を提示してもらわないと、アタシはアンタを信用できねえ』

たしかにもつともな切り返しだ。

キュウベえを見習つてみたんだけどな。俺程度では相手が冷静な状態なら気がつかれるのは無理ないか。

『根拠はそうですね……秘密かな』

『ハアー！？』

『受話器の向こうから素っ頓狂な声が聞こえてきた。

「こんなこと言ひのも頼む側として情けないんですが、今この状況であなたに根拠を口頭で説明してもとてもではないですけど、理解してくれそうもありません」

俺は未来からきた。

そんなことを電話越しにまだ会つたことのない人から言われても信じる人はそうはないだろ？

「ですが、これではあなたは見滝原に興味が出てきたでしょう？ 今回お電話をせて頂いたのはそれが目的なんですよ」

『どうこうことだよ』

やや呆れた風な口調だ。

「あなたが少しでも興味を持つてくれて、それが見滝原に来る切っ掛けになつてくれればと思いまして。俺たちとしてはあなたという戦力が欲しくて欲しくて堪りませんので、少しでも可能性の底上げをと」

『……アンタ、喰えねえヤローだな。名前は？』

「向井キリストです。もし見滝原に来た際は俺のところに来て下さると助かります」

『まー、考えておいてやるよ』

『』でフツリッと通話が切断される。

『はあ……』

全身からチカラが抜け、その場にへたり込む。

想像以上に疲れた。もしもこれで佐倉が見滝原に来てくれなかつたら、マジで無駄な労力だ。そつはなつて欲しくはないところだが。

空を見上げて精神の回復を図つていると、ガチャリと屋上と校舎を繋ぐ扉が開く音がした。

無論のこと、俺の視線が自然と向けられる。

「はあ、はあ、はあ……。やつと見つけたよ、向井君」

全力疾走した後に息を荒げた鹿田だ。

俺は立ち上がりて鹿田が落ち着くまで少し待つて「応対する。

「どうかしたか？」

「向井君は知つてたの？ ソウルジムが魔法少女の魂だつてこと」

「ああ、知つてたよ」

「どうやら真実の一端に辿りついてしまつたらしい。幸いのは魔女のことをまだ知らないことだつて」

「だつたらなんで、さやかちゃんに契約を勧めたのつ！ そのせいでもさやかちゃんはあんなに悩んで……」

「なんで、つてそりや、美樹が恭介の身体を治したいと望んだからだぞ」

「こぐらさやかちゃんが望んだからつて、何の説明なしになんて酷いよつー。」

「そんなことを言われてもな……。

全ではお前を助けるため、とか言つたら鹿田はどんな反応をするのだろうか。そんなことしたらほむらに怒られてしまつのでするこ

とはないが、鹿田は自分がどれだけ守られているか一度知るべきだ。

「酷いか……まあ鹿田の視点ではそう映るかもしれないな」

「よせん、人間は見聞きしたことがその人の世界の全てなのだ。  
それを否定するのはちょっとばかしメンンドクサイ。」

「だがな、例え全てを代償にしても好きな人を助けたい。それが愛  
つてもんじやないのか。美樹はその果てに魔女と戦う宿命を背負つ  
た。人間のままでは、すぐに死んでしまうかもしれないが魂をソウ  
ルジュム化させれば死ににくくなる。それはある意味幸せなことじ  
やないか。その美樹の想いまでを鹿田は否定するのか？」

「……ツ」

口を噤む鹿田。お前はみんなに守られるお姫様らしくしていくく  
れ。じやじや馬姫じや、助けられるものも助けられなくなつちまう。

「まあ、美樹のことは俺に任せておいてくれ。一応、俺の責任だか  
らな」

じゃーな、と手を振り屋上を後にする。ちょうど昼休みの終わり  
を告げる子鈴が鳴り響いた。

てか、この調子じや巴さんもヤバいかもしけないな。といつあえず  
五時間目は遅刻するつもりで巴さんの教室を覗いておこう。

## 第45話 僕は身勝手で我が儘で強引なんだ

チラツと三年生の教室を覗き見たが巴さん姿はなかつた。

あの人は心が弱いところがある。だからその隙間を埋めてあげなければならぬ。そして、彼女には俺たちのチカラになつてもらわないとな。

と、その前に鹿目とした一方的な約束を守るために美樹の方を何とかしなければならない。

三年生が固まっている階層から自分の教室に戻る時に、ついでに美樹の教室を確認したが、ほむらと視線があつて「まどかに何したのよ……？」みたいなことを言われたような気がして速攻で逃げた。鹿目が絡んだ時のほむらは恐いのだ。ちなみに美樹の姿はなかつた。

「と詫うわけで、放課後遙々美樹の家にやつて来てはみたわけだけど……」

どうしようか。女の子の家のチャイムを鳴らす勇気がない。これは大問題だ。

ここまで来ておいてどうしようかと悩んでいたと、不意に一階のカーテンが開けられた。

「あつ……」

交差する視線。パジャマを着たあちらさんも俺と同じように唖然としている。

とりあえず手を上げて、ノリノリケーションを試みる。すると美樹は窓を開け、「ちょっと待つて」と言つてきた。

どうやつて美樹を呼び出そうかと悩んでいた俺は、これ幸いと待

つことにする。

五分ほど経つて、パジャマから動きやすそうな格好に着替えた美樹が玄関から出てきた。

「今日休んでたんだってな」

「……うん」

表情は暗い。まあ、真実とはいつも残酷なものだ。

これまで、美樹は何度となく真実の前に屈してきた。それを近くで見てきた俺は心苦しくて仕方がなかつたのだが、今回の美樹は乗り越えられるだろうか。それでも俺の前に出てくれたということはそこまで思い悩んでないと感じる。

「とりあえず公園でも行くか」

そのまま立ち話もなんだし、美樹の家にお邪魔させてもらひのも悪いし、近くにあるそこそこ大きな緑豊かで開放感がある公園に向かうこととした。

ベンチの端と端。まだ隣り合つて座るほど仲が良いわけでもないのと、人ひとり座れる隙間を空け座る。

「魔法少女になって後悔しているのか……？」

グダグダと機嫌を窺つても仕方がない。

「わかんない。でもね、こんなゾンビみたいな身体になっちゃったのは少し後悔してるかな。だって、こんな身体を恭介に抱きしめてなんて言えないよ……」

「それで今日学校を休んだのか。ちっぽけな悩みだな

その程度のことで悩むなんて元気印の美樹らしくないじゃないか。俺は、美樹がそんな悩みなんて吹き飛ばした未来を知っている。その姿がダブつて見えて仕方がない。

「ハハッ……ちっぽけな悩みか。たしかに魔法少女じゃない向井から見たらそういう映るかもしないね。でも、あたしは悩んでるんだ。そりや、恭介の身体を治せたのは嬉しいけど、あたしなんかがその隣にいて良いのかなって……」

俯き、ボソボソと言葉を吐き出す美樹。  
そんな彼女に俺は言つてやる。

「良いに決まつてるじゃん」

「えつ……？」

「美樹が恭介のことを好きなら何の問題もないじゃないか。お前のその首から提げられた魂はその程度のことで壘つちまつのか？」

美樹の首から提げられたソウルジエムはちゃんと穢れをグリーフシードに吸収させているようで綺麗な青色だ。

そうであるなら、あとは美樹の気持ちの問題だ。

「あたしの……魂」

美樹はソウルジエムを掬うように持ち上げ見つめる。

「俺の知り合いにさ、一人の魔法少女がいたんだよ

いきなり語り出した俺に美樹が視線を上げる。

「そいつはお前と回<sup>か</sup>じよつに好きな相手の夢が叶<sup>つ</sup>よつ<sup>キ</sup>ュウベ  
えに願つたんだ。そのくせ用量悪<sup>く</sup>てが、その好きな相手になか  
か告白<sup>きのうべ</sup>できないんだよ」

まあ俺のせいでもあつたんだけどな、と付け加える。

「それで、その子は好きな相手に告白<sup>きのうべ</sup>できたの？」

「いや、死んだよ。魔女に殺される前に、アイツ倒したら告白<sup>きのうべ</sup>する  
なんて言つたのが悪かつたんだろ<sup>う</sup>な」

あの時はそんな気持ちで戦<sup>たたか</sup>うんじゃなくて、戦<sup>たたか</sup>う前に告白<sup>きのうべ</sup>して幸  
せな気持ちで戦<sup>たたか</sup>うべきだつたんだ。

希望や幸福。そういうた善の気持ちが魔法少女にチカラを<sup>たま</sup>える。  
もちろん、告白<sup>きのうべ</sup>が成功する事前提だけど、あの時告白<sup>きのうべ</sup>したら絶  
対に一組のカップルが生まれていたと俺は確信してい<sup>る</sup>。

「……そんな。それじゃあ、その子は自分の想いを伝えられなかつ  
たんだね」

「ああ、だから俺はお前にはアイツみたいになつて欲しくないんだ  
よ」

俺の見通しの甘さのせいで死なせてしまった彼女。贖罪と<sup>しやくざい</sup>わ  
けではない。今もあの時と同じ気持ちだから。

「そんなわけだから、今度恭介に告白<sup>きのうべ</sup>せッ！」

「えつ！？」

いきなり過ぎたかもしない。だけど、そんなことは知らない。俺は俺の思った通りに、最善の選択肢だけを選んでいくんだ。

「でも、あたしの身体は 」

「気にするな。その身体は人間のモノだ。人間の身体に魂さえあるんだから、美樹は人間だよ」

例え魂をソウルジエム化させたとしても、その身体は人間のモノと変わりない。老いもするし怪我もする。

もつとも、魔法で老化を止めたりできるようだが、そこら辺は俺にはよくわからん。

とにかく、魔法少女だつて人間の身体なんだよ。

「告白する場所を決めたり、シナリオだつて考えてやつても良い。土壇場になつて緊張しても俺が時間を稼いでやる。とにかく俺は美樹に後悔して欲しくないんだよ」

ついでに遅刻しそうになつたら、ほむらに頼んで間に合わせるようになつても良いな。それだけ、俺は美樹と恭介の仲を応援している。

「あはは、向井は意外と強引だつたんだね」

「そうだよ。俺は身勝手で我が儘で強引なんだ」

そのせいで、ほむらには色々と背負わせてしまった。

だけど、そんな身勝手なところが美樹の役に立てるなら嬉しい。

「うん。いいよ。あたし、恭介に告白するよ」

その笑顔だ。やはり、美樹には笑顔が似合つよ。  
陽が沈み始め、オレンジ色に染まる公園で、俺たちは作戦会議を  
始めた。

## 第46話 巴さんが知らない眞実なんて沢山あります

も「心配いらない。

自らの家に向かつて去つていく美樹を見送りながら俺はそう思つた。

ただし少しその気持ちに正直になれなかつただけなのだ。身体がもう人間のモノじゃないと思いこんで、そんな自分が恭介の隣にいるのはおかしいつて、そういう風に美樹は感じていたのだ。本当は大好きなのに、抱きしめ合いたいのに、自分の気持ちをからに閉じ込めようとした。

だけれども、美樹はも「心配いらないのだ。

自分の気持ちに素直になつて想いを告げると言つた。あの笑顔に心配なんとしても仕方がない。

「だとすると、あとはあの人だけか」

すつかり陽が落ちて街灯の光が辺りを照らしている。早く帰らないと母親に怒られてしまつが、今となつてはそれさえも慣れたモノだ。繰り返すようになつて、門限破つた数は百を軽く超えているんだから。

そんなわけで、とある「デザイン性の高いマンション」にやつてきた。エレベーターの間の内容物が競り上がるような気持ち悪い感覚に堪えて、目的の部屋の前に着いてチャイムを鳴らす。

「じんにちは」

誰かが出たはずなのに反応がなかつたから挨拶をしておくと、「……少し待つてつてね」とか細い声が聞こえてきた。

そしてガチャリと鍵が開けられ、部屋の住人が姿を現す。

「もてなしはできないけど、入つて」

「お邪魔します」

俺を部屋に案内する田中さんの表情は暗い。いつも通りおしゃれな内装。だけれども、今日はどこか寂しく感じる。

俺たちは向かい合つように絨毯の上に腰を降ろした。

「あなたたちは知つてたのね」

「ええ」

「知つていたのに、美樹さんを巻き込んだ」

「ええ。必要なことでしたので」

美樹は単純な火力としては期待できないが、彼女の治癒魔法は味方の怪我を治したり、美樹自らが壁役となつて他の魔法少女の大技の準備のための時間稼ぎに最適だ。

「必要?」

「およそ一週間後、この見滝原にワルブルギスの夜が襲来します。俺とほむらの目的はヤツを倒す事だけなので」

「そつ、ワルブルギスの夜が……」

巴さんは窓の外の暗闇を見やる。ビームが心ここにありゅうと叫んだ様子だ。

「そんなに」自身の身体のことが気がかりですか？」

その問いに巴さんは首を振る。

「そういうわけではないの。もともと私は死ぬはずだったのに、こうしてキュウべえと契約を結んだことで生き長らえている。だから私は魔法少女になってしまったことを感謝しても後悔はしていないわ

何度も巴さんの口から聞いた、彼女が魔法少女になることになつたきっかけの交通事故を思い出す。

楽しいはずの家族でのドライブ。それなのに生き残つたのはキュウべえと契約した巴さんだけ。

きっと、あんなことを言つても巴さんは心の底で後悔しているだろ。なぜあの時、自分の身だけではなく、家族全員が助かることが願わなかつたのだろう、と。そのせいで他人とコミュニケーションを取ることを恐れて独りになつた。

「どうですか。それは良かつた

良いわけない。だが、俺の考えをそのまま伝えても巴さんの精神は壊れてしまう。それだけ彼女の心は脆かつた。

「でもね、それと同時に私は恐れているの

「何をですか？」

続けられたその言葉に俺は疑問を投げかける。

「今まで長いこと魔法少女として生きてきたけど、実はソウルジエムが魂が結晶化したモノだつたって昨日初めて知ったの。だからまだ私の知らないことがありそうで、何もかもが恐くなつた。本当に私たちは生きていていいのかなつて」

「ありますよ。巴さんが知らない真実なんて沢山あります。知りたいですか？」

おそらく俺とほむらは人類の仲で一番インキュベーターのことを知つているだろ？。俺みたいな冴えない男子中学生がNASAみたいな国家機関よりも宇宙の真実に近いなんて笑つてしまつ。

「遠慮しておくわ。君の表情を窺う限りでは気持ちの良い話つてわけでもなさそうだし」

「あなたの精神がほぼ確実に壊れます。はい。  
そんなことは言えるはずもない。」

「なんか今なら、あの時の君の言葉が理解できそうだわ」

「ん？ ああ、あの時のキュウベえよりも俺の方が巴さんのチカラになれるつてヤツですか」

一瞬、何のことかわからなかつたが、今回は巴さんとの接点が少なかつたのすぐに思い出せた。

「当り前じやないですか。俺と巴さんは人間なんですから、キュウベえなんかよりもわかり合えるんですよ」

だが、キュウベえは悪ではない。

俺たち人類には到底理解出来ない」とかもしないが、アイツらにもアイツらなりの正義があるのだ。俺はそれを否定してはいけないと思つ。

だけど、ほむらは敵意満々なんだけどさ。まあ、モノの捉え方は人それぞれだし、些末な問題でしかない。

「そうね……うん、私は人間なのよね」

「ええ、巴さんは人間ですよ。そこでお願いがあるんですけど……」

「うんうんと頷く巴さんを見て「これはいけると思つたので話を切り出せ」とある。

「ワルブルギスの夜のことね。それなら私も手伝つわ

「おお、話が早くて助かりますよ」

「たしか……向井君だつたかしら?」

「向井キリトです。びつてお好きに呼んで下さー」

「改めて自己紹介するわ。巴マリよ、よろしくね

互いに手を取り合い握手する。

これでも残りは佐倉が見滝原に来てくれるかだよな。まあ、それはアイツの気まぐれに賭けるしかない。

「ところで、もう九時だけど門限はないのかしら?」

田さんと言われ、壁時計に視線を動かすと、田さんのいつていた通り午後九時。これは完全に夕飯抜きが確定された。

「あはは……、まあなんとか大丈夫そうです」

帰りに自腹でコンビニ弁当を買えば問題ない。というわけで、俺たちにとつて良い話を持ち帰ることにした。

というか、話がトントン上手い方向に進み続けている気がする。とくに今まで以上に頑張ったわけでもないし、むしろ今までよりも頑張ってないかもしれない。なのにどうしてこんなに状況が良い方良い方に進んでいくのだろうか。

これは一度氣を引き締めておかないと駄目かもな。

## 第47話 ……つたく、そーいう腹積もりかつーの

「ハアアアツツ！！」

美樹は手に握るサーべルで自らに迫りくるツタをスパツと切り裂く。しかし切り裂いた傍から別のツタがやつて来てキリがない。

今美樹が戦つているのは、髪の毛がツタになつているという異形な姿の大型の魔女だ。まずは基礎的な経験を学ぶためにこうして一人で魔女と戦わせている。

「ほら、気を抜いては駄目よ」

ツタに拘束されそうになつた美樹を助けるようにマスクット銃から弾丸が放たれる。基本的に美樹の教育は巴さんが担当することになつてている。

それもこれも、ほむらと美樹の仲が微妙に悪いことが関係している。

少しば仲が縮まつたハズなんだけどな……。

思い出すのは一日前。美樹が恭介に一世一代の告白をした日のことだ。

ガチガチに緊張した美樹を見かねたほむらが、自分の想いを伝えることの大切さとやらを彼女に説いた。さすがは何度も経験している猛者は違うな。

で、あるハズなのに、一人の仲は一向に縮まつてくれない。その原因はほむらのコミュニケーション能力の欠如と言つても良いほどの不器用さなのは間違いない。

「はあ……」

戦っている美樹から視線を隣に立つほむらへと向ける。

「なにかしら?」

「なんでもないよ」

本当に不器用すぎだろ。もしも俺がいなければ、他の魔法少女三人をそろえることなんて出来そうにないぐらいい。

「なにか、失礼なこと考えているわね」

突きつけられる拳銃。

おお、恐いな。例え殺す気がなかつたとしても、そんな物を向かれたら、ひ弱な一般人である俺には恐怖の感情しか湧いてこないぞ。

「まあ、気にするな。別にほむらの信念をバカにしているわけじゃないよ」

「そり。なら、いいわ」

拳銃が下げられたことに一先ず安心する。

「で、ほむらから見て、今回の美樹はどうだ?」

視線を再び戦場へと戻し、歴代の美樹を知るほむらに意見を尋ねる。「そうね……間違いなく今までの彼女よりはチカラを手にしているわ。それだけ彼女の心は希望に満ち溢れているのね」

そうか。それなら良かつた。

「それは僕倖だな」

「ええ。あなたのおかげよ」

「俺の……？」

「あなたがいなければ、ここまで戦力を集めることはできなかつた。感謝しているわ」

その言葉に思わず俺は失笑する。

「オイオイ、まだ佐倉が来てないぞ。それなのに感謝されても困るんだが」

俺たちの目標は四人の魔法少女でワルブルギスの夜に立ち向かうこと。そこからがスタートだが、便宜上これを目標としているハズだ。

なのに、何故ほむらはそんなことを言うのだろうか。

「心配いらないわ」

ほむらのその言葉と同時に切り絵のような魔女の結界内に一人の風が走った。

「ほひ、佐倉杏子はちゃんとあそこにいるじゃない」

先ほどまで美樹が苦戦していた魔女をいつも容易く槍で切り刻む、紅いチャイナ服を西洋風にしたような服装を赤髪の少女の姿があつ

た。

美樹は啞然とし、巴さんは知り合いなので若干驚きながらもその姿を認めた。

佐倉は槍を担ぐと俺の方へと身体を向け言つ。

「アタシがわざわざ来てやつたのに、話が違つじゃんか

「何がですか?」

「ハイジだよハイジ」

槍の穂先で美樹を指す。

「なんで、こんな駆けだしのヒツ子みたいなヤツと、一緒に戦わなくちやいけないわけ?」

「え、えりこりこりよー。」

美樹が佐倉に歯みつぐ。まあ、あそこまで言われたら当つ前だけど。

なんとか巴さんが美樹を止めることで話が再開する。

「そうですか? ちゃんと新人の魔法少女もいるって伝えたと思うんですけどね」

「たしかに聞いた憶えはあるが、ここまで酷えとは聞いてねえぞ。仮にもワルフルギスの夜に挑むんだろ? こんなのがいたら、逆に足手まいになつちまいやしねえか?」

「ほり、そこはベテランの佐倉さんが美樹のことを指導してくれた

ら良いじゃないですか。それなら足手まとこなならいでしょ。」

「……つたく、そーいう腹積もりかつづーの」

俺が佐倉と交渉事の真似」とをしてくると、田中さんが会話に割つて入つてくる。

「待つてちょうどいい。もしかして、佐倉さんも今度の戦いに参加するのかしあへ。」

「あん？ なんだ、何も話してなかつたのか」

「佐倉さんが本当に見滝原に来てくれるかすら未定でしたからね。まあ、そういう事なので、田中さんはよろしくお願ひします」

「つーわけだ。短い間だけ、共闘とこいづむ」

「やうね。噂に聞くワルブルギスの夜は強力な存在だそうだしね。よろしくね、佐倉さん」

田中さんと佐倉が握手を交わし、共闘の意を表す。よかつたよかつた。

「え？ ちよ、もしかしてあたし置いてきまつー！？」

そんな美樹の叫びが聞こえるが、佐倉が味方に加わってくれたことは本当に良かつた事なのだ。

いまままで成しえなかつた異業とも言える今回の成果。あとは個々の美樹のレベルアップと、連携の練習のみだ。

「……私もいるのだけれど

うん、そうだ。俺には何も聞こえなかつたんだ。

俺の隣にはどこか寂しそうなほむらがいるわけがない。 そうに決まつている。

そんなこんなあり、最後のピースがそろつた。

それからは佐倉の美樹強化特訓という名の扱きが行なわれ、美樹も普通の魔女なら苦戦することもなく倒せるまでに成長した。

ところどころ惚気てくるものだからその度に佐倉がキレ、言い合いになつてケンカが始まるが、それもまた美樹のレベルアップの一環となつていて。それほどまでに愛のチカラは偉大だ。なんせ、美樹がギリギリとは言え、佐倉とともにやり合えるぐらい善戦出来ているのだから。

連携の方も割と何とかなつていて。

基本的には近接武器の一人が前衛となり使い魔を蹴散らし、後衛の残りの一人が最大火力で攻撃を加える。

一応そのつもりで連携を練習しているが、それだけでは予測不能の事態になつた時に困るので他の連携も色々と試している。

さて、俺たちの努力は報われてくれるんだろうか……？

## 第48話 向井君にだって家族がいるならわかるよね！？

努力はしてきた。それに見合つだけの実力や連携が魔法少女たちには身についたことだろう。

そして運も味方に出来た。これが一番大きかつたんじゃないかと俺は思っている。

俺の思惑通りにはいかなかつたものの、状況があれよあれよと良い方向に好転していった。それだけに恐かつた。これは運命が俺とほむらに諦めると囁いているんじゃないかと。

だから俺は、最後の不安を取り除くべく行動する。

鹿田さんは他人のことをわかつてあげられる優しい子なのよ。

黄色の魔法少女は言った。

うん。わかつてますよ。今まで俺が見てきた鹿田まどかという少女は、いつだって自分ではない誰かのために一生懸命頑張つていた。まどかはね。ホントにドジだけど、それに負けないよう努めできる子なんだ。

青色の魔法少女は言った。

それもわかつている。そんな彼女だから、俺とほむらは苦労することになつてている。だけど、そんな彼女でなければ、助けようつとほ思わなかつただろう。

鹿田まどか？ まー、アタシから見たらただのあまちゃんだねえ。

赤色の魔法少女は言った。

「の時間軸では、鹿田と佐倉の関係は薄い。だから「いついつ」と言葉になるのは必然である。」

まどかを頼むわ。

同じ時間を歩み続けた魔法少女は言った。

短い言葉。だけれども、その言葉には今までの想いが凝縮されている。今回失敗したら、きっとほむらは壊れてしまうんじゃないかなと思ひ。

\*\*\*\*\*

雲で覆われた一面の灰色の空。その光景がもうすぐワルブルギスの夜が見滝原市に襲来することを知らせてくれている。

準備は万全。もうやれる事がないぐらい色々と下準備を終えていた。

その過程で、美樹と佐倉との衝突などがあったのは良い思い出かもしれない。なんせ、これが最後の時間軸になるのだから、それぐらいあつてみんなが仲良くなっていた方が良いに決まっている。

「どこ行くんだ？」

避難場所として開放されている市立体育館から見知った顔の少女が飛び出してきたので声をかける。

「……向井君。お願いだからそこを通じて

「それだけは出来ないよ、鹿田。お前がここを通つて戦場へと進ま

せるわけにはいかない」「

ピンク色のツインテールが吹き荒れる風に揺れる。表情は真剣そのものだ。

いつだって、彼女は己を犠牲にしてしまう。俺を助けたあの時だって……。

だからここの通すわけにはいかない。

「どうして……どうしてなの向井君！　このままじゃ、みんな死んじゃう……！」

「そうならないように、みんな努力はしてきた。だから無力な俺たちは祈りながら待っているしかないんだよ」

「キュウベえから訊いたよ」

「何を？」

「今度の魔女は四人がチカラを合わせても勝てるかどうかもわからぬいぐらに強い魔女だつてっ！」

俺は視線を鹿田の後方へとズラし、キュウベえを見やる。余計なことを言つてくれやがつて、それほどまでに鹿田の感情エネルギーが欲しいのか？

それなら仕方がない。

「たしかに、俺自身も勝てるかどうか不安だよ

俺の弱氣ともとれる発言に鹿田の表情に一筋の光が差す。

「だつたら、わたしも契約して魔法少女になつて戦うつ！ それなら勝てるつてキュウべえは言つてたよ！」

まあ、勝てるだろ？ 何度か、鹿目が魔法少女となつてワルプルギスの夜を一撃で倒すところを俺は見ている。

「それだけは駄目だ」

鹿目まどかは日常の住人でなければならない。その対価としてほむらが非日常の中で生きると決意しているから。

その決意を踏みにじるようなことは、例え鹿目だつて俺は許さない。俺にとつて優先度が高いのはあくまでほむらなんだ。ほむらの了承が得られぬ限り、俺が鹿目に従うことはない。

「どうして！？ そうしないと見滝原に住む人たちが死んじゃうかもしれないんだよ！ 向井君にだつて家族がいるならわかるよね！？」

「家族ね……。最近は怒られてばっかだつたよ」

その原因は言わずもがな帰宅時間が遅いと言つ一点のみだけ。

「だけどな。俺たちには家族や見滝原に住まう人々よりも大切なことがあるんだよ」

「大切なこと……？」

「まあな」

鹿目まどかの運命を覆す。俺たちにとつては大勢の人間の命より、

お前の命の方が大切なんだ。

「まあ、いいか。そうだな、お前の田で見届けよう。契約するかはそれからでも遅くないだろ?」

もしも鹿田が契約することになつたら、俺が絶対に止めるだろつが、こうでも言わないと鹿田が納得してくれそうにもなかつた。それだけ鹿田は頑固者だということなんだけどな。

「え? う、うん……」

いきなり意見を変えた俺に驚きながらも鹿田は頷く。

「とつておきの観覧席に」招待つてな

とつうわけで、鹿田を戦いの現場を一望できるビルの屋上へと案内する。

そこからはサーベルを振るう美樹、槍で薙ぐ佐倉、マスケット銃を発砲する巴さん、そしてそれらの後方からグレネードランチャーを構えるほむらの姿がよく見えた。

いつの間にか最終決戦は始まつていたらしい。隣に立つ鹿田が唾を飲み込む音が聞こえた。

「本当にアレに介入できると思つてゐるのか?」

「うん。わたしならどんな願い事でも叶えられるつてキュウベえが言つてた

「おかしいな。キュウベえに騙されたといの前わめいてたのは誰だつたかな?」

「…………だけど、みんなが戦つてゐるのにわたしだけが何にもしないなんて堪えられない」

大人しくお姫様でいてくれれば、それが一番良いんだけどな。  
戦場へと視線を戻せば、戦況は押されつつもなんとか均衡を保つ  
ているようだ。だがそれもいつまで持つかはわからない。  
本当は解消してくれればいいのだけど、これは消耗戦になりそう  
だ。

「ほら見てみる。鹿目がいなくともなんとかなつてゐるだろ。もう少  
し様子を見ても大丈夫じゃないか？」

今はそれが精一杯の時間稼ぎ。

本当なら鹿目は俺の言葉なんて耳を貸さずにキュウベえと契約を  
結んでしまえば良い。もちろん、それを簡単に許すつもりはないが。

これは俺も新たな覚悟を決めないといけないかもしね。

## 第49話 だから……わたしが魔法少女にならなくちゃ

全ては順調だつた。

いくら超弩級魔女ワルブルギスの夜であろうとも、その身に宿る魔力には限界が存在しているハズだ。たとえ一撃が必殺に及ばない魔法少女たちの攻撃でも、ワルブルギスの夜の身体を削り、その傷を治すためにワルブルギスの夜は魔力を消費する。

先ほどから行なわれている戦闘はそういうしたものだ。

いつ終わるかもわからない精神状態の中、手持ちのグリーフシャードが消耗していく恐怖と鬪うしかない。

右手をズボンのポケットに突っ込む。

「……頼むから、『イツを使わなくちゃいけない状況にはならないでくれよ」

ボソッと呟いたので、鹿目には気づかれていないようだ。ただ、キュウベえには気付かれたらしく、ヤツと視線が交差した。

本当に嫌な時に現れてくれるよな。まあ、干渉はしてこないようだが。

「あつ、駄目！？ そ、そんな……」

鹿目が屋上のフェンスに縋りつぶつに叫ぶ。俺も戦場へと視線を戻すと、どうやら美樹がポ力をやらかしたらしい。

だがすぐさま佐倉がカバーに入り、事無きを得ている。

鹿目のホツとした溜め息が聴こえた。

「わたし、やっぱり戦うよー！」

俺の方に振り返つて、鹿目がそんなことをのたまつた。

「まだまだだろ。戦いは始まつたばかりだ」

「で、でも、向井君だつて今の見たでしょ！？」

今のは美樹がやらかしたポカのことだろう。だからあくまでも非情に返す。

「あんなのは予想通りだ。あのメンバーの中で一番経験の足りない美樹がポカをやらかすのは当たり前だ。それに、それを予想しているからあそこで佐倉がカバーに入つていけたんだ」

現在は美樹も態勢を整えて戦いに参加しているから大丈夫のハズだし。

「そ、そなんだけど……だけど、わたしがあそこに加われば状況は好転するんだよね？」

「まあ、キュウベえによるとそういうしな。俺からしたら新人の魔法少女があの場に行つても足手まといにしかならんと思つてるけど」

嘘だ。鹿目が契約して魔法少女になつた次の瞬間、ワルブルギスの夜は鹿目の一撃でいとも簡単に消滅するだろう。だけど、それではほむらの努力が報われない。

『酷いなあ、キリト。僕が他人を騙す行為に及んでいとでもいうのかい？』

「いや、お前が嘘をついている認識がないだけで、その実は勝てないかもしないじゃんか」

『たしかにその通りかもしれないね。まあ、僕から言えるのはワルブルギスの夜はまどかが魔法少女にならない限り倒せないということだよ。どうするまどか、僕と契約するかい?』

おそれらくキュウべえは俺たちの正体に気づいているんだろう。それでも、いつもと変わらない行動を取っている。

「えつ、あの……わたしは……」

俺が言った揺さぶりが効いているらしく、鹿田は言い淀む。  
そうだ。悩んで悩んで、結果的に契約なんて止めてしまえ。  
そのためには魔法少女たちが頑張つていかないといけないんだけど

ドゴオオオオオオオンツ！！

突如、ビルの屋上に何かが墜落したような轟音が鳴り響いた。立ち込める砂けむり、そしてその中心に居たのはほむらだつた。それに続くように周りのビルに他の三人の魔法少女が次々と打ち付けられる。

「はるひちやん！」

鹿目がほむらの元へと駆け付け、その身を抱き起こしている。  
俺はというと、ワルプルギスの夜に視線を向けていた。  
ウフフフ……という貴婦人のような笑い声。何度と聞いてきたワ  
ルプルギスの夜の笑い声。

今はそれが憎くてしようがない。

「どうして……どうしてこんなことになつていいの？…？」

叫ぶしかない。あれだけの下準備をして、さつきまで善戦していたのにどうしていきなりこんなことになるんだ！？

俺たちがワルブルギスの夜のことを測り違えていたとでもいうのか。それぐらいしか、こうなつた理由が浮かんでこなかつた。

『キリート。君に確認したいことがある』

俺の疑問を解消してくれたのはキュウベえだつた。

『君と暁美ほむらは時間遊行者だね？ 数多の平行世界を横断し、君たちが望む結末を求めてこの一ヶ月を繰り返してきた』

「それがどうした。そんなことお前は確認しなくても確信してるんだろうが」

おそらく俺のせいでそのことがキュウベえにバレてしまつたのだろうが、今はそれどころではない。

『もしかして、繰り返すたびにワルブルギスの夜は強力な魔女になつていつたんじゃないのか？』

言われてみて初めてその可能性に気づく。

初めて俺がワルブルギスの夜と対峙した時、ほむら一人でもなんとか戦えていた。だが、今回は四人で戦つているのだ。それなのにこんな状況になつてしまつている。

早く決断しなければならなかつた。

頭から血を流すほむらのことをそつと床に寝かせて、ひざに振り

向く鹿田の姿が田に映る。

「待つて……駄田よ、まどかあ……。あなたはキュウベえと契約してはいけないのツー？」

必死に身体を起し、しながりほむらは叫ぶが、鹿田は笑うばかりだ。

「「めんね、ほむらちやん。でも、戦えるのはわたしあらが残つてないんだよ。わたししか街のみんなを守ることができない。だから……わたしが魔法少女にならなくちや」

「おい、待て、止める……止めてくれ。  
これ以上、ほむらの心を傷つけないでくれ。

ガラスが割れる音がした。きっと、幻聴に違ひないが、確かに俺の耳には聴こえたんだ。

「待てよ、鹿田。頼むから待つてくれ」

「どうして？ 向井君は言つたよね、見届けだからでも遅くはないつて。たぶん、これ以上見届けてたら手遅れになっちゃうよ」

そんなこと言われなくともわかつてゐる。

「そうだな。だけど、鹿田が契約する必要はない」

だから俺は……

「契約するのは俺だ！　俺の願いを叶えてくれ、インキュベーター  
！！！」

俺以外の全ての人気が笑顔になれるように犠牲になろう。

## 第50話 なんともまあ、最高の結末じゃないか

「え？ そ、それはどうい……」

俺の宣言に鹿目が戸惑うのが視線を向けずともわかつた。  
まあ、それも当たり前のことだ。俺は少年であり、少女ではない。  
だから本来はキュウべえと契約できるハズがない。  
だけど、俺は契約する権利を持つていた。

『それは本気かい？ 僕としては全然構わないんだけど、キリトが契約して魔法使いになつたとしてもワルブルギスの夜に殺されるのがオチだと思うよ』

そんなことはわかつてゐる。いくら莫大な魔力を身に宿している俺だとしても、感情のエネルギー変換効率が悪い第一次成長期の少年である以上、契約して魔法使いになつたとしても、普通の魔法少女一人分の戦力にしかならない。

だけど、魔法少女は条理を覆す存在だ。それが同じ過程を踏んで契約した魔法使いに適用されないはずはない。

「だが、それは俺の願いによつて変わつてくるんじゃないのか？ 魔法少女の強さはその身に宿る魔力の総量だけじゃなく、契約の際に願つた希望により生まれた固有魔法によつても変わつてくる」

美樹が恭介の身体を治すことを願つて強力な治癒魔法を手にしたように、願いによつてはワルブルギスの夜に俺が勝つことのできる固有魔法を手にする可能性がある。

『確かにキリトの言う通りかもしれないね。だけど君に運命を変え

るほど願いをすることができるのかい？ そんなあやふやな可能性に縋るより、僕はまどかのチカラに頼った方が建設的だと思つた』

「そうだよ！ なんで向井君が契約できるのかとか、よくわからないうことがたくさんあるけど、わたしが戦うから！ それで街のみんなを守れるならわたしは良いんだよ？」

こんな時ここまで鹿目に契約させるように誘導するか。

鹿目の顔を窺うと真剣そのもの。あの表情は自らを犠牲にしたとしても他人を助けようとする顔だ。

「良くないよ。鹿目……お前が魔法少女になつたら悲しむ人がいるんだよ。なあ、ほむら」

「ほむらひりやん……？」

ここまで、何度も何十回も何百回も、いや、もつとそれ以上かもしれない。鹿目のためにこの一ヶ月を繰り返し続けてきたのはほむらなんだ。

詳しい事情を俺は知らない。だけど、その想いは本物だと知つている。

「ええ、私が……悲しむわ」

ほむらは必死に身体を起こす。

「平行世界のあなたと約束したの。残酷な運命からあなたを助けるつて……何度も繰り返してもあなたを救つてみせるつて

その瞳から涙を零しながら言葉を続ける。

「今まで騙しててごめんね。……私たちはまどかを救うために未来から来たんだよ」

『言いきつて、ほむらの身体からチカラが抜けたようで倒れそうになるが、鹿目が駆け寄つてほむらの身体を支えた。  
もうほむらの身体にはチカラが残されていないのかも知れない。ならば急がないとな。

「キュウベえ……いや、インキュベーター。お前たちの目的は宇宙の寿命の延ばすためのエネルギー回収なんだろう？ そしてそのため最高の魔法少女になれる素質を持った鹿目まどかと契約したいわけだ」

『いきなり何を言つてているんだい？』

『じゃあ、例えればの話だ。もしも俺の魔力がもつとも効率良くエネルギー変換できたとしたらどうだ？』

『鹿目まどかが生み出すエネルギーには及ばないかも知れないけど、たしかに魅力的な話だね。だがそれはあくまでも仮定の話でしか無いよ。君が……いや、まさかキリトの願いと言つのは……？』

『俺の願いは最初からたつた一つしかない。

この繰り返しから解き放たれること。色々と回り道をしてきたが、ようやくみんなが笑つて終われる道を見つけた。

『そうだ。俺が最高の魔法少女を生み出せば、お前たちインキュベーターは必要以上の人類への榨取を防ぐために鹿目まどかに手を出せなくなる』

だから希ねがつよ。

「「」の身に宿る全ての魔力を曉美ほむらに譲渡したい。それが俺の  
答えだッ！」

これでやつと終われる。きっとほむらならやつてくれるハズだ。

『君はそれがどういう願いなのか理解しているのか！？ 魔力を全  
て譲渡すると「」とは、君が感情を失うと「」ことと同義だ！』

「ああ、わかつてゐよ。良くて、廃人か植物人間。悪かつたら、き  
つと死ぬんだろうな」

後悔はしていない。

ほむらと過ごし続けたこの一ヶ月は楽しかった。きっとこの思い  
出は神様とやらがくれた最後のお土産なのかもしれない。  
身体から何かが抜け出していくような喪失感を感じる。この抜け出  
ていくのが魔力なのか。ここまできて初めて魔力を実感できた。

「あなたはなんていうことを！？」

「ん？ ほむらか」

俺から譲渡されている魔力でボロボロだった身体を治したのだろう。俺の胸倉を掴むように詰め寄ってきた。

「これで、お前は鹿目を護るチカラを手にし、俺は繰り返しから解  
き放たれる。そして、鹿目が契約する心配もなくなつた。なんとも  
まあ、最高の結末じゃないか」

「……冗談じゃないわ。これが……あなたの望んだ結末だつて言つたの？ あなたは生きたくないの？！」

「おいおい、泣くなよ。ほむらに涙は似合わないぞ」

別に死にたいわけではない。だけど、これが最良の選択だと思つたんだよ。

「鹿目。ほむらのことを頼んだぞ」

「…………」

何故か鹿目まで涙を流していた。

ああ、最後までほむらが鹿目のことを救おつとした理由がわからなかつたな。

「ほれ」

ズボンの右ポケットからとあるモノを取り出し、ほむらの目の前に出す。

「グリーフシード……？」

「そうだ。これからほむらにはワルブルギスの夜を救つてもらわなといといけないからな。お前の時間操作でワルブルギスの夜の時間を巻き戻してやれ。そして消耗した魔力を『コイツ』で回復つてな

ほむらの時間操作には対象の時間を巻き戻すという能力はない。時間を停止させるか、あの始まりの日に時間を戻すかの二つのチカラ

「ただけだ。

だけど、今のぼむらの身には俺の魔力が流れ込んでいる。俺の願いによって譲渡された魔力は、きっと俺の思惑を叶えてくれるだろう。

俺の中の魔力がほとんどなくなってきたようで足元がふらついてきた。

ぼむらを抱きしめることでなんとか誤魔化す。

「ありがとう。ぼむらと過ごした日々は楽しかったよ」

鹿田まどかを救うために試行錯誤し続けた日々。正確ではないがおそらくその日数は俺の年齢である14年以上のモノであることは間違いない。

その中での出会いと別れ。

泣いた日があった。笑った日もあった。本当にぼむらと出会いから毎日が充実していた。

「でも、あなたが……」

「気にするな。ぼむらは鹿田のことだけを考えて行動してれば良いんだ。俺のことなんて放つておいて行ってここうよ」

俺に出来るお膳立ては全てやったハズだ。

きつと成功すると俺は信じている。

俺は鹿田のために一生懸命になるぼむらが好きだったから。そんな彼女の隣にいれただけで満足している。

薄れゆく意識の中、俺はそんなことを思つた。

## 第50話 なんともまあ、最高の結末じゃないか（後書き）

実質的な最終話。

別にここで終わらせても良いかなーって思つけど、回収していない伏線やら裏設定やらがあるので、まだ続きます。

## 最終話（前書き）

最終話は分岐になつております。

完成度

› › ›

あの日から一ヶ月ほど時間が経った。

彼の言つた通り私の魔法によつてワルブルギスの夜を倒すことができ、それでようやくまどかの死の運命を覆すことができた。長かった……あまりにも長い時間、私はあの一ヶ月に囚われ続けていた。

「ほむりちやーん！」

まどかが私を呼ぶ声がする。あの日以来、まどかは私のことを気にかけてくれるようになつた。この時間軸では酷いことばかりしていた私に、彼女は笑顔で接してくれている。  
それもこれも全ては彼のおかげだろう。

「早く帰ろ。さやかちやんも『美ちやんも待つてるよ』

「すぐ行くわ」

机に入れていた教科書やノートをカバンにしまつて、まどかたちの元へと小走りで駆け寄る。

今日はクリスマスイヴ。放浪癖のある佐倉杏子も呼んで、みんな集まつて巴さんの家でさやかなクリスマスパーティー。

美樹さやかは彼氏がいるのだから、そつと楽しくやればいいのに、わざわざこのためだけに上条恭介との時間を一日ズラしたよつだ。

「ほむりちやん」

「なにかしら？」

「パーティー楽しみだねっ！」

まどかの満面の笑み。その笑顔が私を元気づけようとしているものだとわかる。

わかつているからこそ、私も笑顔で返す。

「ええ、今から楽しみだわ」

私なんかと友達になれて嬉しかったと言つてくれた、あの時まどかのよつた笑顔はまだできないけど、それでも今できる精一杯の笑顔。

彼の犠牲によつて手に入れたことのできた幸せな日常。それを感謝しないわけではないけれど、心のどこかで重荷になつていたことは間違ひなかつた。

\*\*\*\*\*

楽しかつたクリスマスパーティーが終わつたのは、夜十時のことだつた。

中学生だけでその時間まで騒いだのはあまりよろしくないことが、こんな日ぐらいは良いだろ。

私はパーティーが終わつた足で、病院を訪れていた。

もちろん、面会時間は終了しており、魔法少女としてのチカラをフルに活用した不法侵入だ。こういう時に私の時間操作の魔法はとても便利である。

ベッドに横たわる彼の頬をそっと撫でる。

表向きは、大災害の時に頭に強い衝撃を受けた結果による頭部遷延性意識障害。俗に植物人間と言われる重度の昏睡状態のことだ。だけど、その実態は私に全て魔力を譲渡したことによる精神の喪失らしい。キュウベえの言つたことなので信用はしていいけれど。

『本当にキリトにはしてやられたよ。彼のおかげで、もつとも手つ取り早い鹿田まどかからのエネルギー回収をするわけにはいかなくなつた』

『ここから湧いて出たのか、キュウベえがその姿を現す。それはいつものことなのでいまさら驚くことはない』

『それに最後の一撃の後、君が魔力を回復できるようにグリーフシードを一個残しておくなんて、キリトには恐れ入つたよ』

「当り前よ。彼は……向井キリトは私にとつてのキリストなんだから

私が歩み続けてきた時の終末を報せる救世主。

彼がいなければ、私の心はどうの昔に折れていったことだろう。私が繰り返し続けていたことで、平行世界の因果線が全て今の時間軸のまどかに繋がっているという事実を運命との戦いの最中に知つていたら、私は私を許せなかつた。

だけど、彼は私がそれを知る前にすべての準備を終え、私に運命と戦うチカラをくれた。

『キリストか……懐かしい敬称だね。暁美ほむら、その首から提げられたネックレスから推察するに、君はキリスト教の信者なのかい？』

「いえ、ミッション系の学校に通っていたことがあるだけだわ。あの頃はイエス様を信じてはいたけれど、今となつてはこの世に神も仏もないということを知つたわ」

私の首から提げられた十字のネックレスは彼の物だつた物。私が彼の両親に無理に頼みこみ、譲り受けた。

彼と私は一心同体。そういう意味を込めて彼の物だつたネックレスを身につけている。

『ははっ、たしかにこの世には神も仏もいないね。地球上で、そう呼ばれていた存在のほとんどは魔法少女だつたんだから。例えばそう、イエス・キリストとかね』

懐かしいなあ、と何かを思い出しているようにキュウベえ言つた。

『僕にはよくわからないけど、人類はつい最近まで男尊女卑の傾向があつた。もちろん、その逆もまた然りだけど、その期間を比べてみれば、男尊女卑の期間の方がずっと長かつた。だから事実は伝わるうちに書き代わり、今日の歴史では魔法少女の多くが男性とされてしまったよ』

「それがどうかしたかしら?」

『なに、ただの昔話だよ』

それなら私ではない誰かにして欲しい。

今は彼と私が過ごす時間だつたのに、割り込んできたのはキュウベえなのだから。

「何を期待しているのかはわからないけど、これだけは言っておくわ」

『なんだい？』

「私は絶望しない。例え、まどかや彼が死んだとしても、私は絶望なんてしないわ」

これは最高の魔法少女としての最後の抵抗。

私が絶望して魔女になってしまえば、この身に宿る魔力はエネルギーに変換させられインキュベーターに奪われてしまう。

私の魔力だけではなく、私の中に宿る彼の魔力まで……。

それだけは嫌だった。私を救ってくれた彼の想いは誰にも渡さない。

『そりや、それは残念だよ』

キュウベえはそう言つて姿を消した。

きっと私が死ぬのは人類が滅亡してインキュベーターが地球から離れ、私と彼の魂が誰にも奪われることなく、天に召されることになる時だ。

「頑張るよ、私……。どれだけ辛くても、どれだけ泣きたくなつても絶望だけはしない」

もう一度、彼の頬を撫でる。

今日はクリスマスイヴ……いや、壁時計を確認する限り日付変わってクリスマスになつたようだ。

「メリークリスマス……キリスト

私だけの救世主。

「そんな結末、私が許さないっ！」

消えかかった意識の中、ほむらが俺の身体を強く抱きしめ叫んだ。すると、抜け出ていったはずの俺の魔力が身体に戻る感覺が訪れた。それもほんの少しだけ。

「あなたの時間を戻したわ。私が拘束し、あなたを苦しめてしまったその時間を」

「どう、いつ……」とだ？

俺は死んでも良いくらいの覚悟でほむらに全ての魔力を譲渡したのに、なんで俺の身体にほんの少しだけとはいえ魔力が戻ってきている。

ほむらは抱きしめていた腕のチカラを緩め、俺と彼女の視線が交差する。

「魔法少女は条理を覆す存在よ。どんな不条理だつて、どこかの誰かさんのおかげで最高の魔法少女になった私に成し遂げられないわけないじゃない」

「ふつ……、そつか」

俺はアレが最高の結末だと思ったけど、主演女優様は俺がお膳立てた舞台で踊ることを拒否しますか。それも俺が考えつかなかつた方法で開演中に無理矢理物語を改変してしまつとは、さすがほむらだよ。

だったら、最後ぐらい俺が脚本通りに舞台で踊つてくれよ。

「せつねど、止つむじこよ。そして全てが終わつたら祝勝会でもやうひや

「ええ、下準備は任せて良いかしり？」

「任せろ。」う見えて下働きの経験かなり長いんだぜ」

「知ってるわ。ずっと一緒にいたもの」

俺たちは笑い合つてから身体を離し、視線を超弩級魔女ワルプルギスの夜へと向ける。

「デカイな……」

「ええ」

「とてもなく高い壁だったな……」

「ええ」

でも、終わってくれる。

長が、力巻たむの、一月は織れりを告げ、二月がサニテーくる。

「私たちの長かつた旅を終わらせてくるわ」

「ああ、行つて来い」

ほむらがワルブルギスの夜の元へと駆ける。すべてを終わらせるために。

時間停止の魔法でも使つたのだろうか、次の瞬間にはほむらの姿は逆さになつたワルブルギスの夜の顔の前にあつた。

ガチリツ

聴きなれた時間軸を移動する音。だけれども、今回は平行世界に旅立つことはない。

ガチリ、ガチリ、ガチリツ

その音は際限なく鳴り続ける。

さて、ほむらが一度に戻せる時間は一ヶ月分。ワルブルギスの夜はいつたいどれほどの時間を生きてきたのだろうか？

ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリツ

ドレスを着た貴婦人の顔が苦痛に歪む。

ほむらの時間操作の魔法に抵抗しようと、使い魔を生み出す。だが、その使い魔は生み出された瞬間に存在の時間が巻き戻され、最初から生み出されなかつたことにされる。

ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリ、ガチリツ

どれだけの時間が経つたのかわからない。だけれども、しだいに超弩級魔女と称されていた巨体は徐々に収縮し始めた。

まるでその存在を無理矢理産まれる前の卵の形に戻す様に、小さく小さく。

「ほむらちやんはスゴイね」

気づけば、鹿田が俺の隣に立つて、一人戦つほむらのことを見守つていた。

「ああ、ほむらはスゴイぞ。鹿田、お前のために何百……いや、もしかしたら何千と時を繰り返してきたんだからな」

「わたしのために、そんなに……」

「お前は幸せモノだよ……鹿田。だから、改めて言つよ。ほむらと友達になつてくれな」

すでにワルプルギスの夜は面影すら残つておらず、直径一メートルほどの大きなグリーフシードへとその姿を変貌させていた。

だが、このままではすぐに孵化してしまいそうなぐらいに、ワルプルギスの夜のグリーフシードは穢れきつている。

だから、ほむらは時間を巻き戻し続ける。

「うん。わたしはほむらちやんの頑張りを知らない。だけど、ほむらちやんが本当に一生懸命にわたしのために頑張つてくれていたのは伝わつてきたよ」

「そりが……それなら良いんだ」

そして大きな大きなグリーフシードは一粒の普通の卵と同じくらいの大きさになつた。ここからではそれが小さすぎて上手く確認出

来ない。

ほむらはそれを手に取り、こうりくと戻つてくる。

「 もうひと、向井君もわたしの友達になつてくれるよね？」

「えつ？」

ほむらのことを視線で追つていたので上手く理解出来なかつた。思わず、鹿田の顔を見てしまつ。

「俺と友達……？」

「うん。向井君もわたしのために頑張つてくれたんだよね？」

「えつと、まあ……一応な」

別に俺は鹿田のためではなく、ほむらのために頑張つていたんだけどな。結果的には変わらないけど。

「いいじゃない。まどかの友達になつてあげれど」

俺が答えあぐねていると、背後からほむらの声が聴こえてきた。

「まあ……うん、そうだな。これからよろしくな」

「これからよろしくね、向井君っ！」

鹿田と友達か……。

今まで仮の友達になつた時もあつたけど、本当の友達になるのは初めてだ。

「あつ、セウニス、ワルブルギスの夜のグリーフシードがどうなつたんだ？」

「これよ」

ほむらがその手に持つた物を見せてくれた。

「キレイ……」

思わず鹿田が声をあげた。  
確かに綺麗だ。だが、おかしかった。

「これはソウルジムだよな？」

紫色の輝きを放つソウルジム。奇しくもほむらの藍色のソウルジムと色合いが似ていた。

「やつよ。この状態ならもうワルブルギスの夜が孵化することはないわ」

「それなら良かつた。じゃあ、早く傷ついた魔法少女たちを回収しないとな。これ以上放つておいたら死んでしまうやうだしな」

「あつ、やうだ！ みんながつ！」

俺の発言で鹿田は彼女たちのことを思い出したらしく。どうしようどうしよう、と慌てますが、俺としてはそれほど気にていなかつた。

「へいじで、ほむり。あとは頼んだ。一分一秒も勿体無いからな  
ほむらの時間操作があればまったく問題ないのだ。  
さすがに死者を生き返らせることが出来ないと想ひナビ、生きて  
いれば時間を巻き戻して治癒させる」とべりこは楽勝で出来るだろ  
う。

「ふふ、少し待つて」

そう言つてほむらの姿が消える。

それを見て俺は再度想つのだ。

やつと今日が終わったんだな。

朝、窓から差し込む朝日が眩しい。時折、少し開いた窓から優しい風が吹き込んでくる。

「うんん……？」

俺が寝るときは窓もカーテンも閉め切つているハズなのに、どうしてだ？

意識が覚醒したばかりで目を開けるのが億劫だ。

「……え？ なんで？」

はつ、と今の状態のおかしさに気がついて目を開け、ベッドの上で身体を起こす。視線の先には見慣れた光景というか、見慣れた少女が泣きそうな顔でこちらを見ていた。

「まさか失敗したのか？」

この身に宿る魔力を全てほむらにあげたのにも関わらず、それでもまだワルブルギスの夜に届かなかつたとでも言つのか。俺の頭は混乱していた。

俺の問いかけにほむらは目尻に溜めに溜めていた涙を零し、ベッドにダイブしてきて俺に抱きついてきた。

「……あなたに会いたかった」

わんわん泣きだしたので、またこうして繰り返している事情を訊くわけにもいかず、ただただ彼女の撫でるしか出来なかつた。

しばりべ撫でつづけていると落ち着いてくれたようだ。

「もしかして、ワルブルギスの夜を倒せなかつたのか？」

「いいえ、倒せたわ。あなたが言つた通りの方法で」

「じゃあ、どうしてまた繰り返しているんだ？ あれを倒して鹿目  
の運命を変えることが、ほむらの願いだつたんじゃないのか？」

鹿目のためなら非情になつて何でも切り捨てられる。それがほむ  
らの強さの一つだつたハズだ。

なのにどうして、今はこんなにも弱々しい少女のよつこなつてし  
まつてゐるんだ。

「そうよ。あの時の私の願いはまどかを救つことだつた」

「だつた……？」

「思い出したの……何もかも。まどかを助けてから、ようやく私は  
自分がキュウべえに祈つた本当の願いを思い出したの」

長いことほむらと共に行動してきた俺だが、彼女が魔法少女とな  
ることになつた契約の内容を聞いたことがなかつた。

だから勝手に『鹿目まどかを救う』と思つてきたのだが、ほむら  
のこの様子を見る限り、そうではないらしい。

「私が願つたのは、出会いをやり直すこと。あの時は初めて立ち会  
うまどかの死に気が動転して、それだけを必死に願つた。人に迷惑  
をかけてばかりだつた私のことを友達だつて言つてくれたまどかに  
もう一度会いたかつたの」

「友達って、一緒にいるだけでも楽しいもんな」

恭介のことと思いで出す。

アイツが交通事故で入院するまでは一緒にバカやつてよく怒られたもんだ。片や将来有望のヴァイオリニスト、片や一般家庭で育つた普通の少年。理不尽に感じたこともあつたが、そんなのは一緒に遊んで笑い合えば……あれ?

「なんで思い出せないんだ……？　楽しいことがいっぱいあつたハズなのに、なんで一つも思い出せないんだ！？」

しつかりと思い出せるのは繰り返し続けている一ヶ月の日々の記憶だけ。

始まりの今日といつ日から前の記憶は全ておぼろげにしか思い出しきれない。

頭を抱えて必死に思い出をうつしする俺を、ほむらは優しく抱きしめてくれた。

「『』めんなさい。それは私のせいなの」

「どうこう、ことだ？」

なにがなんだかわからなくなつて頭がこんがらがつているが、自分でせいだといつほむらに問いかける。

「全ではこれがあなたの下にあつたのが、全ての始まりだったの」

やつ言つて、ほむらが見せてくれたのは、いつも俺が身につけている両親が買つてくれたハズの十字のネックレス。

「ありがとう。大事にしてくれてたんだね、キリトくん」

その瞬間、全てが俺の頭の中で繋がった。

「ほむらちゃん……なのか？」

あのわけのわからなかつた自分の過去の夢。  
あの夢こそが俺の本来の記憶。

「あの頃は入院するほど病弱じゃなかつたけれど、それでも私は普通の子たちと一緒に駆けまわつて遊べなかつた。そんな時にキリト君は一緒に遊ぼうつて言つてくれた。それが嬉しくてしょうがなかつた」

確かにそうだ。小さい頃のほむらはいつも室内で一人遊びをしていた。だから俺はそんな彼女に話しかけたんだ。

「だけど、キリトくんが引越ししちゃうことになつて、その時にこのネックレスをあげたんだよね」

確かに父親の仕事の都合。引越しの理由はそんなありふれたものだつたハズだ。

「私がキユウベえが願つたのは出会いをやり直すこと。きっと願いが、このネックレスを中継してキリトくんにも影響しちゃつたんだと思つの」

「めんなさい、とほむらは謝つてから、彼女の推測を話してくれた。

ほむらの願いは出会いをやり直すこと。その願いをする時は鹿田のことを思つて、友達とのもう一度再開することを望んだ。

だから友達であった俺が、その願いに引き寄せられるよつてこの見滝原市へと強制的に連れてこられた。あたかも始めからこの街に住んでいたかのように記憶操作までされて。そしてその中継地点となつたのが十字のネックレスというわけだ。

「気にするな。俺はほむらとまた会えて嬉しいよ」

彼女の推測を聞いたが、俺は怒る気にはなれなかつた。

「たしかに仲良かつたヤツもいたけど、それよりもほむらといふ方が俺は好きだよ」

それだけこの繰り返しが濃密で、俺にとつてそれだけでほむらを選ぶ理由になつた。

「だからさ、一人で鹿田を救う方法を探そうか。もちろん、俺は犠牲になんてならないぞ。俺はほむらと一緒にいることを選んだからさ」

時間が巻き戻されているということは、俺がキュウべえに願つたほむらへの魔力譲渡はなかつたことにされていることだろう。

アレ以外のみんなが笑つて終われる方法なんて今の俺には思いつかないが、それも一人で試行錯誤しながらやっていけば何とかなる気がした。

俺が手を差し出すと、ほむらがその手を握つてくれた。

「うんっ！」

まだまだ俺たちの時間逆行の旅は続く。  
どれだけ辛くても、どれだけ挫折したくなつても、一人でなら乗り越えていけると信じて進み続ける。

三人で笑い合える結末を望んで。

やつと終わりました。

後書きの話題は気分で変えていきます。

といつことで、まずは反省点から。

### 反省点

- ・後半のグダグダ感に伴うマンネリ化  
完結を急ぐために描写が適當すぎたため。

### 原作設定無視

ほむらの時間遡行の能力のこと。

原作では、砂時計の上部から砂がなくなつた時点で時間を一ヶ月前まで逆行させる「時間遡行」しかできないという制限あるのに、本作ではバリバリ一ヶ月の途中で時間遡行させてしました。

これは『おりこマギカ』一巻のラストの時間遡行のシーンを見てもらえば、私の勘違いにも納得してもらえるかと思う。

### 大量の誤字脱字

単純に投稿前の見直しをしていないから。

### 主人公の一人称にこだわり過ぎた

閑話などで原作キャラたちの心理描写を入れた方が物語として深みが出た。

というわけで、反省点でした。

他にも細かい反省点はたくさんあるのですが、省略させて頂きま  
す。

もしなにか、この他に悪い点があつたり、アドバイスを『教授して頂ける方は気軽に感想で書きこんで頂けると嬉しいです。

## 「」の作品のコンセプト

「」の作品はもともと、『ビビ・ギャのとある独自解釈をみなさんで伝えたくて書き始めました。

おそらく私の活動報告を遡つていくとあると思いますが、その独自解釈とは『ワルブルギスの夜はほむらの魔女化した姿なんじゃね?』というものです。

本作品上では、そのような設定になつております。

いくつか根拠はあるんですよ。まあ、根拠書き並べるのだるいんで省略しますけど(笑)

しかし、上のようなコンセプトで書き始めたは良いけど、結局ただの主人公が成長していくだけの作品になりましたね。

まあ、チートを駆使してバトルしまくっている作品よりは上手くいつたんじゃないかと。

## 似ている(と勝手に自己判断した)作品

ひむ様が書かれている『魔法少女まどか マギカ -Deus ex machine-』と展開やらなんやらが被りそうで恐かつたです。自分ではなんとか緊急回避できたと思っております。いつかのあとがきでも言いましたが、これは事故なんです。

一応、投稿開始は私の方が早かつたんですが、ひむ様の方が投稿スピードが速くてですね、それでえつと……ごめんなさい。

たしか、ひむ様の作品を読んだのが七月の最後だったかな? もう伏線を張つたりして後には引けない状況だったんです!

……とだけ言つておきます。

たぶん、本作を読んでいる方はひむ様の作品も読んでいるかと思  
いますが、『魔法少女まどか マギカ -D e u s e x m a c  
h i n e -』面白いですよ！ とも言つておきます。

そしてひむ様。お伺いも立てずに名前勝手に出して下さいません。  
読んで頂けているかはわかりませんが、とりあえず宣伝させて頂い  
たのでそれでご容赦頂けると助かります。

ふう……助かつたか？

最終話について

アレです。何故かF a t e っぽい言葉を出してみようとして失敗しま  
した。  
個々の説明をさせて頂きます。

原作っぽい終わり方と、ついでにキリスト教をモチーフに書いて  
みた。そして謝らせて下さい。

『キリスト教信者の方々大変申し訳ありませんでした』  
いや、なんか書いてたらイエスキリストが魔法少女つてことにな  
つてたんですよ。そんなつもり無かつたんですけど、なんでしょう  
うかね？

ハッピーエンドを目指して書いてみた。

でも、失敗した。やはり私にはハッピーエンドは書けないようだ。  
ちなみに、ワルブルギスの夜が紫色のソウルジェムになつていま  
したが、ちなみに原作でのほむらのソウルジェムの紫色です。

ようするに、『ワルブルギスの夜はほむらの魔女化した姿なんじやね?』の残りカスです。

とにかく私が好きなラストを書いてみたかった。

基本的に、私はその後を想像出来る終わり方が好きです。だから、私の作品（非公開も併せて）はいつもこんな終わり方になってしまふんでしょうね。

本作上では描かれなかつた裏設定

- ・主人公が繰り返している始まりの日は、実のところほむらの始まりの日よりも一日遅い。
- ・たぶん描けなかつたのはこれだけだと思います。どうでも良い情報か。

ちなみに、『ワルブルギスの夜』ほむらの魔女化した姿』は何人か気づいていたと思うので、描かれなかつた裏設定には入りません。こつちのほうがどうでも良いか。

最後に

色々と書いてきましたが、たぶん最低限私が言いたいのはこれぐらいかと思います。

本作は大変稚拙な文字の羅列だったでしょうが、それでも最後までお付き合いいただき感謝しております。

とくに後半の描写の適当さ加減といったら、自分で読んでみて嫌になつてきますが、それでも完結出来て嬉しいです。

また、よろしければお気に入り登録は解除しないでそのままで…  
…そして読み切ったという証に評価なんてしてみてはどうでしょうか。  
きっと、私が喜びます。

最後までお付き合い頂きありがとうございました。

マリヤマジ天使過ぎて悲しくなるね。

また違う未来 第一話（前書き）

第三十七話からの分岐です。

## また違う未来 第一話

時間は、少年が地球外生命体インキュベーターに契約を持ちかけられる時まで遡る。

これはありえた未来と、ありえたかもしれない未来とは、また違う未来。

少年がチカラを望んだ時、結末はどのように変わるのだろうか…。

⋮。

\*\*\*\*\*

その日、時間遡行者暁美ほむらは、言葉で表現出来ないような大切なにかが欠けたような不安感に襲われていた。

何度も繰り返してきた一ヶ月。いつもと変わらず時間遡行に成功したハズであるのに、何かが足りない……。ほむらはそれを首を勢いよく振ることで無理矢理抑え込んだ。

ほむらの目的はただ一つ。鹿田まどかを救うこと。それさえ叶うのならば、例え自らが犠牲になつたとしても、ほむらには些末なことでしか無いのだ。

転入初日。朝のHRの時間に自己紹介をする。普通に生活している人ならば、何度も同じ転入という経験をすることはそうそうないが、ほむらは何百回と経験してきた。だから自己紹介の内容も自然と少なくなつてきて、今となつては自らの名前と最低限のことぐらいいしか話す事はない。

教室を見渡す。見慣れた光景。見慣れたクラスメイト。そして、鹿田まどかの姿。彼女はほむらと視線が合うと驚いた風に身体を硬

直させる。それを見たほむらは表情に出でないこゝろに心の中で微笑みを浮かべた。

「この時間軸のまどかは、ほむらが知っているまどかと何う変わりない。その事実だけで、ほむらは嬉しさが込み上げるのだ。

その後、まどかにキュウベえと契約しないように遠回しな表現で忠告したほむらは、その姿をショッピングモールの一画に移していった。そのフロアは更なる利益を求めたショッピングモール側の意向で改装中であり、人の気配はない。

そんな空間でほむらは拳銃片手に、全ての根源であるインキュベーターを追いかけていた。

パンツ、パンツ、パンツ。インキュベーターに向けて何度も発砲するも、その小柄な体躯のせいで上手く照準が合わず当たってくれない。

早くしなければまどかが来てしまつ……。ほむらは焦り、周囲の被害を考え櫛から小動物を殺せる程度の火薬が詰まつた爆弾を取り出し、インキュベーター目掛け投げつける。

爆発はほむらの狙い通りインキュベーターを襲つたが、その時の爆風が床に溜まつていたホコリを巻き上げ、結果的には彼女の視界を遮ることになり、ほむらはインキュベーターの姿を見失つてしまつた。

ようやくほむらがインキュベーターの姿を見つけた時、その姿はまどかと共にあつた。傷ついたインキュベーターをまどかが抱き上げ介抱している。

その光景に舌打ちしてから、ほむらはその舞台に上がつた。

結果から言えれば、最悪の一言だつた。

まどかとインキュベーターの接触を許してしまつたし、そこには田

マミや美樹さやかの介入があつたのが悪かつた。

これでまた、障害が増えてしまった。

ただ、友達のまどかを救いたいだけなのに、どうして運命とやらはここまでほむらの邪魔をするのだろうか。

運命と戦う一人の少女は、自分を騙しながらも、そのたつた一つの想いに向かつて突き進むしかない。

そんな魔女と戦い続ける日々を送っていたほむらに転機が訪れたのは、マミに拘束魔法で動きを封じられてしまった時のことだ。このままでは、まどかの目の前でマミが死ぬところを見せてしまう。マミが死ぬのは良い。だが、その光景を目の当たりにしたまどかが悲しむことは避けたかった。

だけれども、今のほむらは身体の自由を奪われ、櫛から道具を取り出すことができないし、仮に時間を停止させたとしても身動きできない状態では意味がない。まさに手も足も出ない状況である。

### シャリンッ

拘束された状態で顔を俯かせ、自分の失敗を嘆いていたほむらの耳に鈴の音が聴こえてきた。新手の魔女や使い魔の可能性があるので、すぐさま鈴の音が聴こえてきた方を確認する。

「助けはいるか？」

ほむらの視界に飛び込んできたのは巫女装束を身に纏つた一人の少女。ホコリ一つ付着していない純白の白衣、胸の下辺りから緋色の袴が少女の長い黒髪に良く似合う。その長い黒髪は鈴の付いた髪留めで留められており、時折シャーランと鈴の音を鳴らす。

しかし、少女の胸元には巫女装束には似合わないロザリオのような十字のネックレス。それがなければ、どこの神社に届そうな巫女だつた。

ほむらはいきなり現れた巫女装束の少女に警戒しながらも、助け

を求める」とでマミの死をまどかに見せずには済むかもしれない……  
そう考えた。

「やうね。できればお願ひしたいところだわ

「ん、わかった

少女は召喚魔法で日本刀を呼び出すと、ほむらを拘束していた魔法を容易く斬り裂いた。魔法少女として経験の長いマミの使った魔法であるハズなのに、いつも容易く斬り裂いたのだ。

ほむらは内心驚きつつも、先を急ぐことを少女に告げる」とこと言ひた。

「感謝するわ。でも、今は時間がないの。お礼はまた今度にさせて頂くわ

「ああ、お礼なんて別にしなくて良さよ。俺は自分のやりたいことをしただけだしさ

「いえ、受けた恩は必ず返すわ。それじゃ

ほむらは駆けだす。しかも時間停止の魔法を使いながらなので、傍から見ればテレビの見える。

その場に残された少女はほむらの背中が見えなくなるまで見届けると、そつと溜め息を吐いた。

「やば、憶えてないか……

少女 向井キリトは、その事実に落胆した。だけれどもキリトやるべきことは一つしかない。

ほむらにまどかを救わせる……そのためだけにキリトは魔法少女になつたのだから。

## また違う未来 第一話（後書き）

お気に入り登録を継続して頂いている皆様お久しぶりです。  
お気に入り登録を解除して下さった皆様をよつなう。もしもまた読  
んでくれていたら嬉しいです。

とりあえず帰つてまいりました。

本当は文字数関係無く最後まで書いたモノを投稿したかったのですが、時間がないことに気がつき、またダラダラと投稿したいと思いまます。と言つても、物語はかなり流す予定ですので、続けて五話くらいかな?

たぶん三話ぐらいで終わると自分では予想しているのですが。  
投稿頻度としては週一を予定しています。

そして書いて思つた。

巫女装束+ロザリオ。どつかで憶えはないですか?  
私にはバリバリあります。書き上がってから気がつきました。まあ、いいやの精神で投稿することにしましたわ。

それでは、最後までお付き合いで下さると幸いです。

### 追記

そういえば三人称で書いてみました。

おかしなところがあれば教えて下さると嬉しいです。

思ったよりも代償が大きかった。

キリトはほむらが戦いへと進んでいった方向をボーッと眺めながら、心を痛めていた。

魔法少女となつたキリトならば、鹿田まどかを救うことなど造作もないだろう。そのためにチカラを手にしたことをキリトは後悔などしていない。だけれども代償が大き過ぎたのだ。

『まさか君が見滝原にやつて来るとはね。ちょっと意外だな』

魔女の結界の中であるから異質なことは当り前なのだが、キリトの脳内にまるでロボットに言葉を喋らせたような感情の灯らない声が響いた。

特にその声に驚く」ともなく、キリトは自然に応対する。

「なんだキュウべえか」

キリトが視線を下げるど、そこにはウサギの様な猫との様な白い小動物が居た。

そいつの名前はキュウべえ。彼と契約することで魔法少女へとなることができる。

『まったく、イレギュラーは曉美ほむら一人で良いというのに、どうしてキリトまで見滝原に来ちゃうのかな？ これ以上、僕が思い描いたシナリオから脱線したくないのに』

「それは悪かったな」

『本当だよ。僕が契約した記憶のない魔法少女なんて、一人ですら持て余してた言うのにな。だけど、暁美ほむら以上に不可解な存在が現れたとなつては警戒せざるを得ないかな』

キュウベえはキリトと契約したこと憶えていない。しかし、キュウベえはそのことに違和感を持ったりはしない。それは数千年と、いう長い時間、人類と関わってきたキュウベえの前には、時折、彼女たちは現れるのだ。

キュウベえの認識外の魔法少女。彼女たちはその強い想いの結晶である願いによって、孵化者であるキュウベえの認識の外に出ることに成功した。だからキュウベえは彼女たちとの契約を憶えていないのだ。

ほむらは平行世界の過去に戻ることによって、そしてキリトはチカラを望んだ結果として。

だが、誤解してはいけない。キュウベえにとつて契約していないことを憶えていなかつたとしても、彼女たちが魔女へと変貌を遂げることにより感情工ネルギーを榨取出来る。だから、キュウベえにとつてはさほど気にすることでもない。所詮は乾いた宇宙を潤すための人材でしかないのだから。

「この街にワルブルギスの夜がやつて来る」

変えようのない確定された未来。今この状況でキュウベえに伝える必要などまったく無いが、キリトは少し考えてから言つことにした。

『ほう、それはそれは。なかなかに興味深い情報じゃないか。それを僕に教えてしまつても良かつたのかい?』

「別にかまわない。どうせ、近い未来キュウベえも気づくことだ」

『たしかにね。本当にフルプルギスのような超弩級魔女が見滝原に現れるとしたら、僕はその予兆にいち早く気づくことになるだろうね』

「まあ、シナリオとやらに修正でも加えておくと良い。これが俺がキュウべえに送る最初で最後の感謝の印だ」

時間の繰り返しに巻き込まれた根本的な原因はキュウべえなのかもしれない。だけれどもキュウべえ いや、インキュベーターがこの地球にやつて来なければ、今も人類は狩猟生活を営んでいたといつ。

それに繰り返しに巻き込まれたと言つても、そのおかげでキリトはほむらと出会えた。その事実に関して、キリトはキュウべえに対して感謝の気持ちを感じていた。

『フフフ、そうだね。君が何を願つたかは僕に記憶はないけど、その願いの果てに君が何を見せてくれるのか楽しみにしているよ』

魔法少女となつたキリトは、魔法少女の中で最強のチカラを手にしている。その事実を感じ取れるキュウべえは不敵に笑う。

最強の魔法少女と最大級の魔女。それらがぶつかれば激闘必至。それでも、キリトが勝利を手にするだろうとキュウべえは予測している。だが、どちらに転んだとしても自分たちの利益になることをキュウべえは理解している。

キリトが最強の魔法少女として最大の敵を倒してしまつたら、当然後は最悪の魔女になるしかない。それほどまでに魔力を消耗し、ソウルジェムに魔法を使った分だけの穢れが蓄えられ、キリトは魔女へとその姿を変貌させる。その時に生み出されるだろう、エネルギー量は莫大なモノで、それはおそらくキュウべえのエネルギー回

収ノルマを大幅に埋めてくれることだろう。

それにもしも、キリトが倒れることになつても、優しいまどかならば魔法少女となり、ワルブルギスの夜と戦つだろう。彼女もまた、キリトと同じく最強の魔法少女になれる素養を持っていますのだから。

『それじゃあ、期待しているよ』

白くて犬のように太い尻尾をフリフリと揺らしながら、キュウベえはその姿を消す。

それと同時に魔女の結界が崩れ始める。

「終わったか。ほむらのヤツ、しっかり田中さんを助けられると良いんだがな」

キリトことつて、まどかを、そしてまどかを救うほむらを救えれば、他のことを犠牲にしても良いのだが、それでもやはり知り合いか死ぬところは極力見たくないのだ。

それに友人が殺されればまどかが悲しむことになる。そつなつてらほむらも悲しむ。出来る限り他も救う。それぐらいの気休め程度しかキリトに出来ることはない。

キリトは一度、オレンジ色の空を仰ぐと、誰にも見られる前にその場から姿を消した。

## また違う未来 第1話（後書き）

真剣に誰か三人称の書き方を教えてください。

見ての通り、今話は文章がメチャクチャですよ。  
はあ……、前話と今話一人称で書きなおそつかな……。

そして、次話の投稿も遅れる可能性が高いです。

今話はレポートのせいで遅れましたが、さらにまたレポートを書け  
と言わ柔まして、非情にメンドクサイですが単位のために頑張りま  
す。

少年 向井キリトが魔法少女になったのは、実は身体は男であるのに心は女の子みたいなトランプジョンダー……日本語にすると性同一性障害、さらにわかりやすく言うとオカマであつたとか、そんな愉快な理由からではない。

単純に力を求めた結果と言えば良いのだろうか。  
キリトがキュウベえに願つたのは『運命を切り裂くチカラ』だつた。

運命と言つのは説明するまでもなく、まどかの死の運命であるし、それと同時にワルブルギスの夜を討ち倒すことの出来ないほむらの残酷な運命である。

それらを切り裂くのにはチカラが必要不可欠であつたために、キリトはそう願つた。

契約の果て、キュウベえに言われた通り魔法使いになる気満々であつたキリトであつたが、彼の思惑とは異なる結果となつてしまつた。それはキュウベえにも言えることである。

キリトがチカラを手にするにはどうすれば良いのだろうか？  
その疑問に答えることにしよう。なに、簡単なことだ。

キリトはまどかに準じるとまでは行かないものの、それでも魔力の塊であることは変わりない。しかし、彼が第一次成長期の少年であることで、契約して魔法使いになつても魔法少女一人分と同等のチカラしか発揮できない。いくら貯蔵量が多くても外部に出力する機能が脆弱では、その真価を発揮できない。

願つたのは『運命を切り裂くチカラ』。あまりにも分不相応な願いであつた。

だとするならば、外部に出力するチカラを強化してやればいいのだ。水道の蛇口を捻つて勢いが足りなければ、消防車についている

ホースを持つてくれれば良い。

その結果、キリトは魔力を外部に出力する最適な身体である第二次成長期の少女の身体を手にすることになった。

と、ここまではキリトは許容出来たのだ。

そもそもキリトはほむらのために全てを投げ捨てて、ワルブルギスの夜を討ち倒そうとしていた。だから、自分の身体が少女になつたことであるとか、なぜか現在位置が夢で見ていた自宅のある見滝原市でないどこかの地方都市であることもまだ良かつた。

だけれども、向井キリトといつ人間の記録がこの世界から消えてしまつたことは許容できるハズもなかつた。

自宅である建物の表札には『向井』とあるのに、その家の住人は両親であるのに、なぜか両親はキリトのことをまったく憶えていなかつた。そのため、頭のおかしい少女だと両親に勘違いされて危うく警察に通報されるところだつた。

これにはさすがのキリトも堪えた。そのすぐ後、廻り合つたキュウベえも、見滝原にやつとこさ廻りついた後に会つことの出来たほむらも、キリトのことを憶えてはいなかつた。

これには契約の際にまだ少年の身体であつたため、契約時に生じたエネルギーが少なく、本来なら記憶消去した上で記憶操作によってキリトの周りの人間の記憶を書きかえるのだが、それが出来ず記憶消去で止まつてしまつた。それでは矛盾が生じてしまつので、キリトが存在したという痕跡も全て消し去つて。

それを知らないキリトはパニックに陥りそうになるが、ほむらを救うことを強く意識することで、自分を押さえこんだ。それでも悲しんだりするわけだが。

「ああ、クソツ！」

清らかな鈴の音を鳴らしながら、キリトは踊るように日本刀を振

る。キリトが日本刀を振り切る度に使い魔は斬り裂かれ、その存在を滅殺される。

相変わらずの巫女服に十字のネックレスと言つ、宗教を馬鹿にしているのではないかと勘織つてしまふ衣装で魔女の結界内を突き進む。しかし、この巫女服がキリトの魔法少女としての衣装であるし、十字のネックレスを首から提げないという選択肢はキリトには選択できない。よつて、こんな格好になつてしまつてゐる。

誰も自分のことを憶えていない……その事実を一応は受け入れたキリトではあるが、それでも時々こうして心の中のモヤモヤを発散しなければならない。それは受け入れきれてないと言つことなのだが、そこら辺は気にしないことにしてゐるようだ。

魔女の結界内はスーパーの店内のような場所だつた。棚には商品の代わりに使い魔が並べられ、キリトが奥に進もうとする使い魔たちが棚から飛び出して襲つて來るのだ。

それにイライラをぶつけるようにキリトは日本刀を振り回すのだが、それが何度も繰り返されるにつれ、その行為自体にもキリトはイライラしてきた。

「いい加減に魔女を見つけたいところだな」

調味料の棚らしきところを右に曲がると、冷凍食品が陳列されている冷蔵庫が見えてくる。

冷凍食品のパッケージみたいな使い魔が襲つてきたので、邪魔くさそうに斬り捨てる。

「そう言えば、まだ店の裏側行つてないな」

そうと決まれば、と言つことで、店員の休憩スペースに続く扉を探しだし、躊躇うことなく中に入る。

キリトの予想通り、そこには異形の存在が俯き加減に佇んでいた。エプロンを着た人間と同じくらいの大きさの身体に異様に大きな頭部。いったい彼女は何に絶望したと言つのだろうか。

「まあ、結局のところは俺のために消えてもうわけなんだけど」

言つたのが早いか、斬り裂いたのが早いか、どちらにしても魔女は次の瞬間にはこの世から消されることになった。少し間をおいてから、まるで主の後を追うように結界が崩れ出した。

キリトは残されたグリーフシードを手早く回収すると、その場から立ち去った。

少し経つてからやつて来たマミー行や、ほむらに第三勢力かと言う疑惑を抱かせて……。

また違う未来 第二話（後書き）

サクッと書いたので、矛盾やおかしいところがあるかも。  
見つけたら、教えて下さると助かります。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7372s/>

---

魔法少女まどか マギカ マジか？

2011年10月9日15時32分発行